

Oracle® Collaboration Suite

リリース・ノート

リリース 2 (9.0.4.1.1) for Windows

部品番号 : B13732-02

2006 年 7 月

Oracle Collaboration Suite リリース・ノート, リリース 2 (9.0.4.1.1) for Windows

部品番号 : B13732-02

原本名 : Oracle Collaboration Suite Release Notes, Release 2 (9.0.4.1.1) for Windows

原本部品番号 : B12240-03

Copyright © 2004, 2006 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software-Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることが使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、および Retek は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	ix
対象読者	x
関連ドキュメント	x
表記規則	xi

1 Suite 全般の問題

ORCLADMIN のパスワード・エラー	1-2
シングル・ボックス・インストール	1-2
Windows Services が開いている場合の構成エラー	1-2
Apache.exe プロセスのループ	1-2
OCS_V2_PAGE_GROUP が表示できない	1-3
ポート 1810 から Oracle Enterprise Manager にアクセスできない	1-3
NTFS パーティションでの 8.3 形式ファイル名の作成	1-4
Oracle Internet Directory の Delegated Administration Service	1-4
Oracle Internet Directory サーバーのユーザーの検証	1-4
「RTC リポジトリ・スキーマのロック解除」ツールの停止	1-5
NETCA ディレクトリ・サーバー・エラー	1-5
Oracle9iAS Web Cache サーバー・エラー	1-5
データベースが未登録	1-5
「Infrastructure Use Phase 2」ツール	1-5
手動によるパッチ・セット 5 の適用	1-6
アップグレードのための手動による Single Sign-On の再登録	1-6
Single Sign-On のリダイレクション	1-6
Database Configuration Assistant のエラー	1-6
Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) のシード済 Information Storage データベースでの RAC の有効化	1-6

アップグレードされたアクティブな EM は「自動」への設定が必要	1-7
Oracle9iAS Portal がインストールされていない場合に Oracle Collaboration Suite で発生する エラー	1-8
Oracle Collaboration Suite Web Client	1-9
アップグレード時に Web Client Configuration Assistant で障害が発生	1-9
コンポーネントの URL の構成	1-9
コマンドラインからの Web Client Configuration Assistant の実行	1-10
Files ポートレットの自動インストールの失敗	1-11
Oracle Files と Web Client が異なるホストで構成されている場合	1-11
Oracle Files と Web Client が同一ホストで構成されている場合	1-11
Oracle Calendar のマスター・ノード	1-11
Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しない	1-12
シングル・サインオン写真の登録	1-12
ユーザー情報の作成または編集	1-12
ドキュメントの訂正	1-12
Information Store 用の Oracle Net Listener の確認および起動	1-12
Middle Tier 用の Oracle Net Listener の確認および起動	1-13
Middle Tier 用の SMTP リスナーの確認および起動	1-13

2 グローバリゼーション

Oracle Web Conferencing のギリシャ語のオンライン・ヘルプのエラー	2-2
Oracle Email の CTXSYS パスワードの検証	2-2
Web Client が韓国語ロケールで動作しない	2-2
インストールおよびアップグレードの言語サポート	2-2
NLS_LANG は AMERICAN_AMERICA.UTF8 に設定する必要がある	2-2
アラビア語用の双方向サポート	2-3
Web Conferencing Document Converter 用の言語サポート	2-3
Web Conferencing における「Host Name」の翻訳のエラー	2-3
Infrastructure および Information Store データベースのキャラクタ・セット	2-3
インターナショナル・ユーザー ID	2-4

3 Oracle Calendar

一般的な問題と回避策	3-2
Oracle Calendar Server	3-3
このリリースの新機能	3-3
既知の制限および回避策	3-4

このリリースで解決された制限	3-5
Oracle Calendar Administrator	3-5
既知の制限および回避策	3-5
ドキュメントの訂正	3-6
Oracle Calendar SDK	3-6
このリリースの新機能	3-6
このリリースで解決された制限	3-7
ドキュメントの訂正	3-7
Oracle Calendar アプリケーション・システム	3-8
Oracle Calendar Web Client	3-8
このリリースの新機能	3-8
既知の制限および回避策	3-9
このリリースで解決された制限	3-10
ドキュメントの訂正	3-12
Oracle Calendar Web Services	3-13
このリリースの新機能	3-13
Oracle Sync Server	3-13
このリリースの新機能	3-13
既知の制限および回避策	3-13
デバイス関連の問題	3-14
このリリースで解決された制限	3-16
Oracle Connector for Outlook	3-16
このリリースの新機能	3-16
既知の制限および回避策	3-17
このリリースで解決された制限	3-19
Oracle Calendar Desktop Client	3-20
Oracle Calendar Desktop Client for Windows	3-21
このリリースの新機能	3-21
既知の制限および回避策	3-21
このリリースで解決された制限	3-22
Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh	3-22
このリリースの新機能	3-22
既知の制限および回避策	3-24
このリリースで解決された制限	3-25
Oracle Calendar Desktop Client for Linux	3-26
このリリースの新機能	3-26
既知の制限および回避策	3-27

このリリースで解決された制限	3-27
Oracle Calendar Desktop Client for Solaris	3-28
このリリースの新機能	3-28
既知の制限および回避策	3-29
このリリースで解決された制限	3-29
Oracle Calendar Sync クライアント	3-29
Oracle Calendar Sync for Palm for Windows	3-30
このリリースの新機能	3-30
既知の制限および回避策	3-30
デバイス関連の問題	3-31
このリリースで解決された制限	3-31
Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh	3-31
このリリースの新機能	3-31
既知の制限および回避策	3-31
デバイス関連の問題	3-32
Oracle Calendar Sync for Pocket PC	3-32
このリリースの新機能	3-32
既知の制限および回避策	3-33
デバイス関連の問題	3-33
このリリースで解決された制限	3-33
クライアントの共存に関する動作	3-33

4 Oracle Email

このリリースの新機能	4-2
既知の問題	4-2
Oracle Email のスパム対策パラメータ	4-3
Oracle Email 移行ツール用の JDK 1.4.1	4-3
JDK 1.4.2	4-3
catalog.sh スクリプト	4-3
TargetDN 属性	4-4
Oracle Text	4-4
既知のバグ	4-6
管理	4-6
移行	4-9
サーバー	4-11
Oracle Webmail	4-13
ドキュメントの訂正	4-15

Oracle Email 管理者ガイド	4-15
「電子メール・クォータ / 追加クォータ」パラメータ	4-15
IMAP 統計	4-15
プロトコル・サーバーと Oracle Internet Directory の SSL の構成	4-16
表 9-5 リスト・サーバーのパラメータ	4-16
Webmail クライアントが IMAP で動作しない	4-16
Oracle Email Migration Tool Guide	4-16
Oracle Collaboration Suite ドキュメントの参照	4-16
第 2 章「Requirements Before Migration」	4-17
第 3 章「Migration Tasks」	4-18
付録 C	4-18
Oracle Email アプリケーション開発者ガイド	4-19
第 2 章「Java API リファレンス」	4-19
ディレクトリ管理コードの例	4-21
Oracle Email Java API Reference	4-21
OracleFolder addACI メソッド	4-21
単純なメッセージの追加	4-21
電子メールの自動終了 / 削除	4-22
ログインとフェッチの例で使用されている不正な名前のサンプル	4-23

5 Oracle Files

Oracle Files リリース 2 (9.0.4.3) の新機能	5-2
ワークフロー構成の拡張	5-2
ロシア語で使用可能な Oracle Files の Web UI と Oracle FileSync クライアント	5-2
カスタム・ワークフローの作成	5-2
Oracle Files ユーザー・インタフェースへのブランド情報の追加	5-3
マシンに障害発生後のドメイン・コントローラの信頼性の向上	5-3
自動ユーザー・プロビジョニング	5-4
サービス構成および Java メモリーのサイズ設定	5-4
Xmx 設定の計算	5-5
Xmx 設定の変更	5-5
サービス構成設定の調整	5-6
認証とシステム要件	5-7
クライアントの認証	5-7
NTFS	5-7
Web ブラウザ (Web ユーザー・インタフェースおよび Enterprise Manager Web サイト用)	5-9

FTP クライアント	5-9
AFP	5-9
NFS クライアント・サポート	5-10
WebDAV: Web フォルダ	5-10
WebDAV: Oracle FileSync クライアント	5-12
非推奨事項	5-12
AFP サポートへの変更	5-12
一般的な問題	5-12
ワークスペースの作成で発生するエラー	5-12
Windows XP での Web フォルダのマッピング	5-13
Internet Explorer を使用した HTML ファイルの保存	5-13
構成の問題	5-13
ワークフローの問題	5-13
カスタム・ワークフローの作成	5-13
LDAP パッケージ	5-14
複数のインスタンス	5-14
Oracle Workflow へのユーザーの提供	5-15
キャッシュの問題	5-15
Oracle Internet Directory の問題	5-16
ユーザー・プロビジョニング障害	5-16
グローバル化・サポートの問題	5-17
Internet Explorer でドキュメントにマルチバイトのファイル名を付けて保存する際のエラー	5-17
粗い太字フォントまたはイタリック・フォント	5-17
キャラクタ・セットの制限	5-17
ドキュメントの問題	5-18
Oracle Files の Web UI のフォント特性の変更	5-18
既知のバグ	5-19

6 Oracle Ultra Search

Ultra Search の新機能	6-2
Ultra Search の「ようこそ」ページ	6-2
デフォルトの Ultra Search インスタンス	6-3
ドキュメント検索オプションの制限	6-3
Complete Sample Query Application の翻訳	6-4
動的ページ索引付けの制御	6-4
Cookie のサポート	6-5

クローラ・キャッシュ削除の制御	6-5
INSO フィルタ使用環境の設定	6-5
既知のバグ	6-6

7 Oracle Voicemail & Fax

このリリースの新機能	7-2
既知のバグ	7-3

8 Oracle Web Conferencing

このリリースの新機能	8-2
インストールおよび構成の問題	8-2
インストール開始前の状態での再インストールと削除	8-3
データベースからの RTC リポジトリの削除	8-3
手動リカバリまたは再インストール	8-3
Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスの一部としての OC4J RTC アプリケーションの作成	8-6
Oracle HTTP Server の構成	8-7
Oracle9iAS Web Cache で PNG ファイルのイメージ圧縮をオフに設定	8-8
電子メールで送信される利用状況レポートの構成	8-8
カスタム・データベース使用時のデモのアップロード	8-9
ユーザー管理の問題	8-10
Oracle Internet Directory で新規ユーザーが作成される場合	8-10
Oracle Internet Directory で既存のユーザー情報が更新される場合	8-10
ユーザー名が更新される場合	8-10
名が更新される場合	8-11
姓が更新される場合	8-11
電子メール・アドレスが更新される場合	8-12
Oracle Internet Directory から既存のユーザーが削除される場合	8-12
Oracle Internet Directory で既存のユーザー・アカウントが削除後に再作成される場合	8-12
既知のバグ	8-13
ドキュメントの訂正	8-14
『Oracle Collaboration Suite Oracle Web Conferencing 利用ガイド』および Oracle Web Conferencing のクイック・チュートリアル	8-14
Oracle Web Conferencing 管理者ガイド	8-14

9 Oracle9iAS Wireless

このリリースの新機能	9-2
Oracle Hosted Voice Gateway	9-3
既知の制限	9-3
Wireless の電子メールによるタイムアウト・パラメータの変更	9-3
Portal に戻る URL の構成	9-4
Oracle Calendar	9-4
停止中と表示される Wireless のステータス	9-5
マルチバイト文字とワイヤレス通知	9-5
Wireless Webtool と Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダ登録の失敗	9-5
Microsoft Internet Explorer 使用時に発生する一般的なシングル・サインオン・エラー	9-6
外部リポジトリを持つ複数の ORACLE_HOME では使用できない Oracle Wireless プロセスの ステータス	9-6
サポートされない Jabber のマルチバイト・ユーザー名	9-7
Wireless & Voice の使用	9-7
アクセス情報	9-7
SMS、電子メールまたは双方向ポケットベルから Collaboration Suite にアクセスするための ASK コマンド	9-7
Calendar	9-7
アドレス帳	9-8
メール	9-8
FAX	9-9
ディレクトリ	9-9
ショート・メッセージ	9-9
Instant Messaging	9-10
ファイル	9-11
ドキュメントの訂正	9-12
メッセージングを使用可能にするための Oracle Wireless の構成	9-12
オンライン・ヘルプの表示	9-12
Wireless Configuration Assistant の障害	9-12

はじめに

ここでは、次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

このリリース・ノートは、Oracle Collaboration Suite を利用される方を対象としています。

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for Windows』
- 『Oracle Collaboration Suite クイック・インストレーション・ガイド for Windows』
- 『Oracle Calendar 管理者ガイド』
- 『Oracle Email 管理者ガイド』
- 『Oracle Email アプリケーション開発者ガイド』
- 『Oracle Email Migration Tool Guide』
- 『Oracle Collaboration Suite Oracle Voicemail & FAX 利用ガイド』
- 『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』
- 『Oracle Files 管理者ガイド』
- 『Oracle Files プランニング・ガイド』
- 『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』
- 『Oracle Voicemail & Fax 管理者ガイド』
- 『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- [本文の表記規則](#)
- [コード例の表記規則](#)
- [Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則](#)

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、 Recovery Manager キーワード、 SQL キーワード、 SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。	sqlplus と入力して、 SQL*Plus をオープンします。 パスワードは、 orapwd ファイルで指定します。 /disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。 hr.departments 表には、 department_id 、 department_name および location_id 列があります。 QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。 oe ユーザーとして接続します。

規則	意味	例
	注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。	<i>parallel_clause</i> を指定できます。 <i>Uold_release</i> .SQL を実行します。ここで、 <i>old_release</i> とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用する表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL (<i>digits</i> [, <i>precision</i>])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1 つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの 1 つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none">■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。■ コードの一部を繰り返すことができる。	CREATE TABLE ... AS <i>subquery</i> ; SELECT <i>col1</i> , <i>col2</i> , ... , <i>coln</i> FROM employees;

規則	意味	例
・ ・ ・	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。	SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fsl/dbs/tbs_01.dbf /fsl/dbs/tbs_02.dbf . . . /fsl/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にかぎり、表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大 / 小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせるものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロン (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	C:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレント・ディレクトリが表示されます。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAME_TNSListener

規則	意味	例
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	<p>Oracle8i より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。ORACLE_HOME ディレクトリの名前は、デフォルトでは次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ C:¥orant (Windows NT の場合)■ C:¥orawin98 (Windows 98 の場合) <p>このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:¥oracle です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに Oracle9i リリース 2 (9.2) をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:¥oracle¥ora90 に設定されます。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。</p> <p>このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。</p>	%ORACLE_HOME%¥rdbms¥admin ディレクトリへ移動します。

Suite 全般の問題

この章では、Oracle Collaboration Suite のすべてのコンポーネントに影響のある問題について説明します。この章の構成は次のとおりです。

- ORCLADMIN のパスワード・エラー
- シングル・ボックス・インストール
Windows Services が開いている場合の構成エラー
- Apache.exe プロセスのループ
- OCS_V2_PAGE_GROUP が表示できない
- ポート 1810 から Oracle Enterprise Manager にアクセスできない
- NTFS パーティションでの 8.3 形式ファイル名の作成
- Oracle Internet Directory の Delegated Administration Service
- Oracle Internet Directory サーバーのユーザーの検証
- 「RTC リポジトリ・スキーマのロック解除」ツールの停止
- NETCA ディレクトリ・サーバー・エラー
- Oracle9iAS Web Cache サーバー・エラー
- データベースが未登録
- 「Infrastructure Use Phase 2」ツール
- 手動によるパッチ・セット 5 の適用
- アップグレードのための手動による Single Sign-On の再登録
- Single Sign-On のリダイレクション
- Database Configuration Assistant のエラー

- Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) のシード済 Information Storage データベースでの RAC の有効化
- アップグレードされたアクティブな EM は「自動」への設定が必要
- Oracle9iAS Portal がインストールされていない場合に Oracle Collaboration Suite で発生するエラー
- Oracle Collaboration Suite Web Client
- Oracle Calendar のマスター・ノード
- Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しない
- シングル・サインオン写真の登録
- ユーザー情報の作成または編集
- ドキュメントの訂正

ORCLADMIN のパスワード・エラー

orcladmin のパスワードを変更すると、「無効な数値エラー」が発生します。

シングル・ボックス・インストール

シングル・ボックス・インストールの実行中に、Microsoft.net または IBM WebSphere を同じボックス上で稼働させることはできません。

Windows Services が開いている場合の構成エラー

コンポーネントのインストール、またはコンポーネントのリリース 1 からリリース 2 へのアップグレードの際には、Windows Services（コントロール・パネルからアクセス）が閉じていることを確認してください。閉じていないと、構成エラーが発生することがあります。
(3816626)

Apache.exe プロセスのループ

apache.exe の子プロセスでは、より多くの CPU が消費される場合、Oracle HTTP Server に対して新しいリクエストを実行できません。

回避策： httpd.conf ファイルの次の行をコメント行にし、dms モジュールを削除します。

```
LoadModule dms_module modules/ApacheModuleDMS.dll
AddModule mod_dms.c
```

OCS_V2_PAGE_GROUP が表示できない

OCS_V2_PAGE_GROUP は、アカウント情報ページから表示できません。

回避策：

1. Oracle Portal に orcladmin ユーザーとしてログインします。
2. test1 (OCS_Username) ユーザーのデフォルトのホーム・ページを設定します。
3. 「ビルダー」をクリックします。
4. 「管理」をクリックします。
5. 「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレットで、test1 (OCS_Username) と入力します。
6. 「編集」をクリックします。
7. デフォルト・グループを OCS_PORTAL_USERS に設定します。
8. 「OK」をクリックします。
9. 「Portal ユーザー・プロファイル」ポートレットで、OCS_PORTAL_USERS と入力します。
10. 「編集」をクリックします。
11. 「LOV」をクリックします。
12. OCS_V2_PAGE_GROUP を開きます。
13. 「オブジェクトを戻す」を選択します。
14. 「OK」をクリックします。

ポート 1810 から Oracle Enterprise Manager にアクセスできない

ポート 1810 は Oracle Calendar Server で使用されているため、このポートから Oracle Enterprise Manager にアクセスできません。

回避策：

1. Oracle Calendar Server を停止します。
`%ORACLE_HOME%\ocal\bin\unistop`
2. Oracle Enterprise Manager を再起動または起動します。
`%ORACLE_HOME%\bin\emctl start`
3. Oracle Calendar Server を起動します。
`%ORACLE_HOME%\ocal\bin\unistart`

NTFS パーティションでの 8.3 形式ファイル名の作成

Windows NT 4.0 の NTFS パーティションで 8.3 形式ファイル名の作成機能を無効にすると、Windows の GetShortPathName() 関数を使用するプログラムはエラーを受け取ります。

回避策： 8.3 形式ファイル名の作成機能を無効にしないでください。

Oracle Internet Directory の Delegated Administration Service

Oracle Internet Directory の Delegated Administration Service エラーが中国語（簡体字）ロケールで発生します。

回避策：

1. %ORACLE_HOME%\Apache\Apache\conf\httpd.conf の次の行をコメント行でなくします。

```
include "ORACLE_HOME%\Apache\Apache\conf\mod_osso.conf"
```

2. Oracle Enterprise Manager から HTTP サーバーを再起動します。

Oracle Internet Directory サーバーのユーザーの検証

Oracle Internet Directory サーバーでは、接続数が最大数を超過している可能性があるため、シングル・ボックス・インストール後にユーザーを検証できません。この問題は、Oracle Internet Directory サーバーに接続するアプリケーションが接続を解放しないために発生することがあります。

回避策 1:

1. 2 つのサーバー・プロセス・モードで Oracle Internet Directory を再起動します。これにより、2 倍の接続数を処理できます。

```
% oidmon connect=connect_string start
% oidctl connect=connect_string server=oidldapd instance=1 flags="server=2"
start
```

2. すべての opmn プロセスおよび Oracle Internet Directory プロセスを停止します。
3. opmn プロセスを起動します。

回避策 2:

前述の回避策 1 では問題が解決しなかった場合、次のパッチを適用します。

- iAS SSO パッチ (iAS リリース 2 (9.0.2) のバグ 2673497)
- RDBMS JDBC パッチ (RDBMS 9.0.1.4.5 のバグ 2931090)
- iAS Oracle Internet Directory パッチ (iAS リリース 2 (9.0.2.3) のバグ 2876095)

「RTC リポジトリ・スキーマのロック解除」 ツールの停止

「RTC リポジトリ・スキーマのロック解除」 ツールは、RTC スキーマ・スクリプトがデータベースに接続できないために停止します。

回避策：

1. Windows のタスク・マネージャから sqlplus プロセスを終了します。
2. Oracle Universal Installer から Configuration Assistant を再試行します。

NETCA ディレクトリ・サーバー・エラー

Middle-Tier が中国語（繁体字）ローカルで構成されると、NETCA はディレクトリ・サービス登録について機能しません。

Oracle9iAS Web Cache サーバー・エラー

Oracle Calendar Web Client サーバーの実行時に、Oracle9iAS Web Cache サーバー・エラーが発生します。

データベースが未登録

Database Configuration Assistant (DBCA) がスタンドアロンとして実行されている場合、データベースは登録されていません。

回避策： Oracle Directory Manager の OracleDBCreators グループのメンバーであるユーザー DN、または cn=orcladmin ユーザー DN を使用してデータベースを登録します。

「Infrastructure Use Phase 2」 ツール

「Infrastructure Use Phase 2」 ツールは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) Middle-Tier のインストール時に停止する場合があります。

回避策：

1. コマンド・ウィンドウを閉じます。
2. 「Infrastructure Use Phase 2」 ツールを再試行します。

手動によるパッチ・セット 5 の適用

Oracle9i (9.0.1.4.0) パッチ・セット 5 を手動で適用する場合、パッチのインストール手順の手順 4 を実行しないでください。

アップグレードのための手動による Single Sign-On の再登録

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) へのアップグレード後、Single Sign-On に登録されたパートナ・アプリケーションは手動で再登録する必要があります。

Single Sign-On のリダイレクション

`http://hostname:portno/files/app` などの Oracle Collaboration Suite コンポーネントの URL にアクセスすると、次の Single Sign-On のリダイレクション・エラーが発生します。

No Response from application server. There was no response from the application web server for the page you requested. Please notify the site's webmaster and try your request again later.

回避策：

Middle-Tier を SSO Server に再登録します。

Database Configuration Assistant のエラー

Database Configuration Assistant (DBCA) が Oracle Universal Installer またはコマンドラインから起動されると、次のエラーが発生します。

Wallet を開けませんでした。

このエラーは無視してかまいません。

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) のシード済 Information Storage データベースでの RAC の有効化

現在、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) のシード済 Information Storage データベースでは RAC を有効化できません。

回避策： Oracle9i リリース 2 (9.2.0.1) の CD から、RAC が有効化されたリリース 2 (9.2.0.1) のカスタム・データベースをインストールし、リリース 2 (9.2.0.3) のパッチ・セットを適用します。

アップグレードされたアクティブな EM は「自動」への設定が必要

アクティブな EM が Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の ORACLE_HOME から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) の ORACLE_HOME にアップグレードされると、次の設定がサービスで行われません。

- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) EM インスタンス = 手動
- Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) EM インスタンス = 自動

回避策：

ホストに次のものがすべて含まれている場合のみ、次の手順を実行します。

- Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Middle-Tier
 - アクティブな Oracle Enterprise Manager の ORACLE_HOME である Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Middle-Tier の ORACLE_HOME
 - ocsua.sh スクリプトによりアップグレードされ、アクティブな EM が Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) Middle-Tier に変更されている Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) Middle-Tier
1. 「スタート」メニューから、「設定」→「コントロール パネル」をクリックします。
 2. 「管理ツール」をクリックします。
 3. 「サービス」をダブルクリックします。
 4. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の ORACLE_HOME の EM Service を「手動」に設定します。

Window 2000 および Windows XP の場合：

- a. 「Oracle Collaboration Suite Release 1 EM Website Service」を右クリックします。
- b. 「プロパティ」をクリックします。
- c. 「スタートアップの種類」を「手動」に設定します。
- d. 「OK」をクリックします。

Windows NT の場合：

- a. 「Oracle Collaboration Suite Release 1 EM Website Service」→「スタートアップ」を右クリックします。
- b. 「スタートアップの種類」を「手動」に設定します。
- c. 「OK」をクリックします。

5. Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の ORACLE_HOME の EM Service を「自動」に設定します。

Window 2000 および Windows XP の場合 :

- a. 「Oracle Collaboration Suite Release 1 EM Website Service」を右クリックします。
- b. 「プロパティ」をクリックします。
- c. 「スタートアップの種類」を「自動」に変更します。
- d. 「OK」をクリックします。

Windows NT の場合 :

- a. 「Oracle Collaboration Suite Release 1 EM Website Service」→「スタートアップ」を右クリックします。
- b. 「スタートアップの種類」を「自動」に設定します。
- c. 「OK」をクリックします。

6. 「サービス」ウィンドウを閉じます。

Oracle9iAS Portal がインストールされていない場合に Oracle Collaboration Suite で発生するエラー

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール時に、Oracle Universal Installer (OUI) で Oracle9iAS Portal の構成を行うかどうかをユーザーが決定できます。Oracle9iAS Portal は Oracle Collaboration Suite のオプション・コンポーネントですが、少なくとも 1 つの Middle-Tier で Oracle9iAS Portal の構成を行わないと、Web Client でリンクが破損します。たとえば、次のようになります。

- デフォルトの「ようこそ」ページ (index.html) の「エンドユーザー・ログイン」セクションで、「Oracle Collaboration Suite にログオン」をクリックすると、エラーが発生します。
- Oracle Email や Oracle Files などの Web アプリケーションで「Portal に戻る」グローバル・リンクをクリックすると、エラーが発生します。

少なくとも 1 つの Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で、Oracle9iAS Portal の構成を行うことをお勧めします。Oracle9iAS Portal は、Oracle Collaboration Suite の Web アプリケーションにアクセスするための便利なランチ・パッドとなります。

注意： Oracle9iAS Portal の構成は、Oracle Collaboration Suite Web Client を構成する上での必須の前提条件です。

Oracle9iAS Portal の構成をインストールの一環として行わない場合は、Oracle Email、Oracle Files、Oracle Calendar などの各種 Web アプリケーションを直接起動するための URL を次のファイルで確認できます。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources\
webclient.properties
```

Oracle Collaboration Suite Web Client

この項では、Oracle Collaboration Suite Web Client の問題について説明します。

アップグレード時に Web Client Configuration Assistant で障害が発生

回避策： 次の手順に示すように、Web Client Configuration Assistant をコマンドラインから手動で起動します。

Web Client Configuration Assistant を起動する前に、Oracle9iAS Portal 中間層がインストールまたはアップグレードされ、構成されていることを手動で確認します。

Web Client のインストール時に、Oracle Universal Installer でアプリケーションのホスト名とポート番号を指定した場合は、「[コンポーネントの URL の構成](#)」をスキップします。

コンポーネントの URL の構成

1. %ORACLE_HOME%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources ディレクトリの webclient.properties ファイルを変更して、構成済の各コンポーネント（Oracle Email、Oracle Files、Oracle Calendar など）の起動 URL を設定します。

webclient.properties ファイルには、Oracle Collaboration Suite のコンポーネントごとに次の 3 つの URL が含まれています。

- ヘルプ・ページの URL
- アプリケーションの起動 URL
- ポートレット・プロバイダの URL

2. 構成するコンポーネントごとに、3 つの URL すべてのホスト名とポート番号のトークンを置き換えます。

Oracle Calendar をリリース 2 (9.0.4.1) にアップグレードする場合、次の手順を実行して、Oracle Calendar リリース 1 (9.0.3) をポートレットとして使用可能にします。

- a. Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1) Middle-Tier の %ORACLE_HOME%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources ディレクトリにある webclient.properties ファイルを開きます。

- b. 次の記述を探します。

```
calendar=http://%CALENDAR_HOST%:%CALENDAR_PORT%/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
```

- c. 前の記述を次の記述に置き換えます。

```
calendar=http://%CALENDAR_HOST%:%CALENDAR_PORT%/fcgi-bin/owc  
/lexacal.fcgi?go=login
```

- d. 次の記述を探します。

```
calendar.provider=http://%WEBCCLIENT_HOST%:%WEBCCLIENT_PORT%/webclient-  
calendar/servlet/soaprouter
```

- e. 前の記述を次の記述に置き換えます。

```
calendar.provider= http://%WIRELESS_HOST%:%WIRELESS_PORT%/marconi  
/servlet/soaprouter
```

コマンドラインからの Web Client Configuration Assistant の実行

次のコマンドを入力します。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\bin\webclient_installer.bat Oracle9iAS_Portal_user_name  
Oracle9iAS_Portal_user_password -complete
```

Oracle9iAS Portal のスキーマ名、パスワードおよび接続文字列の情報がわかっている場合は、Configuration Assistant を次のように起動できます。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\bin\webclient_installer.bat Oracle9iAS_Portal_user_name  
Oracle9iAS_Portal_user_password -complete -s  
schema -p password -c  
connect_string
```

次に各変数の意味を示します。

- schema: Oracle9iAS Portal の Oracle データベース・アカウント。
- password: Oracle9iAS Portal のアカウント・パスワード。
- connect_string: Oracle9iAS Portal のリポジトリがインストールされているデータベース・インスタンスへの接続文字列。 *host_name:port:SID* の形式で指定します。

Files ポートレットの自動インストールの失敗

デフォルトでは、Oracle Files Middle-Tier のインストール後に Oracle Files ドメインは起動されません。このため、Web Client Configuration Assistant は Web Client の構成中に Files ポートレットと通信できず、Files ポートレットの自動登録が失敗する場合があります。

Oracle Files と Web Client が異なるホストで構成されている場合

Oracle Files と Web Client が異なるホストで構成されている場合、必ず Web Client を構成する前に Oracle Files ドメインを起動してください。

関連資料： 詳細は、『Oracle Collaboration Suite インストールガイドおよび構成ガイド for Windows』の「Oracle Files の構成」の章を参照してください。

Oracle Files と Web Client が同一ホストで構成されている場合

Oracle Files と Web Client が同じインストーラ・セッションにおいて同一ホストで構成されている場合、Oracle Files ポートレットの自動登録は失敗します。この場合は、次のようにします。

1. Oracle Files ドメインを起動します。

関連資料： 詳細は、『Oracle Collaboration Suite インストールガイドおよび構成ガイド for Windows』の「Oracle Files の構成」の章を参照してください。

2. Oracle Files 関連の URL が、`%ORACLE_HOME%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources\webclient.properties` ファイルで正しく設定されていることを確認します。
3. 次のコマンドラインから、Web Client Configuration Assistant を再実行します。

```
%ORACLE_HOME%\webclient\bin\webclient_installer.bat
```

Oracle Calendar のマスター・ノード

インストール中に「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「いいえ」を選択すると、インストールは続行されません。必要な場合は「はい」を選択し、このノードをスレーブ・ノードにするため、[CLUSTER] セクションをサーバーの `unison.ini` ファイルから削除する必要があります。次に、このノードをマスター・ノードに接続する必要があります。

関連資料： 詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しない

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) Infrastructure のインストール中に、Oracle Enterprise Manager for Oracle Email が起動しません。

回避策：

Infrastructure と Middle-Tier で次の手順を実行します。

1. ORACLE_HOME を設定します。
2. %ORACLE_HOME%\oes\bin\install_umemd.bat スクリプトを実行します。
3. Oracle Enterprise Manager を再起動します。

```
emctl start
```

シングル・サインオン写真の登録

現行リリースでは、シングル・サインオン・ユーザーの写真はアップロードできません。

ユーザー情報の作成または編集

Delegated Administration Service の「リソース・アクセス情報」画面で「作成」または「編集」ボタンをクリックすると、記入済の列の値が消去されます。この問題を修正するには、ユーザー・リソース情報の設定後に、ユーザー列を入力します。

ドキュメントの訂正

この項では、『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for Windows』におけるドキュメントの問題について説明します。

Information Store 用の Oracle Net Listener の確認および起動

手順 2 では、listener_es ではなく listener が必要です。

1. 「サービス」アイコンをクリックします。
2. ローカル・サービスのリストから、listener で終わるサービスを探します。
3. サービスが実行されていない場合は、リスナー名を右クリックし、「開始」または「再起動」をクリックします。

リスナーを手動で開始するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\lsnrctl start
```

Middle Tier 用の Oracle Net Listener の確認および起動

リスナーが実行中であることを確認するには、次のようにします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\lsnrctl status listener_es
```

Middle Tier 用の SMTP リスナーの確認および起動

リスナーを開始するには、次のようにします。

1. 「サービス」アイコンをクリックします。
2. ローカル・サービスのリストから、listener_es で終わるサービスを探します。
3. サービスが実行されていない場合は、リスナー名を右クリックし、「開始」または「再起動」をクリックします。

グローバリゼーション

この章では、多言語サポート関連の問題について説明します。

この章の構成は次のとおりです。

- [Oracle Web Conferencing のギリシャ語のオンライン・ヘルプのエラー](#)
- [Oracle Email の CTXSYS パスワードの検証](#)
- [Web Client が韓国語ロケールで動作しない](#)
- [インストールおよびアップグレードの言語サポート](#)
- [NLS_LANG は AMERICAN_AMERICA.UTF8 に設定する必要がある](#)
- [アラビア語用の双方向サポート](#)
- [Web Conferencing Document Converter 用の言語サポート](#)
- [Web Conferencing における「Host Name」の翻訳のエラー](#)
- [Infrastructure および Information Store データベースのキャラクタ・セット](#)
- [インターナショナル・ユーザー ID](#)

Oracle Web Conferencing のギリシャ語のオンライン・ヘルプのエラー

ヘルプのアイコンをクリックすると、「500 - 内部サーバー・エラー」が発生します。

回避策： ブラウザのエンコードをギリシャ語に手動で変更します。

Oracle Email の CTXSYS パスワードの検証

CTXSYS パスワードの検証のエラー・メッセージ用の翻訳文字列は、Oracle Email の `umconfig.bat` ファイルにありません。

Web Client が韓国語ロケールで動作しない

韓国語の Windows 2000 で Internet Explorer を使用している場合、Web Client が動作しないことがあります。

インストールおよびアップグレードの言語サポート

インストール時には、製品言語選択リストによって、どの言語がインストールされるかが決まります。Infrastructure には Middle-Tier に選択する言語と同じ言語を選択することをお勧めします。言語はインストール後に追加または削除できないことに注意してください。

注意： インストール済の言語を再インストールすると、リポジトリが壊れます。たとえば、Single Sign-on Server ですでに日本語をサポートしている場合、日本語を再インストールしないでください。

NLS_LANG は AMERICAN_AMERICA.UTF8 に設定する必要がある

NLS_LANG パラメータは、マルチバイトのメッセージとフォルダをバックアップおよびリストアするために、AMERICAN_AMERICA.UTF8 に設定する必要があります。

アラビア語用の双方向サポート

Internet Explorer 5.5 以上のみが、双方向のユーザー・インタフェースをサポートします。

Web Conferencing Document Converter 用の言語サポート

Web Conferencing Document Converter 用の言語サポートを有効にするには、対応する言語オプションを Microsoft Office で有効にする必要があります。次のメニューを選択すると、オプションを設定できます。

「スタート」→「プログラム」→「Microsoft Office ツール」→「Microsoft Office 言語設定」

Web Conferencing における「Host Name」の翻訳のエラー

Oracle Web Conferencing 構成で、「Host Name」の翻訳が「開催者名」になっていますが、正しくは「ホスト・マシン」です。

Infrastructure および Information Store データベースのキャラクタ・セット

Oracle Collaboration Suite の Infrastructure および Information Store 用のデータベース・キャラクタ・セットとしては、Unicode UTF8 の使用をお勧めします。Unicode の使用により、グローバルなコラボレーション環境で様々な言語やエンコーディングが適切に処理されることが保証されます。Unicode UTF8 は、デフォルトで Infrastructure データベースと Information Storage データベースにインストールされます。

既存の Infrastructure データベースと Information Storage データベースを Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) にアップグレードすると、その他のキャラクタ・セットがサポートされます。Information Store については、特定のキャラクタ・セットを使用するカスタム・データベースを作成するという方法もあります。

国際ナショナル・ユーザー ID

Oracle Collaboration Suite では、一部の例外を除き、国際ナショナル非 ASCII ユーザー ID をサポートしています。

- Oracle Workflow および Oracle Files WebDAV (Web Folders) のどちらも、国際ナショナル・ユーザー ID はサポートしていません。
- メール管理 Web インタフェースを使用して、国際ナショナル・ユーザー ID 用のメール・アカウントを作成することはできません。かわりに、コマンドライン・ツール oesucr を次のように使用します。

1. UTF-8 エンコーディングを使用して、ユーザー・レコード・ファイル nonascii.txt を用意します。

```
mail=testuser1@us.oracle.com
orclmailquota=400000000
baseuserdn=cn=[non-ascii userid here],cn=users,o=oracle,dc=com
```

2. oesucr を実行します。

```
oesucr nonascii.txt -encoding=UTF-8
```

Oracle Calendar

この章では、Oracle Calendar のコンポーネントの新機能と既知の制限について説明します。

- 一般的な問題と回避策
- Oracle Calendar Server
- Oracle Calendar Administrator
- Oracle Calendar SDK
- Oracle Calendar アプリケーション・システム
- Oracle Connector for Outlook
- Oracle Calendar Desktop Client
- Oracle Calendar Sync クライアント
- クライアントの共存に関する動作

一般的な問題と回避策

FastCGI ソンビ・プロセス： Oracle HTTP Server または Apache Web Server を停止した後に、Calendar Web Client (`ocas.fcgi/ochecklet.fcgi`) を正常に停止できない場合があります。(3322285)

この問題を解決するパッチは、Oracle Metalink で入手できます。

ポートの競合： ポート番号を割り当てるために Windows で使用されるメソッドが原因で、使用するように構成されているポートがすでに Calendar Server によって使用されているために、Enterprise Manager を起動できないことがあります。(3253824)

回避策：

1. Calendar Server を停止します。
2. Enterprise Manager を起動（または再起動）します。
3. Calendar Server を再起動します。

アップグレード時の Calendar の翻訳修正の適用： Oracle Collaboration Suite をリリース 1 (9.0.3) からリリース 2 (9.0.4) にアップグレードする場合、バグ 2933426 およびバグ 3216391（韓国語の月の名称が英語で表示される）に対する修正を適用するために、次の手順を Infrastructure および Middle-Tier で実行する必要があります。

1. データベース、リスナー、HTTP サーバー、OC4J など、すべてのインスタンスを停止します。
2. `%ORACLE_HOME%\ocommon\nls\admin\data` 内のすべてのファイルをバックアップします。
3. `NLSRTL.zip` をディスク 1 から `patch` ディレクトリにコピーします。
4. `zip` ファイルを解凍し、`%ORACLE_HOME%\ocommon\nls\admin\data` 内のファイルを置き換えます。
5. すべてのインスタンスを再起動します。

Oracle Calendar Server

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

Oracle Calendar Server のこのリリースには、次の新機能が追加されました。

パフォーマンスとスケーラビリティ

- 複数の全社的サービス・デーモンまたはサービス
- Solaris および HP のスレッド・バージョン
- 小さなトランザクションの最適化
- イベント・データベース外のストア追加

高可用性

- サーバー起動中に常時チェック・モードで `unidbfix` を実行
- 異なるノードで同時に `unidbfix` を実行
- サーバー実行中にノードを起動および停止
- 停止ノードで `unidbfix` 修復を実行
- バックアップ時のログインが可能

拡張管理機能

- 管理権限の委譲
- Web ベースの Calendar Administrator の大幅アップグレード
 - 新しいロック・アンド・フィール
 - ユーザー、リソース、イベント・カレンダー、グループ、ノードおよびサーバーの管理
- サーバー機能のリモート起動および停止
- より多くの属性を制御するための `uniuser` (ユーザー・ディレクトリ属性、リマインダ、ユーザー設定、非アクティブ・アカウント)、`uniadminrights` (管理権限)、`uniaccessrights` (指定権限を含むアクセス権限) および `unigroup` (グループ) ユーティリティ

- シングルユーザー・リストア
- ユーザー削除時のイベント所有権の委譲
- インポートとエクスポートのための unicpin と unicpout にかわる uniical ユーティリティ

ディレクトリ・サポート

- 動的 LDAP グループ
- OpenLDAP
- GSSAPI や SASL などの非パスワードベースの認証に対する LDAP サポート
- ディレクトリに対して必要なアクセス回数の削減
- すべてのプラットフォームに対して SSL 対応の LDAP ライブラリ

他の拡張機能（クライアント・サポート必須）

- リモートの代理
- ノード間のグループのレプリケーション
- リソースごとの二重予約制御
- 予約されたリソースに対する自動確認応答（リソース承認）

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Server に関する既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- **代理：** Calendar Server の内部ディレクトリ・インストールのアップグレード後、リモート代理機能が機能しないことがあります。この問題を解決するには、アップグレード後に unirmsync ユーティリティを実行して、必須情報をリモート・ノードに複製します。

関連資料： 詳細は、『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』を参照してください。

- **壊れた ini ファイル：** Oracle Calendar Server がマルチバイト言語でインストールされている場合、category.ini ファイルと categorytype.ini ファイルが壊れています。この問題を解決するには、category.ini.sbs を category.ini にコピーし、categorytype.ini.sbs を categorytype.ini にコピーします。(3016058)
- **カレンダー・ノードの再起動：** Calendar Administrator を使用してカレンダー・ノードを停止した場合、そのノードを Calendar Administrator を使用して再起動することはできません。回避策： unistart を使用して再起動します。

- **Calendar Server のホスト名：** Calendar Server のホスト名（ドメイン名は除く）は、24 文字以内にする必要があります。(3004315)
- **マスター・ノード：** インストール中に「Oracle Calendar のマスター・ノード」画面で「いいえ」を選択すると、インストールは続行されません。必要な場合は「はい」を選択し、このノードをスレーブ・ノードにするため、[CLUSTER] セクションをサーバーの unison.ini ファイルから削除する必要があります。

関連資料： このノードをマスター・ノードに接続する方法の詳細は、『Oracle Calendar 管理者ガイド』を参照してください。

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Calendar Server で解決された制限を列挙します。

- Calendar Administrator によって別のユーザーに予定表を転送できませんでした。
- Calendar Administrator からは休日を管理できませんでした。
- Calendar Administrator を使用して、イベント・カレンダーを作成できませんでした。
- Calendar Administrator を使用して、リソースの稼働時間を変更できませんでした。
- リモート・クライアントでサーバーやノードの起動と停止ができませんでした。

Oracle Calendar Administrator

この項の内容は次のとおりです。

- [既知の制限および回避策](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

既知の制限および回避策

セキュリティ証明書における問題： Oracle Calendar Administrator への安全な接続をオープンする際に、証明書の信頼性が確認できないという警告がブラウザに表示されることがあります。これは、認定されている認証局のものではないデフォルトの証明書が Oracle HTTP Server に含まれているために発生します。

次のいずれかに従ってください。

- Oracle HTTP Server のデフォルトの証明書を認定されている認証局の本物の証明書に置き換えます。
- この警告は無視しても問題ありません。デフォルトの証明書が確認できなくても、接続では強力な暗号化が使用されます。

ドキュメントの訂正

Nodes.ini ファイル：『Oracle Calendar 管理者ガイド』の第7章の「接続およびルール」には、次の情報を提供する注記が記載されていなければなりません。

「nodes.ini ファイルに絶対ルールと相対ルールを適用する場合、絶対ルールを相対ルールの前に指定しなければなりません。」(2811823)

Oracle Calendar SDK

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [このリリースで解決された制限](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

このリリースの新機能

Oracle Calendar SDK のこのリリースには、次の新機能が追加されました。

- タスク操作 (VTODO オブジェクト)
- 接続操作 (VCARD オブジェクト)
- JNI (Java 固有インタフェース) 対応 Java クラス
- リモート代理操作
- 接続プーリング

Java クラスが組み込まれたことにより、以前はサード・パーティによって実装されていた Java の実装が容易になります。

接続プーリング機能により、SDK で使用される接続モデルの構成オプションが追加されました。これにより、各種アプリケーション（特に Web ベースおよびマルチスレッド環境）の実装時に、リソースの利用と効率が大幅に向上し、既存の接続の再使用を促進します。

古い CAPI イベント関数が、新しい CSDK 関数と入れ替わりました。すでに CAPI 関数を使用しているユーザーは、次の iCalendar プロパティのいずれかに依存している場合、サーバー上でユーティリティ `unifhconv` を実行する必要があります。

- X-*（すべての X- プロパティ）
- SEQUENCE
- RESOURCES
- RELATED-TO
- CONTACT

- URL
- ATTENDEE（出席者がカレンダーのユーザーでない場合、たとえば電子メール・アドレスのみで招待されている場合など）

このリリースで解決された制限

- 接続プールのブロック動作が無効になっていました。接続数が最大数（`max_users` で設定）に達しているときに新しいサーバー接続を試みると、接続が使用可能になるまで待つかわりに、エラーが表示されました。（2989379）
- 接続プール・エラーのコードが、`CAPIStatus` 値の `CAPI_STAT_LIBRARY_INTERNAL_COSMICRAY` に正しくマップされていませんでした。（2889348）
- サーバー接続が失われると、切断された接続は接続プールから解放されないため、後続のコールが失敗する原因になりました。（2898775）

ドキュメントの訂正

- **UNIUSER ユーティリティ**：『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 F の「UNIUSER」には、`uniuser` ユーティリティに関して、`-s` オプションを付けて複数の引数を使用できるという記述がありますが、これは誤りです。`-s` オプションについての正しい説明は以下のとおりです。

`-s` オプションの後に単一のセクション名を指定します（たとえば「GEN」は GEN という名前のセクションを指定します）。一度に指定できるセクションは 1 つです。複数のセクションを適用するには、`uniuser` ユーティリティを複数回実行しなければなりません。（3406721）

- **[LIMITS] autocontrol パラメータ**：『Oracle Calendar リファレンス・マニュアル』の付録 C では、[LIMITS] `autocontrol` パラメータに関して、[LCK] `lck_users` パラメータに依存するという記述がありますが、これは誤りです。[LCK] `lck_users` パラメータは、Oracle Calendar 9.0.4 ではすでに有効ではなく、[ENG] `maxsessions` パラメータに置き換わっています。したがって、正しい記述は次のようになります。

「この値が [ENG]`maxsessions`/60 未満の場合、[ENG]`maxsessions`/60 の値が優先されます（ただし、最大値は 45）。たとえば、`autocontrol = 15` で [ENG]`maxsessions = 1200` の場合、20（つまり、1200 を 60 で除算した値）分経過するまで、リフレッシュは実行されません。」（3500967）

Oracle Calendar アプリケーション・システム

この項では、次の製品に関する情報を提供します。

- [Oracle Calendar Web Client](#)
- [Oracle Calendar Web Services](#)
- [Oracle Sync Server](#)

Oracle Calendar Web Client

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Web Client の新機能を列挙します。

- 新しいスケジューラでは、会議で複数のユーザーやリソースが使用可能な場合に、効率的な検索方法を提供します。つまり、リソース・スケジューリング・メカニズムにより、代理承認が必要なリソースの階層検索および自動ワークフローが可能になります。ユーザーは、人およびリソースの詳細も表示できます。
- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。
- Oracle Web Conferencing のサポート。ユーザーは、Web 会議への参加や Web 会議の作成を Web Client から行うことができます。
- 新しい代理機能では、次のものがサポートされています。
 - リソースの代理
 - イベント・カレンダーの代理
 - リモートの代理
- 通知およびワイヤレスの作業環境への変更は、Calendar Desktop Client に適用されます。
- 「会議」、「メモ」、「終日イベント」にデフォルト・リマインダの設定を指定できます。
- 24 時間の会議をサポートします。

- グローバル・ツールバーから Calendar Administrator へのリンク（サーバー管理権限を持つユーザーの場合）。
- ユーザーは日表示または週表示に表示される時間を設定できます。
- 追加言語として、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポルトガル語（ブラジル）、ポルトガル語、スウェーデン語、スペイン語、中国語（簡体字）、中国語（繁体字）およびトルコ語のサポート。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Web Client の既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- **ファイルの添付：**
 - － サーバーにファイルをアップロードした後で、ユーザーが「OK」をクリックせずにブラウザ・ウィンドウを閉じた場合、そのファイルはサーバーの一時ディレクトリに残ったままになります。(2973763)
 - － あるユーザーの予定表を完全な表示権限により表示し、会議への添付ファイルを開こうとすると、セキュリティ違反のエラー・メッセージが表示されます。(2983094)
- **マスター・ノード接続の確立：** スレーブ・ノードが使用不可の場合、Oracle Calendar アプリケーション・システムからマスター・ノードへの接続が確立されないことがあります。**回避策：** `ocas.conf` の [Connectionconfig] セクションに `openallnodes = FALSE` を設定します。
- **ワイヤレス・リマインダ・オプション：** 「エントリ・デフォルト」作業環境では、ワイヤレス作業環境が無効の場合でも、ワイヤレス・リマインダ・オプションが使用可能です。(2975055)
- **Netscape または Mozilla の問題：**
 - － **Netscape 6.2:** 予定表を正しく印刷するには、Web Client の「表示設定」で余白のサイズを 1 インチに設定する必要があります。(2861543)
 - － **Netscape 6.x:** 一部のエラー・ページで「前に戻る」リンクが機能しません。これは Netscape の問題です。(2981030)
 - － **Mozilla 1.x:** 表示の問題や、誤動作が発生する可能性があります。(2847384)

- **リダイレクトの問題：** Oracle Calendar Web Client をリダイレクトするには、次の文を %ORACLE_HOME%\ocas\conf\ocal.conf に追加します。

```
<Location /calendar>
  Redirect permanent /calendar ¥
    http://<host>:<port>/ocas-bin/ocas.fcgi?sub=web
</Location>
```

(2982922)

- **リマインダのリード・タイム：** ユーザーがリマインダのリード・タイムを、サーバーの最大許容値より大きい値に設定しようとする、リード・タイムが警告なしにサーバーの最大許容値にリセットされます。(2980094)
- **Oracle Calendar Web Client の複数インストール：** Web Client の各インストールでは、共通の設定を持つ Calender Server ノードのみをサポートします。異なる設定の Calender Server ノードをサポートするには、Web Client の別のインスタンスをインストールする必要があります。
- **アップグレードの問題：** リリース 2 (9.0.4) のインストールにおける ocas.conf および ocwc.conf の空白行は、Upgrade Assistant によって削除されます。これを防止するには、Upgrade Assistant を実行する前に、空白行を # に置き換えてください。

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Calendar Web Client で解決された制限を列挙します。

- イベントの編集または削除時に、作業環境で設定されているにもかかわらず、電子メール通知が送信されませんでした。(2907433)
- Calendar Server のインストール後にリソース承認が設定されていない場合、リソース代理が承認を発行すると、リソースの競合が正しくチェックされませんでした。(2906858)
- リソース代理は、リソースがまだログインされていない場合は、リソースの承認リンクをクリックしてからログインするように求められました。(2907487)
- 「空き時間として表示」機能については、リリースで実装されていなくても、オンライン・ヘルプで説明されていました。(2907123)
- 「スケジューラ」ページには、オンライン・ヘルプで反映されていない変更が加えられました。(2907159)
- エントリにグループを追加すると、代理として操作をしている場合、検索結果リストからグループを選択した場合、または LDAP グループまたは作成していないグループを追加した場合、エラーが発生する可能性があります。(2852128、2859436、2901674、2906654)

- 数値の入力が必要なテキスト・ボックス（「繰返し」テキスト・ボックスなど）で、後ろにスペースのある数字を入力すると、エラーが発生する可能性があります。新規のグループを作成し、余分なスペースの入った新しい名前を入力した場合もエラーが発生し、グループは作成されませんでした。（2844834、2894371）
- リモート・ユーザーが会議に招待されたとき、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに正しく表示されませんでした。所有者のステータスは、「参加予定」ではなく「後で決定」として表示されました。これはサーバーの問題でした。（2892157）
- 同じ名前を持つ 2 人以上のユーザーは、パスワードが異なってもログインできませんでした。（2899249）
- 会議のエントリの「詳細」セクションには、改行が表示されませんでした。
- 繰返しのエントリで、最初のインスタンスの日付が「一般」ページでのデフォルトの日付と一致しなかった場合、デフォルトの日付は、繰り返す日付を反映するために更新されませんでした。
- ユーザーに当日にスケジュールされたメモまたは終日イベントがあり、カレンダーの表示作業環境が辞退した会議を表示しないように設定されている場合、「Calendar ポートレット」ページから「This service is currently unavailable, please try later」というメッセージが返されました。
- Internet Explorer 5.x Macintosh 版のみ： グループ・ビューでデフォルトの開始または終了時間（あるいはその両方）が変更されてから、グループの検索が実行された場合、「No Response from Application Web Server」ページが表示されました。
- Netscape 7.x のみ： プリンタに対応した書式設定が正しく機能するように、余白を 1 インチに設定する必要がありました。
- 「作業環境の編集」ページの「ワイヤレス」セクションにある「アラームと通知の配信」フィールドの「開始」および「終了」時間で設定された時間には、1 以上の値を設定する必要があります。たとえば、0 時 00 分を指定すると、エラーが発生しました。これは、24 時間表示書式が使用されている場合のみの問題でした。
- 「アクセス権の編集」ページ： 「アクセス権の編集」ページから検索を実行するとき、g: または r: 接頭辞を使用すると、誤ったエラー・メッセージが表示されました。
- 「時間の提案」ページのドロップダウン・ボックスから「12:00 p.m.」を選択した場合、「会議の編集」ページまたは「会議の作成」ページの「一般」セクションでは 12:00 a.m. が設定されました。これは、Web Client で 12 時間書式を使用する場合のみの問題でした。
- Internet Explorer 5.1 Macintosh 版のみ： 「会議の作成 / 編集」ページで「時間の提案」をクリックすると、「時間の提案」ダイアログ・ボックスがメイン・ページの後ろに開きました。
- 「作業環境」ページの「表示」セクションの値を設定する際、「余白サイズ」設定に 3 より大きな値を使用すると、Web Client が動かなくなりました。

- 新規グループの作成：グループに新規グループを追加できるのは、「**検索**」フィールドに特定のグループ名を入力し「**検索**」をクリックするか、「**グループ**」ラジオ・ボタンを選択して「**検索**」をクリックするかのいずれかの方法のみでした。
- 41 文字より長いタイトルを持つ添付ファイルはアップロードできませんでした。
- 「時間の提案」機能：「日付と時間のイメージの提案」ページの「**時間範囲**」フィールドに **24** を入力すると、内部サーバー・エラーが発生しました。これは、24 時間の時間書式を使用する場合にのみ発生しました。
- Oracle Calendar Server を再起動すると、中間層の Oracle HTTP Server も再起動する必要があります。
- Internet Explorer 5.x Macintosh 版のみ：グループ・ビューでデフォルトの開始または終了時間（あるいはその両方）が変更されてから、グループの検索が実行された場合、「No Response from Application Web Server」ページが表示されました。
- 「**空き時間として表示**」ドロップダウン・メニューが、会議に出席できないときに、出席できるように表示されました。(2978497)
- Netscape または Mozilla では、不正なアクションを実行した後にエラー・メッセージが表示されました。(2978866)

この項には、このリリースの Oracle Calendar Web Client のオンライン・ヘルプで解決された制限を列挙します。

■ **オンライン・ヘルプの翻訳バージョン：**

- デフォルト・リマインダの設定の説明が加えられました。(2948693)
- ADA バージョンの場合、ヘルプの「**作業環境の設定**」の下「**表示設定**」では、「日表示」に表示されたものから希望する時間を選択できると説明されていましたが、これは ADA モードには当てはまりません。この文は削除されています。(2949389)

ドキュメントの訂正

この項では、Oracle Calendar Web Client のオンライン・ヘルプの既知の問題について説明します。

- **スタンドアロンでのデバイス設定：** Web Client のスタンドアロンの使用時は、次のデバイス設定作業環境を編集できますが、ヘルプには記述されていません。
 - テキスト形式、または携帯電話のカレンダ表示におけるメモでのエントリの通知
 - モバイル機器のアラーム
 - 優先サービス・センター番号

Oracle Calendar Web Services

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)

このリリースの新機能

これは Oracle Calendar Web Services の最初のリリースで、Oracle Calendar の最新コンポーネントです。Oracle Calendar Web Services では、一般的な XML 問合せにより、任意のポータル、クライアント・アプリケーションまたはバックエンド・サーバーで表示するカレンダー・データをアプリケーションで取り出すことができます。開発者は、Oracle Calendar に組み込まれている Oracle Calendar Web Services ツールキットを使用して、Web サービス・アプリケーションを開発し、SOAP 問合せを作成することができます。

Oracle Sync Server

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [デバイス関連の問題](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

Oracle Sync Server は Oracle Calendar の新しいコンポーネントで、標準の HTTP 接続を使用して、どの SyncML 準拠デバイスともデータを同期させることができます。Sync Server では、Open Mobile Alliance が支援する同期のオープン・スタンダードである SyncML を使用します。SyncML 準拠のデバイスと Oracle Sync Server により、カレンダー・データ、実行することのリスト、連絡先情報、およびその他関連データを、複数のネットワーク、プラットフォーム、デバイス間で同期させることができます。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Sync Server 9.0.4 に関する一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

- **Ericsson R520m、T39、T68、Sony Ericsson T68i:**
 - **リソース名の欠落:** サーバーの attendeesindetails パラメータが short に設定されている場合、イベント詳細のリソース名とステータスはデバイスと同期がとられません。これは、短縮されたリソース名がユーザーにとっては無意味だからです。リソースは、attendeesindetails が full に設定されている場合にのみイベント詳細に追加されます。(2922093)

- **電話番号のハイフンの欠落：** デバイスには書式化された電話番号が保存されません。#を除く数字以外の文字は、デバイスに電話番号が保存されるときにすべて削除されます。(2845256)
- **電子メール・アドレスの欠落または変更：** デバイスでは1つの連絡先に対して1つの電子メール・アドレスを保存できるのに対し、サーバーでは2つのアドレスを保存できます。連絡先の電子メール・アドレスがデバイス上で変更され、サーバーと同期させると、サーバー上の間違ったアドレスを更新してしまう可能性があります。これは、現時点では、サーバーでどのアドレスを更新する必要があるかを検出する方法がないためです。
- **組織名フィールドの欠落：** デバイスでは1つの連絡先に対して1つの組織名フィールドを保存できるのに対し、サーバーでは2つの組織名フィールドを保存できます。連絡先の組織名フィールドがデバイス上で変更され、サーバーと同期させると、デバイスから同期させたフィールドを優先して、両方のサーバー・フィールドにある情報は破棄されます。
- **Siemens S55:** Siemens S55 で作成されたメモは、サーバーではメモとして同期します（他の電話機では、メモは終日イベントとして同期します）。(2962661)
- **アドレス帳のエントリ：** アドレス帳のエントリからは、どのフィールドも削除できません。(3003919)

デバイス関連の問題

この項では、次のデバイスにインストールされた Sync-ML クライアント・ソフトウェアの動作が原因となって Oracle Sync Server で発生する問題について説明します。

■ Nokia 3650:

- Sync-ML クライアントは必ずタスクの期限を割り当てます。サーバー上の期限のないタスクがデバイスと同期させられると、タスクには当日の日付が期限として割り当てられます。(2870062)
- タスクの優先度は、デバイスとサーバーの間で次のようにマップされます。
 - * 高 = 1
 - * 標準 = 2
 - * 低 = 3 ~ 9、A ~ Z
 (2842037)
- Oracle Calendar Desktop Client を使用して作成したタスクは、電話機と同期させることができません。同じ電話データベースを使用してタスクとイベントを同期させる電話機では、`./Calendar` をサーバー URI として使用する必要があります。ただし、タスクとイベントを別々に同期させる電話機では、`./Calendar/Events` と `./Calendar/Tasks` をそれぞれデバイスのイベント・データベースとタスク・データベースの URI として使用する必要があります。(2956318)

- **Nokia 3650 および 92xx:**
 - サーバー上のエントリのアクセス・レベルに対する変更は、デバイスと同期しません。ただし、新規エントリのアクセス・レベルは、最初はサーバーからデバイスへ正しく同期されます。(2839895)
 - 勤務先のアドレスと自宅のアドレスは、Oracle Calendar Desktop Client から電話機に同期させることができません。(2839242)
 - サーバーから電話機に同期させた電子メール・アドレスは予約されます。つまり、電子メール・アドレス 1 は電子メール・アドレス 2 となり、逆も同様です。(2839795)
- **Nokia 3650、Nokia 7650、Nokia 92xx、Sony Ericsson T68i:** タスクの completed プロパティはサポートされません。サーバー上で完了のマークの付いたタスクは、デバイスでは完了としてマークが付けられません。(2909625)
- **すべての Nokia 製デバイス、Sony Ericsson P800:** これらのデバイスでは、タイムゾーンを変更できません。異なるタイムゾーンにわたって旅行している場合、戻るまで同期させないことをお勧めします。ただし、同期が必要な場合は、Calendar Server 上の自分のアカウントがデバイスと同じタイムゾーンに設定されたままの場合にのみ行ってください。
- **Nokia 92xx**
 - KeepAlive=ON (Oracle Collaboration Suite のインストールで設定されるデフォルト値) の場合、Nokia 9290 デバイスとは同期させることができません。(2862018)
 - アドレス帳を Nokia 9290 デバイスと同期させると、「会社」および「部門」フィールドに無効な文字が挿入されます。(3051312)
- **Ericsson T39、T68、R520m:** タスクの同期はサポートされていません。(2909625)
- **Ericsson R520m、T39、T68、Sony Ericsson T68i、Siemens S55:** 出張時には、同期させる前に、デバイスを自分の Calendar アカウントと同じタイムゾーンに設定することをお勧めします。
- **Ericsson R520m、T39、T68、Sony Ericsson T68i:**
 - **連絡先のフルネームが姓になる:** デバイスに連絡先の名前を入力する正しい方法は、Lastname, Firstname です。カンマなしでデバイスに入力、または同期させた名前は、デバイスでは姓のみが保存されます。(2844373)
- **Ericsson R520m:**
 - Ericsson R520m では、イベント詳細フィールドの文字数が 150 文字に制限されます。150 文字を超える出席者の情報は、詳細フィールドには追加されません。この電話機には、デフォルトのサーバー・パラメータ AddAttendeesInDetails = short を使用することをお勧めします。(2862247)

- このデバイスを使用して時刻指定のないイベントを作成すると、夏時間調整の時刻変更により、**Oracle Calendar Desktop Client** でこのイベントが所要時間 1 分の会議として表示される可能性があります。(2864097)
- **Ericsson T68i:** 連絡先の電子メール・アドレスを電話機で変更し、それに特殊文字が含まれている場合、**Oracle Calendar Desktop Client** ではアドレスが壊れて表示されます。これは、電話機が EMAIL vcard プロパティを適切な書式で返さないためです。(2844777)

このリリースで解決された制限

電話機で連絡先情報を変更すると、電話機の制限に応じて、入力可能な最大文字数が異なるため、**Oracle Calendar Desktop Client** ではフィールドが短縮されました。(2844930)

Oracle Connector for Outlook

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、**Oracle Connector for Outlook** の新機能を列挙します。

- 不在時アシスタントおよびサーバー側電子メール・ルール。
- メール・サーバー・クォータ利用状況の表示。
- 新しい電子メール、ボイスメールおよびワイヤレスの作業環境。
- 指定期間に 1 つ以上のフォルダから削除された電子メールのリカバリ機能。
- Microsoft Outlook を介した **Oracle Web** 会議のスケジュールおよび参加。
- 強化された新しいリソース・スケジューリング機能。
- `/Lang` コマンドライン・スイッチを使用した旧リリースからアップグレードする際の言語選択プロンプト。
- リモート・ノード・ユーザーへの代理アクセスの割当て。
- **Calendar Server** のための (Calendar および非 Calendar の) ユーザー・ディレクトリ全体へのアクセス。
- **Oracle Internet Directory** 配信リストに照合して名前を解決する機能。

- 頻繁に実行される Microsoft Outlook 操作を実装するために発行される IMAP4 および Calendar API コマンド数の削減。
- Calendar Server アカウントを自動検出するマスター・ノード構成。
- オンライン作業中に IMAP4 電子メールのローカル・コピーを使用できるローカル・メールボックス・キャッシュ機能。
- フォルダ・カウント・リフレッシュの構成機能。
- メッセージ送信時に、代理名がフォルダ所有者のかわりとして表示されるかどうかを制御する機能。
- 代理がカレンダーに会議を追加したときに、そのカレンダーの所有者に対して自動的に通知する機能。
- 電子メール受信者、会議の開催者および参加者の検索時における、Outlook の高度な検索機能の最適化。
- 追加言語として、デンマーク語、オランダ語、英語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノルウェー語、ポルトガル語（ブラジル）、ポルトガル語、スウェーデン語、スペイン語、中国語（簡体字）、中国語（繁体字）およびトルコ語のサポート。
- 全員に返信する際に、送信者の電子メール・アドレスが含まれません。
- SMTP サーバーでの最大許容サイズより大きな電子メール・メッセージをユーザーが送信しようとする、警告が発せられ、送信できません。
- Outlook で、サイズの大きな電子メール・メッセージを送信しながら他のタスクを実行できます。
- 非配信レポートに、SMTP サーバーで障害が発生した理由が記録されます。
- Entrust/Express (6.0、6.1 および 6.1 SP 1) のデジタル証明が添付され、S/MIME で暗号化された電子メール・メッセージの送信および読取り機能。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Connector for Outlook の既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- **クライアント側ルール・ウィザード：** Outlook クライアント側ルール・ウィザードを使用してユーザーを指定するには、そのユーザーから受信したメッセージに対してルールが起動するように、そのユーザーの表示名と電子メール・アドレスをセミコロンで区切って指定する必要があります。(3117097)
- **同期：** ActiveSync 3.5 を Outlook 2000 と併用して、Pocket Outlook 2002 Inbox を同期させると、項目が未解決になります。(2932027)

- **Web 会議：** Outlook 2000 の制限（Microsoft Knowledge Base: 272320）が原因で、Outlook 2000 のユーザーには、定期的な Oracle Web 会議のインスタンスを正しく表示するために、少なくとも Office 2000 Service Pack 3 が必要です。（2927339）
- **IMAP サーバー：** Oracle Email Server など、Simple Authentication and Security Level (SASL) による認証をサポートしていない IMAP4 サーバーを使用する場合、パスワードをクリア・テキストで送信することを避けるために、IMAP4 サーバーへのすべての接続に Secure Sockets Layer (SSL) を強制することをお勧めします。詳細は、使用する電子メール・サーバーのドキュメントを参照してください。SSL による Oracle Connector for Outlook サーバー接続の設定の詳細は、Oracle Connector for Outlook のオンライン・ヘルプを参照してください。
- **Oracle Connector for Outlook によって Microsoft Outlook/Exchange のコア機能が変わることはありませんが、次に示す Outlook 機能などはこのリリースではサポートされていません。**
 - **サポートされない書式と添付ファイル：** Oracle Connector for Outlook では、電子メール・メッセージの Transport Neutral Encapsulation Format (TNEF)、または Microsoft 電子メール・クライアントによって送信された winmail.dat 添付ファイルはサポートされません。（3117510）
 - **Microsoft POP3 サービス・プロバイダ：** Oracle Connector for Outlook は、Microsoft の POP3 サービス・プロバイダと同じプロファイルにインストールできません。
 - **「グループ化」オプション：**「グループ化」オプションを使用するカスタム・フォルダ・ビューはサポートされません。この問題を回避するには、「グループ化」フィールドを「なし」に設定します。（3117194）
 - リリース 9.0.4.1 では、Oracle Connector for Outlook のオンライン・ヘルプには、ユーザーが会議、終日イベント、およびメモに対して「閲覧権限なし」を選択した場合に、予定表のどの項目が他のカレンダー・ユーザーから見えるかについての説明がありません（3829123）。ユーザーがこの「アクセス権」オプションを選択すると、代理を除く他のユーザーは、ユーザーの予定表の会議、イベント、あるいはメモを見ることはできません。ユーザーの予定表の項目を見ることができない理由を知りたい場合は、ユーザーからどのアクセス権が付与されているかをチェックすることができます。

回避策：

別のユーザーから付与されたアクセス権をチェックするには、次の手順を実行します。

- * Outlook の「ファイル」メニューから、「開く」→「ほかのユーザーのフォルダ」を選択します。
- * 「共有フォルダ追加」ダイアログ・ボックスで、アクセス権を確認したいユーザーの名前を入力します。

- * 「フォルダ」リストから「カレンダー」を選択し、次に「OK」をクリックします。
- * ユーザーのカレンダー・ウィンドウの「ファイル」メニューから、「フォルダ」→「プロパティ」を選択します。
- * 「概要」タブを選択して、このユーザーによって付与された権限を確認します。

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Connector for Outlook で解決された制限を列挙します。

- 受信トレイのルールによる別のフォルダへの移動中に受信メールを読むと、宛先のフォルダでそのメッセージが重複することになる可能性がありました。(3117313)
- オープン・メッセージを返信直後に移動した場合、そのメッセージのコピーが元の場所に残りました。(3117325)
- Windows 98 上の Outlook 2000 のみ：別のユーザーの「予定表」フォルダでの作業中には、時間をハイライト表示し、セルに直接入力するだけでは、新規の会議を作成できませんでした。(3117338)
- リモート・ユーザーが会議に招待されたとき、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに正しく表示されませんでした。所有者のステータスは、「参加予定」ではなく「後で決定」として表示されました。これはサーバーの問題でした。(2892157)
- Notes や Ink Notes を Pocket PC デバイスと同期させる機能。
- オフライン・フォルダを最初に見に行くことなく同期させる機能。(3117210)
- Oracle Connector for Outlook のインストールの最後に長い遅延が発生しました。
- Oracle Connector for Outlook のアップグレードまたはオフライン・フォルダのページを行うと、PST ファイルが削除されました。(2692841)
- Oracle Calendar Desktop Client を使用して添付ファイル (Word、Excel) 付きで作成した会議は、Microsoft Outlook XP から参照したとき、添付ファイルが表示されませんでした。Microsoft Outlook 2000 では添付ファイルを正しく表示できました。(3117299)
- 定期的な会議または空き時間情報は、ユーザーにすべての管理権限がなければ、正しく表示できませんでした。(2666117)
- 休日を管理する権限を持つユーザーは、Outlook から全員の休日を誤って削除することがありました。
- すべての電子メールを個人用フォルダに移動するクライアント側ルールにより、もう 1 つの空の電子メールが生じました。(2662010)
- Oracle Connector for Outlook からターゲットの PST フォルダに電子メールを移動しても、ソース・メッセージが削除されませんでした。(3117236)

- Oracle Connector for Outlook からターゲットの PST フォルダへの複数メッセージの移動を取り消すと、ソース・メッセージが削除されました。(3035337)
- Outlook XP に表示される確認メッセージのポップアップ・ウィンドウには、会議の開始時刻ではなく、確認メッセージの時刻が表示されました。(3117709)
- Chapura PocketMirror との同期ができませんでした。(3063227)
- 「オフライン作業」 ツールバー・ボタンが機能しませんでした。(3101189)
- イタリア語のみ: 「Tools」メニューに「Client Rules」メニュー項目が 2 つありました。(2985603)
- 別の配信リスト内に埋め込まれた配信リストに対して、電子メール・メッセージの作成および送信ができませんでした。(3028635)
- グループ・スケジュール機能を使用してグループを作成すると、Oracle Connector for Outlook を終了した後にグループが保存されませんでした。(2943564)
- メッセージを転送したユーザーからのボイスメールが転送メッセージに含まれている場合、その転送メッセージの 2 番目のボイスメールにアクセスできませんでした。(3057009)
- Calendar アカウント名として、リリース 2 (9.0.4) マスター・ノードの Calendar Server に対するユーザー ID ではなく X400 名を指定すると、誤った動作を引き起こしました。(3101153)
- Oracle Email リリース 1 (9.0.3) の自動返信機能から受信した電子メールにはテキストがありませんでした。(3040699)
- オフライン作業 / オンライン作業機能では、プレビュー・ペインのメッセージがリフレッシュされませんでした。(3100989)

Oracle Calendar Desktop Client

この項では、次の製品に関する情報を提供します。

- [Oracle Calendar Desktop Client for Windows](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Linux](#)
- [Oracle Calendar Desktop Client for Solaris](#)

Oracle Calendar Desktop Client for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Desktop Client for Windows の新機能を列挙します。

- リモート・リソースへの電子メールをサポートします。
- リモート・グループへのアクセス機能。
- 予定表検索用ユーザー・インターフェースが改善されました。
- 24 時間を超える会議をサポートします。
- リソースごとに競合チェックを実行します。¹
- 機能が向上したアドレス帳： 誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。¹
- リソース・スケジューリングが強化されました。¹
- 「空き時間として表示」機能： ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。¹
- ドイツ語と日本語をサポートします。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Windows の既知の制限とそれらの回避策について説明します。

- **iCalendar のインポート**： iCalendar ファイルを、Microsoft Outlook などの外部カレンダー製品にインポートしようとすると、ファイルの最初のエントリしか正しくインポートされません。この問題を回避するには、予定表のデータを vCalendar 形式でエクスポートまたはインポートする必要があります。(2859449)
- **VCS のインポート**： 一部のプログラムから .vcs ファイルをインポートすると、正しく機能しない場合があります。(2836621)

¹ Oracle Calendar Server 9.0.4 が必要です。

- **日本語のアドレス帳：** 日本語版の Oracle Calendar Desktop Client for Windows では、アドレス帳機能がサポートされません。

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Calendar Desktop Client for Windows で解決された制限を列挙します。

- オフライン予定表に新規エントリがある場合、「ローカルファイルへのダウンロード」を選択すると、予定表が正しく照合確認されませんでした。(2896226)
- 代理の予定表ウィンドウを開いたまま、自分の予定表を印刷しようとすると、自分のではなく代理の予定表が印刷されることがありました。(2836683)
- 24 時間に設定された時間範囲の作業表を印刷しようとすると、時間範囲がデフォルトの範囲 (08:00 ~ 17:00) に戻りました。(2859640)
- パスワードの変更後に自分の予定表をファイルにダウンロードすると、エラーが発生しました。(2912923)
- リモート・ユーザーが会議に招待されたとき、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに正しく表示されませんでした。所有者のステータスは、「参加予定」ではなく「後で決定」として表示されました。これはサーバーの問題でした。(2892563)

Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の新機能を列挙します。

- GSSAPI Kerberos をサポートします。
- オフライン・データベースでの暗号化が改善されました。
- メモおよび終日イベントで、詳細および添付ファイルをサポートするようになりました。
- 会議をクリックし、「グループ・ビューを開く」を選択しながら [Ctrl] キーを押すことで、特定の会議に招待された人の予定表が含まれるグループ・ビューが開きます。

- 再設計されたイベント・エディタでは、1つのダイアログ・ボックス内でイベントの作成および編集が迅速にできます。この新しい機能により、会議への日付の追加が1回のクリックでできるようになりました。確認済および未確認の会議の出席者数を表示できます。「定期的な予定」ダイアログも再設計され、定期的な会議の作成プロセスが簡単になりました。
- すべてのユーザー作業環境が、新しい「作業環境」ダイアログにまとめられ、一元的に管理されるようになりました。このダイアログによりユーザーは、予定表の表示、受信トレイの表示、エントリのデフォルト、スケジューリングの選択肢、オフライン設定、アドレス帳の編成、および日付、タイムゾーン、起動の設定を含む一般作業環境の多数の設定に関し、設定可能なすべての作業環境のデフォルト値を変更できます。
- 新しいオンライン・アドレス帳により、1箇所からアドレス帳のすべてのエントリを管理し、連絡先の管理を以前より容易にするカテゴリを作成できるようになりました。
- 新しいインストーラにより、ユーザーは容易にアプリケーションをインストールできます。構成前のファイルが、サイレント・インストール用に提供されます。
- 再設計されたツールバー、更新されたデフォルトの配色、再編成されたメニューにより、Oracle Calendar に新しいルック・アンド・フィールが提供されます。
- 任意の配色で、デスクトップや作業環境に応じて、会議の色をカスタマイズします。
- ウィンドウの状態をいつでも保存できるため、Oracle Calendar は選択どおりの状態で開きます。
- イベントの電子メール通知には、件名フィールドにイベントのタイトルが含まれるようになりました。
- 定期的な会議のインスタンスを変更または削除するとき、メール・メッセージには影響を受けるインスタンスのみが表示されます。
- 定期的な会議のインスタンスを変更または削除するとき、デフォルトでは、影響を受けるインスタンスの出席者のみが電子メールで通知されます。
- リマインダは、電子メールとワイヤレスを介して使用できるようになりました。
- 24 時間を超える会議をサポートします。
- リソースごとに競合チェックを実行します。¹
- 機能が向上したアドレス帳： 誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。¹

¹ Oracle Calendar Server 9.0.4 が必要です。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh の一般的な問題と、それらの回避策について説明します。

■ ログイン:

- 特定のユーザーのマスター・ノード・サーバーを構成した後、「ログイン」ダイアログに表示されるユーザー名は、指定したユーザーではなく、前にログインしたユーザーのものです。(2864234)
- ユーロ文字を含む有効なパスワードでアプリケーションにログインを試みると失敗します。(2871974)
- 自分の予定表にオフラインでログインすると、機能しないことがあります。たとえば、オフラインの構成ダイアログ・ボックスでは、異なるタイムゾーンを選択し、ログインしようとする、ログイン・ダイアログ・ボックスに戻るだけです。(2893984)

■ 通知: 新規エントリに対するポップアップ通知が機能しません。(2872763)

■ ウィンドウ: Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh と他のアプリケーションの前面と背面の位置を入れ替えると、Oracle Calendar のウィンドウが前面に表示されますが、まだバックグラウンドにあるかのようにグレー表示のままです。(2893976)

■ 定期的なイベント: 定期的な会議のすべてのインスタンスに変更を返信ステータスで適用しようとする、機能しないことがあります。(2884186)

■ 印刷: システムでデフォルトのプリンタが設定されていない場合、「新規グループ」ダイアログの「印刷」をクリックすると、プリンタの設定を行うかどうかを確認するメッセージが表示されます。「キャンセル」をクリックすると、「モジュール: <CST_ManageGroupsDlog.cpp>, ラベル: 125, サービスエラー: 0x31002」という予期せぬエラーが発生します。(2842273)

■ アドレス帳:

- アドレス帳のカテゴリが正しく機能しません。(2830426、2879849)
- アップグレード中にアドレス帳を開いたままにしておくと、データが正しく移行されたように見えないことがあります。ツールバーのアドレス帳のアイコンをクリックして、更新されたエントリを確認します。(2911972)
- オフライン作業中にアドレス帳からメモを作成すると、機能しないことがあります。(2921488)
- アドレス帳を、タブ区切りまたはカンマ区切りのテキスト・ファイルにエクスポートできません。(2924992)

■ Duplicate Meeting: 「Duplicate Meeting」機能は、予期せぬ動作を引き起こすことがあります。(2874952、2892366)

- **すべてに適用：** イベント・エディタでは、すべての選択に対して、「すべてに適用」機能が正常に機能しないことがあります。(2884158、2884186、2884903)
- **iCalendar のインポート：** オフライン中に iCal ファイルをインポートできません。(2922180)

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Calendar Desktop Client for Macintosh で解決された制限を列挙します。

- 通知の作業環境を変更すると、空白のダイアログ・ボックスが表示されました。(2891594)
- 定期的なイベント（会議、メモ、終日イベント）を拡張して、すべてのインスタンスを選択し、返信のステータスを変更しようとする、プログラムが突然終了しました。(2919825)
- 土曜または日曜には毎週の会議は作成できませんでした。(2929937)
- 最近取得した公開アドレス帳の「**Open All Folders**」ボタンをクリックすると、「Save」ダイアログが表示されました。(2879881)
- オフライン作業中にアドレス帳を作成すると（スタンドアロンのみ）、次のログイン時にエラーが発生しました。(2871716)
- 出席者を含む会議をイベント・カレンダーによって作成すると、予期せぬエラーが発生しました。(2880321)
- 別のユーザーの予定表を代理として開き、リフレッシュすると、エラー・メッセージが表示されました。(2919085)
- アドレス帳のユーザー定義フィールドへの変更は保存されませんでした。(2832478)
- ワイヤレス・サポートがない場合に（MDCC の場合など）、表示されるはずのないワイヤレス・リマインダのチェックボックスが、**リマインダ**のタブやエントリ・デフォルトの作業環境に表示されました。(2893809)
- 翌日の別のインスタンスとの競合が発生してしまうほど、1 インスタンスの所要時間が長い定期的な会議を作成したとき、「Two or more instances have the same date and time」というメッセージが表示されました。(2840028)
- Oracle Calendar の「作業環境」ダイアログで「**OK**」をクリックし、「表示」→「**Set Filter**」を選択すると、アプリケーションが突然終了することがありました。(2847602)
- 最大許容インスタンス数を超える定期的な会議を作成しようとする、「モジュール：<CST_Event_Editor.cpp>, ラベル：390, サービスエラー：0x1812b」という予期せぬエラーが発生しました。(2872041)
- 24 時間を超える会議が含まれる予定表ページの印刷プレビューを表示しようとする、アプリケーションが突然終了することがありました。(2877037)

- オフライン作業中に、パスワードをサーバーで許可されていないものに変更した場合、オンラインとオフラインのパスワードを照合確認すると、アプリケーションが突然終了することがありました。(2903625)
- リモート・ユーザーが会議に招待されたとき、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに正しく表示されませんでした。所有者のステータスは、「参加予定」ではなく「後で決定」として表示されました。これはサーバーの問題でした。(2892567)

Oracle Calendar Desktop Client for Linux

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Desktop Client for Linux の新機能を列挙します。

- 会議を右クリックし、「グループ・ビューを開く」を選択することで、特定の会議に招待された人の予定表が含まれるグループ・ビューが開きます。
- 受信トレイをいつ表示するかを選択するには、起動の作業環境を使用します。
- 新しいオンライン・アドレス帳により、1 箇所からアドレス帳のすべてのエントリを管理し、連絡先の管理を以前より容易にするカテゴリを作成できるようになりました。
- 確認済および未確認の会議の出席者数を表示します。
- 新しいインストーラにより、ユーザーは容易にアプリケーションをインストールできます。構成前のファイルが、サイレント・インストール用に提供されます。
- 24 時間を超える会議をサポートします。
- リソースごとに競合チェックを実行します。¹
- 機能が向上したアドレス帳：誕生日や記念日から繰返しメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。¹
- リソース・スケジューリングが強化されました。¹
- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。¹

¹ Oracle Calendar Server 9.0.4 が必要です。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Linux の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

- **アドレス帳フォルダ：** アドレス帳フォルダの作業環境に加えた変更は、現行セッションでのみ有効です。これらの変更は正しく保存されません。(2836729)
- **iCalendar のインポート：** iCalendar ファイルをオフラインで正しくインポートできないことがあります。(2847503)
- **予定表の照合確認：** 調整、取消、ダウンロードについてのダイアログ・ボックスから**ダウンロード**を選択すると、オフラインの予定表で加えた変更はすべて消去されます。オフライン中に加えた変更がすべて失われるという警告は表示されません。(3117497)
- **同時コピーの実行：** 1 つの UNIX アカウントから Oracle Calendar の同時コピーを実行しないでください。
- **デフォルト・ポート：** 一部のマシンでは、デフォルト・ポートを使用するサーバーに接続する際に、ポート番号の指定が必要になることがあります。たとえば、calendar.acme.com というサーバーに接続する場合、「calendar.acme.com:5730」と入力します。(2880571)

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Calendar Desktop Client for Linux で解決された制限を列挙します。

- イベント・カレンダーであるユーザーを含むグループを作成しようとすると、「モジュール:<CST_ManageGroupsEditorDlog.cpp>, ラベル: 135, サービスエラー: 0x13209」という予期せぬエラーが発生しました。(2847208)
- 出席者を含む会議をイベント・カレンダーによって作成すると、予期せぬエラーが発生しました。(2880299)
- リモート・ユーザーが会議に招待されたとき、会議の所有者のステータスがリモート・ユーザーに正しく表示されませんでした。所有者のステータスは、「**参加予定**」ではなく「**後で決定**」として表示されました。これはサーバーの問題でした。(2892157)
- オフライン作業中に、パスワードを変更し、サーバーに許可されていないパスワードを選択した場合、オンラインとオフラインのパスワードを照合確認すると、アプリケーションが突然終了することがありました。(2892573)

Oracle Calendar Desktop Client for Solaris

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris の新機能を列挙します。

- 会議を右クリックし、「**グループ・ビューを開く**」を選択することで、特定の会議に招待された人の予定表が含まれるグループ・ビューが開きます。
- 受信トレイをいつ表示するかを選択するには、起動の作業環境を使用します。
- 新しいオンライン・アドレス帳により、1 箇所からアドレス帳のすべてのエントリを管理し、連絡先の管理を以前より容易にするカテゴリを作成できるようになりました。
- 確認済および未確認の会議の出席者数を表示します。
- 新しいインストーラにより、ユーザーは容易にアプリケーションをインストールできます。構成前のファイルが、サイレント・インストール用に提供されます。
- 24 時間を超える会議をサポートします。
- リソースごとに競合チェックを実行します。¹
- 機能が向上したアドレス帳：誕生日や記念日から繰返しのメモのエントリを作成する機能、アドレス帳のエントリの電子メール・アドレスから電子メール・アプリケーションを起動する機能、アドレス帳のエントリの URL からブラウザを起動する機能。
- 16 文字以上のパスワードをサポートします。¹
- リソース・スケジューリングが強化されました。¹
- 「空き時間として表示」機能により、ユーザーは、会議への招待を受ける一方で、他の会議への招待にも応じることができます。¹

¹ Oracle Calendar Server 9.0.4 が必要です。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Desktop Client for Solaris の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

- **アドレス帳フォルダ:** アドレス帳フォルダの作業環境に加えた変更は、現行セッションでのみ有効です。これらの変更は正しく保存されません。(2836729)
- **iCalendar のインポート:** iCalendar ファイルをオフラインで正しくインポートできないことがあります。(2847503)
- **予定表の照合確認:** 調整、取消、ダウンロードについてのダイアログ・ボックスから **ダウンロード** を選択すると、オフラインの予定表で加えた変更はすべて消去されます。オフライン中に加えた変更がすべて失われるという警告は表示されません。(3117497)
- **同時コピーの実行:** 1 つの UNIX アカウントから Oracle Calendar の同時コピーを実行しないでください。

このリリースで解決された制限

この項には、このリリースの Oracle Calendar Desktop Client for Solaris で解決された制限を列挙します。

- **繰返しエントリの作成:** 繰返しエントリの「一般」タブで「**すべてに適用**」をクリックすると、そのエントリのすべてのインスタンスについて、リマインダおよび返信のオプションがリセットされることがありました。
- **多数の代理を持つリソース:** 多数の代理を持つリソースを追加すると、最大メール配信数を上回るメールが配信されました。

Oracle Calendar Sync クライアント

この項では、次の製品に関する情報を提供します。

- [Oracle Calendar Sync for Palm for Windows](#)
- [Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh](#)
- [Oracle Calendar Sync for Pocket PC](#)

Oracle Calendar Sync for Palm for Windows

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [デバイス関連の問題](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の新機能を列挙します。

- イベントで Oracle Web Conferencing の詳細をサポートします。
- 拒否されたイベントを自分のデバイスと同期させるかどうかを選択できます。
- 指定した日付範囲外のイベントをデバイスから削除するかどうか（ただしサーバーには保持）を選択できます。
- 連絡先カテゴリの同期またはフィルタリングをサポートします。
- 出席者およびそのステータスとデバイスとの同期をサポートします。
- デバイスから自分の出席ステータスを変更し、それをサーバーと同期させることができます。
- データ型に基づいて、変更による競合発生時に使用するルールを設定できます。
- 個人のイベントに対する定期的ルールのサポートが強化されました。
- ドイツ語と日本語をサポートします。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Windows の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

- **クライアントとサーバーに対する変更：** デスクトップ・クライアントと Palm デバイスで同じ連絡先を変更し、ルール設定がモバイル機器項目をカレンダー・サーバー項目で置換するように設定されている場合、一部のフィールドが正しく同期しないことがあります。(2851814)
- **サーバーと同期しない情報：** デバイスで変更されたメモ、アラームおよびアクセス・レベルは、サーバーと同期しないことがあります。Calendar Server リリース 5.4 を使用している場合、詳細も同期しないことがあります。(2842611)

デバイス関連の問題

この項では、サードパーティのデバイスおよびソフトウェアの動作が原因となって Oracle Calendar Sync for Palm で発生する問題について説明します。

- **アップグレード:** Oracle CorporateSync 3.0.x for Palm からのアップグレード時に、レジストリから空の値を読み取ると、InstallShield では、エラーを返さず、無作為の文字を返します。(2872048)
- **夏時間調整:** 夏時間調整の時間変更にまたがる定期的な会議の場合、正しく同期しないことがあります。時間変更の前または後の一部のインスタンスで、正しくない終了時間になることがあります。(2842124)
- **地域の設定:** オペレーティング・システムの地域の設定は、Palm デバイスの言語と一致している必要があります。(3065498)

このリリースで解決された制限

"=" の文字で終わるタイトルを持つイベントと連絡先が正しく同期しませんでした。(2864229)

Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [デバイス関連の問題](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の新機能を列挙します。

- ACE のサポート
- Mac OS X のサポート

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Sync for Palm for Macintosh の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

- **繰返しエントリ:** Palm Organizer の繰返しエントリを同期させることはできません。ただし、Calendar Server の繰返しエントリは同期させることができます。
- **Hand-held overwrites Macintosh:** Hand-held overwrites Macintosh 機能は使用できません。

- **時間指定または未指定のイベント：** Palm Organizer で時間指定のイベントを時間指定のないイベントに変更する場合、あるいはその逆の場合、変更は Calendar アプリケーションには表示されません。
- **言語：** Oracle Calendar Sync for Palm のみが、英語の同期を完全にサポートします。
- **重複する名前：** Oracle Calendar Sync for Palm では、重複する名前にある程度一致する名前のリストが表示されません。この問題を回避するには、できるだけ一意となるユーザー情報（組織単位など）を入力します。

デバイス関連の問題

タイムゾーン： Palm Organizer では、異なるタイムゾーンがサポートされません。Palm Organizer のタイムゾーンが、Calendar アプリケーションのタイムゾーンと対応していることを確認してください。

Oracle Calendar Sync for Pocket PC

この項の内容は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の制限および回避策](#)
- [デバイス関連の問題](#)
- [このリリースで解決された制限](#)

このリリースの新機能

この項には、Oracle Calendar Sync for Pocket PC の新機能を列挙します。

- イベントで Oracle Web Conferencing の詳細をサポートします。
- 拒否されたイベントを自分のデバイスと同期させるかどうかを選択できます。
- 指定した日付範囲外のイベントをデバイスから削除するかどうか（ただしサーバーには保持）を選択できます。
- 連絡先カテゴリの同期またはフィルタリングをサポートします。
- 出席者およびそのステータスとデバイスとの同期をサポートします。
- デバイスから自分の出席ステータスを変更し、それをサーバーと同期させることができます。
- データ型に基づいて、変更による競合発生時に使用するルールを設定できます。
- 個人のイベントに対する定期的ルールのサポートが強化されました。
- ドイツ語と日本語をサポートします。

既知の制限および回避策

この項では、Oracle Calendar Sync for Pocket PC の一般的な問題とそれらの回避策について説明します。

- **クライアントとサーバーに対する変更：** デスクトップ・クライアントと Pocket PC デバイスで同じ連絡先を変更し、ルール設定がモバイル機器項目をカレンダー・サーバー項目で置換するように設定されている場合、一部のフィールドが正しく同期しないことがあります。(2851814)
- **サーバーと同期しない情報：** デバイスからの定期的なイベントの編集は同期しません (リリース 5.4 のサーバーのみ)。(2891864)
- **マルチバイトのタイトル：** マルチバイトの長いタイトルおよびロケーションを持つエントリは、同期後に一部切り捨てられて表示されることがあります。(3069057)

デバイス関連の問題

この項では、サードパーティのデバイスおよびソフトウェアの動作が原因となって Oracle Calendar Sync for Pocket PC で発生する問題について説明します。

- **アップグレード：** Oracle CorporateSync 3.0.x for Pocket PC からのアップグレード時に、レジストリから空の値を読み取ると、InstallShield では、エラーを返さず、無作為の文字を返します。(2872048)
- **夏時間調整：** 夏時間調整の時間変更にまたがる定期的な会議の場合、正しく同期しないことがあります。時間変更の前または後の一部のインスタンスで、正しくない終了時間になることがあります。(2842124)
- **地域の設定：** オペレーティング・システムの地域の設定は、Pocket PC デバイスの言語と一致している必要があります。(3065498)

このリリースで解決された制限

"=" の文字で終わるタイトルを持つイベントと連絡先が正しく同期しませんでした。(2864229)

クライアントの共存に関する動作

この項では、Oracle Connector for Outlook と Oracle Calendar Desktop Client の共存の問題について説明します。

- Calendar Desktop Client を使用して、繰り返されているイベントにそのイベントを追加すると、そのイベントが Oracle Connector for Outlook 内で重複します。
- Oracle Connector for Outlook を使用して、取消しを送信せずにエントリを削除すると、そのエントリは拒否されたものとして Calendar Desktop Client に表示されます。

Oracle Email

この章では、Oracle Email 関連の問題について説明します。

この章の構成は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知の問題](#)
- [Oracle Email のスパム対策パラメータ](#)
- [既知のバグ](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

このリリースの新機能

Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) の Email 製品は、Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2.3) および Oracle9i Database リリース 2 (9.2.0.3) の使用制限付きライセンスに同梱されています。このメール・ソリューションのすべてのコンポーネントが、パフォーマンスおよび機能向上のためにいくつかの点で強化されました。新機能は次のとおりです。

- 大規模ストアでウィルス感染が疑われるメッセージの隔離のための管理ツール、サード・パーティのアンチウィルス・ナレッジ・ベースによるメール・ストアの自動スキャン、受信および送信メールに対するウィルス・スキャン制御の改善など、ウィルス・スキャンおよび保護が改善されました。
- ユーザーごとのメール・ストアのバックアップおよびリカバリにより、個々のユーザーのメール・フォルダ、プライベート・アドレス帳のエントリ、サーバー側ルールのバックアップおよびリストアが可能になりました。
- ニュース・アーティクル用の Network News Transfer Protocol (NNTP) サーバー。インストール後すぐに利用可能となり、標準クライアントを通じてアクセスおよびポストできます。また、Oracle Email パブリック配信リストのアーカイブにも使用できます。
- 移行ツールは、Novell GroupWise バージョン 6.0、Samsung Contact バージョン 7.1（以前は HP OpenMail）をサポートします。
- Oracle Connector for Outlook のための追加機能は次のとおりです。
 - ユーザーが一時的にメールの管理を他人に任せることができるメールの代理管理機能
 - 一般的な不在アシスタントなどのサーバー側の追加ルール
 - メッセージ注釈のサポート
- 削除したメール・メッセージをすぐにリカバリできる、メールのフラッシュバック・リカバリ。

既知の問題

この項では、Oracle Email の既知の問題について説明します。

Oracle Email のスパム対策パラメータ

Oracle Email のスパム対策パラメータは、Oracle Webmail クライアント管理ページまたは Oracle Enterprise Manager から構成できます。現在のリリースでは、次の 2 つの既知の問題があります。

- Oracle Webmail クライアント管理ページでスパム対策パラメータにラベルを付けると、Oracle Enterprise Manager では異なるラベルが表示されます。しかし、これらのパラメータはまったく同じです。(3228008)
- 必ずしもすべてのスパム対策パラメータが、Oracle Enterprise Manager から構成できるわけではありません。

『Oracle Email 管理者ガイド』で説明されているように、Oracle Webmail クライアント管理ページ内の「ポリシー」Web ページから Oracle Email のスパム対策パラメータを構成します。

関連資料： Oracle Technology Network (OTN) の『Oracle Collaboration Suite Anti-Spam Quick Reference Guide』(<http://otn.oracle.com/products/oemail/index.html>) を参照してください。

Oracle Email 移行ツール用の JDK 1.4.1

Oracle Email 移行ツールを使用した IMAP 対 IMAP の移行には、JDK 1.4.1 の使用をお勧めします。

JDK 1.4.2

GB18030（中国語（簡体字）標準）エンコーディングをサポートするには、Webmail で JDK 1.4.1 以上を使用する必要があります。

catalog.sh スクリプト

注意： catalog.sh を Windows で実行するには、次のいずれかの UNIX エミュレータ・ユーティリティを使用する必要があります。

- Cygwin 1.0 以上
 - MKS Toolkit 5.1、6.0 以上
-

環境変数 ORACLE_HOME が %r で始まると、catalog.sh スクリプトの動作が停止します。たとえば、ORACLE_HOME が c:%release2 であると、catalog.sh は失敗します。Windows では、%r コマンドは制御文字であるため、ORACLE_HOME を使用して中間ファイルおよびスクリプトを作成すると、catalog.sh は失敗します。

回避策：

1. シェル・スクリプトを使用して、コマンド・プロンプトに「sh」と入力します。
2. ORACLE_HOME を c:/release2（スラッシュ）に設定します。
3. catalog.sh スクリプトを実行します。

TargetDN 属性

targetdn 属性は、手動でカタログに追加する必要があります。この属性がカタログに追加されていない場合、ユーザーの名前変更操作は失敗します。

回避策：

次のコマンドを入力します。

```
%ORACLE_HOME%\%ldap%\bin\catalog.sh -connect infrastructure_connectstr -add -attr targetdn
```

Oracle Text

電子メールの本文検索用のテキスト索引は、Oracle Text の BASIC_LEXER によって作成されます。スペースで用語を区切る英語および大部分の西欧言語をサポートします。Oracle Text の BASIC_LEXER でサポートされていないその他の言語の場合、電子メールの本文検索は機能しません。

回避策：

1. 次の SQL プロンプトを入力します。

```
alter table es_int_msgbody add (cset VARCHAR2(20) default 'JAAUTO');
```
2. 電子メールの索引付け用レクサーを選択します。

サポートされているレクサーは次のとおりです。

 - CHINESE_VGRAM_LEXER
 - CHINESE_LEXER
 - JAPANESE_VGRAM_LEXER
 - JAPANESE_LEXER, KOREAN_LEXER
 - KOREAN_MORPH_LEXER
3. データベース・ユーザー es_mail として、既存の索引 es_ot_ix_search ファイルを削除します。これにより以前付けられた電子メールの索引を削除します。
4. 手順 2 で選択したレクサーを使用して、索引 es_ot_ix_search ファイルを再作成します。これにより、以前索引が付けられた電子メールは、すべて新しいレクサーにより索引が付けなおされます。

5. 表領域 `esoratext` が存在するかどうかを確認します。
6. 次の SQL コマンドをデータベース・ユーザー `es_mail` として実行し、索引を作成します。

```
@ execute
CTX_DDL.CREATE_PREFERENCE('my_lexer','LEXER_NAME');

Create charset filter preference
@ execute
CTX_DDL.CREATE_PREFERENCE('my_charset_preference','CHARSET_FILTER');
@ execute
CTX_DDL.SET_ATTRIBUTE('my_charset_preference','charset','chosen_charset');
    chosen_charset : Globalization support name of source character set.

DROP INDEX es_ot_ix_search;

CREATE INDEX es_ot_ix_search ON es_imt_msgbody(text)
    indextype IS ctxsys.context
    parameters ('DATASTORE es_search_dsprof
    FILTER          my_charset_preference
    SECTION GROUP   es_search_sec_group
    STORAGE         oratextstore
    LEXER           my_lexer
    CHARSET COLUMN  cset') ;
```

7. 次のエントリの置換を行います。
 - `my_lexer` には一意の名前
 - `LEXER_NAME` には選択したレクサーの名前
 - `my_charset_preference` には一意の名前
 - `chosen_charset` にはソース・キャラクタ・セットの名前

制限

- 索引付けは 1 つのレクサーに制限されます。
- 索引付けは 1 つのキャラクタ・セットに制限されます。

既知のバグ

この項では、Oracle Email の既知のバグについて説明します。

管理

表 4-1 管理の既知のバグ

バグ番号	説明
3919476	ファイル名とタイプは、ATT0001.DAT 添付ファイルでは使用できません。 パラメータ <code>client.mail.attachment.defaultname</code> は、 <code>oc4j.properties</code> ファイルにインクルードされているので、ユーザーは新しいデフォルトのファイル名 <code>UnnamedAttachment.txt</code> を無効にすることができます。
3831808	<p>Oracle Webmail の「フォルダの選択」ドロップダウン・リストに共有フォルダはリストされていません。</p> <p>回避策：</p> <p>管理者は、ログイン時、または共有フォルダ・ページにアクセスされた時点で共有フォルダをロードするように構成できます。</p> <p>共有フォルダのロードを延期するには、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none">1. <code><Common-Modules></code> の <code>module</code> <code>class=RefreshSharedFoldersCache</code> をコメント行にします。2. 先行する <code><Transition-Entry name="_:gotosharedfolders"></code> の行を復帰させます。3. <code><Transition-Entry</code> <code>name="folder_list:gotosharedfolders"></code> の同じ行をコメント解除します。 <p>ログイン時に共有フォルダのロードを復帰させるには、上記のコメント行についての処理を反対にして実行します。</p>

表 4-1 管理の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
3823909	<p>Oracle Webmail クライアントから電子メールが送信されると、ユーロ記号が疑問符で表示されます。</p> <p>回避策：</p> <p>Oracle Collaboration Suite Webmail 9.0.4 では、電子メールはデフォルトで ISO-8859-1 キャラクタ・セットを使用して送信されます。このキャラクタ・セットにはユーロ記号が含まれていません。</p> <p>中間層の \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/oc4j.properties ファイルに、client.message.charset.default プロパティを次のように設定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中間層ホストで、\$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/oc4j.properties ファイルを開きます。 2. client.message.charset.default プロパティを編集します。UTF-8 など、ユーロ記号を含むキャラクタ・セットを入力します。 3. oc4j.properties ファイルを保存します。 4. 次のように、OC4J_UM を再起動します。 <pre>\$ dcmctl stop -co OC4J_UM -v \$ dcmctl start -co OC4J_UM -v</pre>
3264429	「管理」タブ内のオンライン・ヘルプが完全に表示されません。
3099032	翻訳されたオンライン・ヘルプを参照するには、Internet Explorer 6.0 を使用する必要があります。
3236819	<p>「スパム対策ポリシー」ページでの「サービス拒否攻撃を阻止」パラメータに対するパラメータ値に誤ったラベルが付けられています。現在「接続」とラベルが付けられたパラメータ値は、「スパム・フラッド間隔」を指し、分単位の時間間隔を表します。現在「メッセージ」とラベルが付けられたパラメータ値は、「スパム最大フラッド数」を指し、メッセージ件数に接続数を加算した値を表します。Enterprise Manager の SMTP_IN スパム対策設定からアクセスされる同じパラメータには、正しいラベルが付けられています。</p>
3265330	<p>Windows NT で稼働している Oracle Email Server では、データベース操作を実行すると次のエラーが出力されることがあります。</p> <pre>ORA-04031: 共有メモリの 4016 バイトを割当てできません ("large pool","unknown object","session heap","frame segment")</pre> <p>回避策： メール・ストア・データベースの初期化パラメータ large_pool_size を 0 に変更します。</p> <p>関連資料： 初期化パラメータ値の変更手順は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。</p>

表 4-1 管理の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
3221096	<p>oesbkp ユーティリティは、コマンドライン・パラメータが引用符で囲まれていないと機能しません。</p> <p>回避策： oesbkp ユーティリティのコマンドライン・パラメータはすべて引用符 (") で囲む必要があります。</p> <p>例：</p> <pre>oesbkp "task=backup" "user=john@acme.com" "password=welcome1" "admindn=cn=orcladmin" "ldaphost=ldap.acme.com" "ldapport=4032" "backupdir=c:\backup"</pre>
2918730	非アクティブのユーザーに対して、バックアップおよびリストアを実行できます。
3153905	umconfig.bat スクリプトを中間層で実行するとエラーが発生します。
3117825	<p>OESCTL コマンドによりメッセージが表示されます。</p> <pre>oesctl show targets, oesctl startup, oesctl shutdown</pre> <p>の各コマンドを実行すると次のメッセージが表示されます。</p> <pre>Admin not using default pool</pre> <p>このメッセージは無視してもかまいません。</p>
3029078	Administrator のオンライン・ヘルプがありません。
2978639	<p>最初のメール・ストアのメール・ストア構成に失敗した場合、電子メール用に orclguest ユーザーは設定されません。</p> <p>回避策：</p> <p>電子メールに orclguest アカウントを設定するには、次のスクリプトを起動します。</p> <pre>%ORACLE_HOME%\oes\bin\createEmailAccount.bat domain_name</pre> <p>変数の意味は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ORACLE_HOME は、中間層の Oracle ホームです。 ■ domain_name は、電子メールのドメインです。
2882795	メッセージ配信の最初の試みが失敗し、再試行された場合、メッセージ配信のシステム・ルールが、1 つのメッセージについて複数回起動されることがあります。
2349530	1 つのマシンに複数の Email Middle-Tier をインストールできません。

表 4-1 管理の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
2883242	管理ページから配信リストの同期オプションを有効にすると、objectclass 定義が継承されていても、objectclass 名のリストには groupofuniquenames または groupofnames を明示的に含める必要があります。
4172626	<p>5MB を超えるメール添付は失敗します。</p> <p>回避策（Oracle Collaboration Suite 9.0.4.2 にのみ適用）：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中間層ホストで、 \$ORACLE_HOME/j2ee/OC4J_UM/config/oc4j.properties ファイルを開きます。 2. oracle.mail.client.prefs.maxattachmentsize プロパティを編集します。値をバイト単位で入力します。デフォルトは 5000000 です。 3. oc4j.properties ファイルを保存します。 4. 次のように、OC4J_UM を再起動します。 \$ dcmtcl stop -co OC4J_UM -v \$ dcmtcl start -co OC4J_UM -v

移行

表 4-2 Migration Tool の既知のバグ

バグ番号	説明
2598308	索引はヘルプでは使用できません。ヘルプのキーワード検索は不可能です。ヘルプの目次は使用可能です。
2841542	<p>移行ツールにより、ユーザーの移行中に OutofMemoryException がスローされます。</p> <p>回避策：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. migrate.cmd/migrate.sh スクリプトを編集します。 2. Minimum Heap (-Xms) を使用可能な最大ヒープ・サイズに設定します。 3. %ORACLE_HOME%\oes\migration\config ディレクトリの esmigration.config ファイルを編集します。 4. oracle.mail.migration.num_of_threads を低い値に設定します。

表 4-3 Microsoft Exchange プラグインの既知のバグ

バグ番号	説明
2775294	移行後、マルチパート・メッセージまたは署名付きメッセージの内容がテキスト形式の添付ファイルとして表示されます。
2775252	MIME タイプがマルチパートまたは混合で、マルチパートまたはダイジェストのメッセージ部分を含むメッセージは、移行されません。
2760551	移行後、マルチパート・メッセージと並列メッセージが破損しています。
2516725	共有フォルダに所有者がいない場合、またはそのフォルダのデフォルト権限が定義されていない場合、Microsoft プラグインによって Microsoft Exchange サーバーからは共有フォルダが抽出されません。 回避策： フォルダを Oracle Email に移行する前に、すべてのフォルダに所有者があり、デフォルトの権限が定義されていることを確認します。
2558661	Microsoft プラグインでは、OLE オブジェクトが埋め込まれたメッセージを抽出できません。

表 4-4 Lotus Domino R5 プラグインの既知のバグ

バグ番号	説明
2632809	グローバリゼーション・サポート・メッセージを伴う MBOX ベースの移行後、Netscape 4.x を使用して一部の添付ファイルを開くことができません。 回避策： Netscape 7.0 または Outlook Express を使用して表示します。
2558661、 2827041	埋込みイメージと Notes のリッチ・テキスト形式は Lotus から移行されません（個人間メッセージの場合のみ）。
2775294、 2760551	multipart/parallel または multipart/signed のメッセージ・タイプの形式情報が失われます。
2991346	元のキャラクタ・セットが UTF-8 である漢字のメッセージのいくつかは、正しく移行されません。
2926772	メールボックスの抽出中、「No Message File for Product=OES」のメッセージがログに記録されます。

表 4-5 Novell GroupWise プラグインの既知のバグ

バグ番号	説明
2938463	通知メール項目がメールボックスから抽出されません。
8469032	受信日のかわりに作成日が抽出されます。

表 4-5 Novell GroupWise プラグインの既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
2950698	マルチバイトの添付ファイル名は、正しく移行されません（個人間メッセージ・タイプの場合）。
2801219	GroupWise プラグインでは、韓国語の添付ファイル名が正しく抽出されません。
2794199	HTML の本文部分は、個人間メッセージ・タイプの場合、正しく移行されません。

表 4-6 Samsung プラグインの既知のバグ

バグ番号	説明
2950501	非標準のクライアントを使用して構成されたメッセージは、ヘッダーが壊れていることがあります。
2921831、 2921810、 2921793、 2921763、 2921608	移行されたメッセージのいくつかは、Netscape 4.7x では正しく表示されません。 回避策： Netscape 7.0 または Outlook Express を使用してメッセージを表示します。
2850889	移行後のサーバー間メッセージは、Outlook Express で追加の添付ファイルとして表示されます。 回避策： MBOX の生成前に、ソースの Samsung Contact サーバー上の /var/opt/openmail/sys にある general.cfg ファイルで INET_INLINE_FNAME_ALLOWED=FALSE を設定します。 FALSE である場合、すべてのインライン本文部分で、たとえファイル名が存在しても、Content-Disposition 行の filename= がなくなります。

サーバー

表 4-7 IMAP サーバーの既知のバグ

バグ番号	説明
3316081	oesctl コマンドで IMAP プロセスが停止しません。 回避策： Oracle Enterprise Manager を使用して IMAP を起動および停止します。
2990674	IMAP ソート・コマンドが、ワイヤレス・プロファイル・フォルダで正しく機能しません。

表 4-8 リスト・サーバーの既知のバグ

バグ番号	説明
2977691	ネストされた外部配信リストの親に送信されたメッセージは、子の外部リスト用には保存されません。
2675017	メールマージ・タグ用に PL/SQL ファンクションによって返されるデータは、そのデータが挿入される電子メールのキャラクタ・セットに変換されません。
2637279	メールマージ・リストのメンバーに別名が作成され、そのようなリストにメールマージ・タグ付きの電子メールが送信されると、その別名の受信者に対するメールマージは不正確なものになります。他の通常のユーザーには影響はありません。

表 4-9 NNTP サーバーの既知のバグ

バグ番号	説明
3130827	<p>NNTP インバウンド・サーバーは、<code>orclmailnntpallowfeed</code> パラメータ値が Oracle Internet Directory で設定されていない場合、コアダンプします。</p> <p>回避策：</p> <p><code>orclmailnntpallowfeed</code> パラメータを TRUE または FALSE に設定します。</p>
2992003	<code>es.nntp.in.clients.total</code> 統計は収集されません。
3023652	アウトバウンド・サーバーは、NTTP ピアが最初の接続時に 200 応答コードで応答しない場合、コアダンプします。
3028400	ニュースグループやアーカイブ・メッセージのメッセージ自動削除が発生しません。
2988909	スパム対策パラメータ「ホスト・ドメインからの接続を拒否」は、NNTP インバウンド・サーバーによって認識されません。
2991982	拒否のために設定された Distribution ヘッダー値を含むアーティクルが受け入れられます。Distribution ヘッダーを含むメッセージのみが影響を受けます。
2982508	<code>oespr</code> ユーティリティでは、1 つのグループに複数のアウトバウンド・ピアを設定できません。ピア名は、新規の値を付け加えるのではなく、新規の値に置き換えることで、1 つのニュースグループが 1 つのピアに対してのみ供給されます。

表 4-10 ウィルス・スクラバの既知のバグ

バグ番号	説明
3276803	Symantec 社のスキャナのログは、C:\temp ディレクトリに書き込まれます。
2990786	外部フィルタ名に空白を含めることはできません。
2988901	<p>ウィルス・スクラバのウィルス・プリスキャン・フィルタは、Webmail クラウド管理ページを介して適用されると、非アクティブのままになります。</p> <p>回避策</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Oracle Enterprise Manager の「Unified Messaging」ページに移動します。 2. 「Virus Scrubber」→「デフォルト設定」を選択します。 3. 「プリスキャン」パラメータを有効にします。

Oracle Webmail

表 4-11 Oracle Webmail の既知のバグ

バグ番号	説明
3725525	共有フォルダ内のメッセージは削除できません。
3210748	アドレス帳のリストに対してメンバーの追加または削除はできません。
3210733	サブフォルダをトップレベルのフォルダの下に移動できません。
3032404	Oracle Webmail では、アラビア語のフォルダ名が正しく表示されません。
3118921、 3064349、 3039842、 3034705、 302786、 3027902	Oracle Webmail では、一部の言語の読み取り中に英語が表示されます。
3118633、 2435583	Oracle Webmail でのソートは、ASCII キャラクタ・セットに従って行われます。
3118765、 2958984	Oracle Webmail では、特定のキャラクタ・セット・エンコーディング (KO18-U と HZ-GB-22312) の処理時に問題が発生することがあります。
2468357、 2468378	Oracle Webmail では、UTF-7 でエンコードされたメッセージの処理時に問題が発生することがあります。
2478206	ユーザー ID にマルチバイト・キャラクタが含まれていると、その Oracle Email ユーザーは Oracle Webmail にログインできません。

表 4-11 Oracle Webmail の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
2759549	ヨーロッパ言語の文字が正しく表示されません。
3119310	<p>invite コマンドは、他のリスト・コマンドの後に実行すると機能しません。</p> <p>回避策： Oracle Webmail にログインした後、他のリスト・コマンドを実行する前に invite コマンドを実行します。invite コマンドより前にリスト・コマンドを実行した場合は、Oracle Webmail からログアウトして、再度ログインします。</p>
3041649	<p>フランス語でランタイム・エラーが発生します。</p> <p>回避策：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 次のファイルを編集します。 <code>%MIDTIER_HOME%\j2ee\OC4J_UM\applications\UMClientApp\um_client\templates\messge_list.uix</code> 2. 次の部分を <pre>function validateFolder () { if (gotofolderform.folder.value == "") { alert ('<rawText xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/cabo/marlin" data:text="HaveListPrivsImage@mailNLS"/>'); return (false); } else { return (true);</pre> 次のように変更します。 <pre>function validateFolder () { if (gotofolderform.folder.value == "") { alert ("<rawText xmlns:data="http://xmlns.oracle.com/cabo/ marlin" data:text="HaveListPrivsImage@mailNLS"/>"); return (false); } else { return (true);</pre>
3027912	Middle-Tier が ZH ロケール（中国語（簡体字））でインストールされている場合、メッセージ・リスト・ビューにメッセージの日付が表示されません。
3093934	<p>OJMA 暗号化が TRUE に設定されている場合、Oracle Email ポートレットで障害が発生します。</p> <p>回避策： この問題を回避するには、<code>%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties</code> ファイルで <code>oracle.mail.sdk.esmail.encryption</code> の値を FALSE に設定してから、opmn プロセスを再起動します。</p>

表 4-11 Oracle Webmail の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
3101018	メッセージ・リスト・ページのドロップダウン・リストからフォルダを選択できません。Linux のみの問題です。

ドキュメントの訂正

この項では、次のドキュメントにおける問題について説明します。

- [Oracle Email 管理者ガイド](#)
- [Oracle Email Migration Tool Guide](#)
- [Oracle Email アプリケーション開発者ガイド](#)
- [Oracle Email Java API Reference](#)

Oracle Email 管理者ガイド

この項では、『Oracle Email 管理者ガイド』に関するドキュメントの訂正について説明します。

- 「電子メール・クォータ / 追加クォータ」パラメータ
- IMAP 統計
- プロトコル・サーバーと Oracle Internet Directory の SSL の構成
- 表 9-5 リスト・サーバーのパラメータ
- Webmail クライアントが IMAP で動作しない

「電子メール・クォータ / 追加クォータ」パラメータ

このパラメータは、メール・ユーザーの電子メール用クォータを MB 単位で指定します。

範囲： 0MB ～ 1048576MB

IMAP 統計

表 4-12 IMAP 統計

統計	説明
.um.admin.os_pid	オペレーティング・システム・プロセス ID
.um.admin.uptime	サーバーが起動している時間
.ES_SPS.socket.currload	現在のクライアント接続数

表 4-12 IMAP 統計（続き）

統計	説明
<code>.ES_SPS.socket.sockmax</code>	許容されるクライアント接続の最大数
<code>.ES_SPS.thread.currthreads</code>	サーバーによって現在使用中のスレッド数
<code>.ES_SPS.thread.thrmax</code>	サーバーによって作成されるスレッドの最大数

プロトコル・サーバーと Oracle Internet Directory の SSL の構成

すべてのサーバー・プロセス・インスタンスには説明パラメータがあります。次のパラメータは構成オプションのサンプルです。

`-sslenable=yes`

`sslenable` の値は、`yes` または `no` の 2 つです。

関連資料： Oracle Internet Directory SSL の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

表 9-5 リスト・サーバーのパラメータ

PL/SQL タイムアウトのデフォルト値は 10 分です。

Webmail クライアントが IMAP で動作しない

9.0.4 版の『Oracle Email 管理者ガイド』では、Oracle Webmail クライアントは IMAP を介して動作するという記述がありますが、これは誤りで、実際は動作しません。(3667553)

Oracle Email Migration Tool Guide

この項では、『Oracle Email Migration Tool Guide』に関するドキュメントの訂正について説明します。

- [Oracle Collaboration Suite ドキュメントの参照](#)
- [第 2 章「Requirements Before Migration」](#)
- [第 3 章「Migration Tasks」](#)
- [付録 C](#)

Oracle Collaboration Suite ドキュメントの参照

『Oracle Collaboration Suite Configuration Handbook』は『Oracle Collaboration Suite Quick Installation Guide』に名前が変わりました。

『Oracle Collaboration Suite Configuration and Planning Guide』について言及されている箇所では、『Oracle Collaboration Suite Installation and Configuration Guide』を参照してください。

第 2 章 「Requirements Before Migration」

- Novell GroupWise の移行準備：

Novell Client バージョン 4.81 以上は、移行ツールがインストールされているマシンにインストールする必要があります。

- 移行オプションの選択：

Microsoft Exchange 5.0 および Microsoft Exchange 5.5 では、このリリースからのパブリック・エイリアスの移行はサポートされていません。

- Microsoft Exchange の移行準備

1. プロファイルを作成します。
2. Outlook Client が企業 / ワークグループのモードでインストールされているかどうかを確認します。

Outlook Client がインストールされているモードを確認するには、次のようにします。

1. Microsoft Outlook を開きます。
2. 「ヘルプ」の下で「バージョン情報」をクリックします。
3. 企業 / ワークグループのモードである場合は、変更の必要はありません。
4. インターネットのみのモードの場合は、設定を企業 / ワークグループのモードに変更します。

Microsoft Outlook のモードの設定をインターネットのみから企業 / ワークグループに変更するには、次のようにします。

1. Microsoft Outlook メニュー・バーの「ツール」をクリックします。
2. 「オプション」→「メール配信」→「メールサポートの再設定」を選択します。
3. ウィザードの指示に従い、「企業 / ワークグループ」ラジオ・ボタンを選択して、終了します。

注意： 障害がある場合は、Microsoft Outlook 2000 クライアントを明示的に企業モード・オプションでインストールします。

- インストール後：

1. 「スタート」→「コントロールパネル」→「メール」をクリックします。

2. 「プロファイル」をクリックします。
3. 「追加」をクリックします。
4. 適切な情報を入力します。
5. 標準 Windows NT アカウント（プロファイル作成に使用）が、Exchange Server マシンでサービス管理者または管理者ロールを持っているかどうかを確認します。ロールがない場合は、Microsoft Exchange Administrator プログラムを使用して、その NT ユーザーをサービス管理者アカウント・リストに追加します。
6. 与えた権限を有効にするには、Exchange サービスをいったん停止してから、再起動します。
7. Exchange Administrator プログラムがマシンにインストールされているかどうかを確認します。

第 3 章「Migration Tasks」

- フォルダ名にスラッシュ (/) がある場合、移行ツールではこれをアンダースコア (_) に置換し、フォルダ名の前に Renamed_ 付けます。

たとえば、元のフォルダ名が Sales/March の場合、名前は Renamed_Sales_March となります。

- 移行ツールのインストール方法：

ORACLE_HOME は移行ツールが実行されるマシンの任意のディレクトリに設定できます。Oracle がインストールされた適切なディレクトリである必要はありません。

設定された ORACLE_HOME の下にディレクトリ oes/migration を作成します。

- 配信リストの移行：

配信リストは、Oracle 上では SMTP 配信リストとしてのみ作成されます。これらの配信リストは、Webmail クライアント管理ページを使用して、リスト・サーバー・リストに変換できます。

関連資料： SMTP 配信リストおよびリスト・サーバー・リストの詳細は、『Oracle Email 管理者ガイド』を参照してください。

付録 C

パスワードが保護される IMAP ベースの移行のために、userlistgen によって users.xml ファイルが生成されます。このファイルは、ユーザーをロードするために移行ツールによって使用されます。

userlistgen.sh (Solaris の場合) および userlistgen.cmd (Windows の場合) を \$ORACLE_HOME/oes/migration/bin から実行します。

./userlistgen.cmd

移行ツールでは、標準の入力から次のパラメータを読み取ります。終了するには、**[Enter]** を 2 回押します。

たとえば、次のようになります。

```
sourceimapuserid=test1 sourceimappasswd=welcome1 targetimapuserid=test1
targetimapuserpasswd=welcome1 quota=50 sourceimapuserid=...
```

これが完了すると、`users.xml` ファイルを、移行ツールのファイル読取り先となるディレクトリにコピーする必要があります。

```
./userlistgen.sh file=file_name
```

移行ツールはファイル（移行ツールでサポートされた `users.xml` 形式）を読み取り、出力ファイルが同じディレクトリに、パスワード付きの保護された `users.xml` ファイル形式で生成されます。

入力ファイルの例は次のとおりです。

```
userlist
user sourceimapuserid="test1" sourceimappasswd="welcome1"
targetimapuserid="test1"
targetimappasswd="welcome1" quota="10" /
/userlist
```

Oracle Email アプリケーション開発者ガイド

この項では、『Oracle Email アプリケーション開発者ガイド』に関するドキュメントの訂正について説明します。

- [第 2 章「Java API リファレンス」](#)
- [ディレクトリ管理コードの例](#)

第 2 章「Java API リファレンス」

ディレクトリ管理 API: ディレクトリ・コンポーネント

コール元は、どのディレクトリ・コンポーネントにアクセスする前にも、`oracle.mail.OESContext` クラスを使用して、LDAP ディレクトリで認証される必要があります。認証されると、信頼できるセッションを表す `oracle.mail.OESContext` のインスタンスを、すべてのディレクトリ API に渡す必要があります。認証には、中間層の `ORACLE_HOME` においてと、ユーザー資格証明を提供する 2 つの方法があります。

中間層の Oracle ホームでの認証

この認証モデルでは、アプリケーションを中間層のホストに配置します。

`$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml` ファイルは、次の記述どおりに変更する必要があります。`$ORACLE_HOME` は、中間層ホストにおける Oracle ホームのパスです。

1. 元の \$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml ファイルのバックアップをとります。
2. \$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml を開きます。
3. ファイルの最後に移動します。
4. </jazn-policy> タグの前に、次の行を追加します。

```
<grant>
  <grantee>
    <codesource>
      <url>file:%JARFILE_NAME%</url>
    </codesource>
  </grantee>
  <permissions>
    <permission>
      <class>oracle.security.jazn.JAZNPermission</class>
      <name>logon</name>
    </permission>
  </permissions>
</grant>
```

変数の意味は次のとおりです。

%JARFILE_NAME% は、アプリケーション JAR ファイルの絶対パスです。

デバッグ・オプションをオフにし、アプリケーションとして認証する例：

```
OESContext oesctx = new OESContext (DirectoryConstants.DS_CALLERTYPE_APP,
false);
//Authenticate to the directory
oesctx.authenticate(null, oracle_home); //oracle_home is the oracle home path
on the middle tier host
```

スーパー・ユーザー資格証明を提供する認証

この認証モデルでは、アプリケーションは Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー資格証明 (cn=orcladmin または cn=umadadmin、cn=EmailServerContainer、cn=Products、cn=OracleContext の資格証明) を提供する必要があります。

デバッグ・オプションをオフにし、スーパー・ユーザー資格証明を渡して、アプリケーションとして認証する例：

```
OESContext oesctx = new OESContext (DirectoryConstants.DS_CALLERTYPE_APP, false);
//Authenticate to the directory
oesctx.authenticate(username, password, ldaphost, ldapport); //username - super
user dn, password - super
user password, ldaphost - OID host name, ldapport - OID port number
```

ディレクトリ管理コードの例

これらの例を実行するには、CLASSPATH 環境変数に次のものが含まれている必要があります。

```
jndi.jar, ldap.jar, providerutil.jar, classes12.zip, $ORACLE_HOME/jlib
/repository.jar, $ORACLE_HOME/jlib/esldap.jar, $ORACLE_HOME/jlib/escommon.jar,
$ORACLE_HOME/jlib/ojmisc.jar, $ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn.jar
```

\$ORACLE_HOME/oes/jazn/jazn-data.xml ファイルは、編集する必要があります。

Oracle Email Java API Reference

この項では、『Oracle Email Java API Reference』に関するドキュメントの問題について説明します。

- [OracleFolder addACI メソッド](#)
- [単純なメッセージの追加](#)
- [電子メールの自動終了 / 削除](#)
- [ログインとフェッチの例で使用されている不正な名前のサンプル](#)

OracleFolder addACI メソッド

OracleFolder addACI メソッドは、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) で次の ACI をサポートします。

a - administer: 他のユーザーが所有しているフォルダでの ACI の設定と削除を可能にします。

単純なメッセージの追加

(3376353) - 『Oracle Email アプリケーション開発者ガイド』の第 2 章「Java API Reference」の「単純なメッセージの追加」にある、Java を使用してメッセージをフォルダに追加するサンプル・コードには誤りがあります。先行する folder.open() への呼び出しがないために、folder.appendMessages() の呼び出しは「Noselect」エラーにより失敗します。

以下のコードは誤りです。

```
// Get record Folder. Create if it does not exist.
Folder folder = store.getFolder("INBOX");
Message msg = new MimeMessage(session);
msg.setFrom(new InternetAddress("oracle@oracle.com"));
msg.setRecipients(Message.RecipientType.TO,
    InternetAddress.parse("testuser1@umdev.us.oracle.com",
false));
msg.setSubject("Welcome!!!");
```

```
// collect(in, msg);
msg.setText("Hello welcome\n");
msg.setSentDate(new Date());

System.out.println("Total Number of messages : " +
    folder.getMessageCount());

Message[] msgs = new Message[1];
msgs[0] = msg;
folder.appendMessages(msgs);
```

次のコードに置き換えてください。

```
// Get record Folder. Create if it does not exist.
Folder folder = store.getFolder("INBOX");
System.out.println("Total Number of messages : " +
    folder.getMessageCount());

// Create a message
Message msg = new MimeMessage(session);
msg.setFrom(new InternetAddress("oracle@oracle.com"));
msg.setRecipients(Message.RecipientType.TO,
    InternetAddress.parse("testuser1@umdev.us.oracle.com",
false));
msg.setSubject("Welcome!!!");
msg.setText("Hello welcome\n");
msg.setSentDate(new Date());
// Append the message to the folder
Message[] msgs = new Message[1];
msgs[0] = msg;
folder.open(Folder.READ_WRITE);
folder.appendMessages(msgs);
```

電子メールの自動終了 / 削除

(3824231) - この情報は、既存の Oracle Collaboration Suite Mail ドキュメントに対する補足です。一定期間を過ぎたフォルダ内の電子メールを自動的に終了 / 削除する方法が記載されています。

es_folder テーブルには、フォルダごとに days_kept 属性があり、それぞれ es_folder_api.set_folder_expiry() API で変更できます。es_instance ごとに、終了日は actual_date + days_kept の値に設定されます。ガベージ・コレクタは、この設定をチェックし、終了日を過ぎたメールを削除します。これは、ユーザーの作成したフォルダのみが対象になります。システム・フォルダ（ごみ箱など）の場合は、days_kept/expiry は無視されます。

es_folder_api は公開 API ではないため、ドキュメント化されていません。フォルダの終了日は、OCS 10.1.1 の公開 API である mail_folder に記述されます。

9.0.4.2.x で使用したい場合は、`folder_id` で呼び出し、終了期限をパラメータ（日数）で指定します。この呼び出しの後、このフォルダに入るメッセージにはすべて（メッセージがフォルダにコピーされた日時）+（呼び出し内で渡された終了期限）という形式の終了日が付きます。ハウスキーパー・インスタンスが終了タスクを実行するように設定され、実際に稼働している場合は、終了日が経過した後、メッセージはハウスキーパーによって永久に消去されます。

`set_folder_expiry` 呼び出しの以前から存在しているメッセージは影響を受けないことに注意してください。同様に、終了期限を変更しても、影響を受けるのは変更した後に着信したメッセージのみです。また、メッセージが別のフォルダに移動された場合、メッセージの終了プロパティは引き継がれません。

例：ユーザー John Doe の Wastebasket というフォルダの終了期限を 7 日に設定するには、次の手順を実行します。

フォルダの `folder_id` を確認します。たとえば次のようにします。

```
select folder_id from es_folder where folder_name like '%/john.doe/Wastebasket%';
```

次に、終了日を設定します。

```
es_folder_api.set_folder_expiry(<folder_id>, 7);
```

これを行うためには、9.0.4.2 のパッチセットを適用しなければなりません。

ログインとフェッチの例で使用されている不正な名前のサンプル

(4309166) - ログインとフェッチの例で消失した可能性のあるデータの例（PL/SQL の章）で、サンプルの名前が不正です。

「ログインとフェッチ」の例には次のコードが含まれています。

```
mail_folder.set_msg_flags(sessionId, message_list,
                        bit_on(MAIL_MESSAGE.GC_SEEN_FLAG,
                              MAIL_MESSAGE.GC_DELETED_FLAG),
                        true);
--expunge INBOX to remove all the messages we have fetched
mail_folder.expunge_folder(sessionId);
```

このコードには危険性があります。それは、`expunge_folder()` メソッドが INBOX に対して呼び出されているからです。このコードは、「ログインとフェッチ」のサンプルとして扱わないでください。これらの行を削除するか、サンプルを実行する際には十分に注意してください。

Oracle Files

この章では、Oracle Files 関連の問題について説明します。

この章の構成は次のとおりです。

- [Oracle Files リリース 2 \(9.0.4.3\) の新機能](#)
- [サービス構成および Java メモリーのサイズ設定](#)
- [認証とシステム要件](#)
- [非推奨事項](#)
- [一般的な問題](#)
- [構成の問題](#)
- [Oracle Internet Directory の問題](#)
- [グローバリゼーション・サポートの問題](#)
- [ドキュメントの問題](#)
- [既知のバグ](#)

Oracle Files リリース 2 (9.0.4.3) の新機能

Oracle Files リリース 2 (9.0.4.3) の新機能は次のとおりです。

注意： Oracle Files リリース 2 (9.0.4.3) は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.1) の一部です。

ワークフロー構成の拡張

追加言語を追加するための Oracle Workflow 構成プロセスが簡単になりました。

ロシア語で使用可能な Oracle Files の Web UI と Oracle FileSync クライアント

リリース 2 (9.0.4.3) では、Oracle Collaboration Suite でサポートされている 9 つの新言語に加えて、Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースと Oracle FileSync ユーザー・インタフェースがロシア語に翻訳されています。

カスタム・ワークフローの作成

Oracle Files には、デフォルトのワークフロー・プロセスが付属しています。さらに、このリリースでは、Oracle Workflow でカスタム・ワークフロー・プロセスを定義し、Oracle Files に登録できるようになりました。カスタム・ワークフロー・プロセスはいくつでも設計し、登録できます。

また、このリリースでは新たに、指定された場所へのファイルの移動またはコピー、ファイルのバージョンing、ファイルの削除など、ワークフロー・プロセスが承認されたときに実行されるアクションを定義できます。

関連資料： Oracle Files で使用するためのカスタム・ワークフローの設計と登録の方法の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Files ユーザー・インタフェースへのブランド情報の追加

一部の組織では、特定の企業ロゴや配色を使用する規定など、ルック・アンド・フィールの基準があります。Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースは、それらの基準に合うようにカスタマイズできます。

システム管理者は、Oracle Files の Web UI に次のカスタマイズを行うことができます。

- Oracle Files の Web UI の色の変更
- Oracle Files の Web UI のフォントの変更
- 特定の Oracle Files の Web UI のイメージ（Oracle Files のロゴなど）の変更または置換え
- Oracle Files の Web UI のタイトル・バーの変更

関連資料： カスタムでのブランド情報の追加の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

マシンに障害発生後のドメイン・コントローラの信頼性の向上

ドメイン・コントローラは、Oracle Files ドメインの重要コンポーネントです。

Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) では、ドメインは次のような状況では簡単に停止、起動、監視または構成ができませんでした（ただし、ドメインはそのまま実行）。

1. RAC 構成でプライマリ・データベース・リスナーに障害が発生した場合
2. ドメイン・コントローラが稼働しているマシンに障害が発生した場合

最初の問題は、ドメイン・コントローラでデータベース間の通信に派生 JDBC Thin ドライバを使用するドメイン・コントローラが原因でした。この問題の対処法として、registry.xml ファイルでデータベース URL を指定できるようになりました。これは JDBC Thick ドライバ URL の指定に使用でき、これが透過的アプリケーション・フェイルオーバー（TAF）をサポートします。

2 番目の問題の対処法として、ドメイン・コントローラを別の中間層ホストに移行できるようになりました。

関連資料： ドメイン・コントローラの移行の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

自動ユーザー・プロビジョニング

Oracle Files リリース 1 (9.0.3.2) では、Oracle Internet Directory で作成されたユーザーは、24 時間ごとに Oracle Files で自動的に提供されました。この間隔を短縮するには、一連の手動の手順が必要でした。

現行リリースでは、この間隔が 15 分に短縮されました。さらに、Oracle Internet Directory で作成されたユーザーは、Web ユーザー・インタフェース経由で初めて Oracle Files にログインするときに、自動的に Oracle Files に提供されます。

サービス構成および Java メモリーのサイズ設定

Oracle Files リリース 2 (9.0.4.3) では、デフォルト・サービス構成が、無制限のセッションを許可することから、サービスに接続できるセッションの最大数を指定するように変更されました。これは `OC4J_iFS_files.default_island.1` または `application.log` で `java.lang.OutOfMemory` エラーが発生する可能性を減らすために行われました。

この変更が原因で、次のエラーが発生することがあります。

- Oracle Files の Web UI: 「現在のセッション数が、最大値に達しました。要求を後で再試行してください。」
- `OC4J_iFS_files.default_island.1` または `application.log`: 「IFS-20127: サービスがビジー状態です (最大同時セッション)。」

これらのいずれかのエラーが表示された場合、「サービス構成」を「Small」から「Medium」、または「Medium」から「Large」に変更するか、独自のカスタム・サービス構成を作成します。大規模サービス構成を使用する場合、あるいは独自のカスタム・サービス構成を作成する場合、使用している `-Xmx` 設定を調整する必要があります。

`OC4J_iFS_files.default_island.1` または `application.log` ファイルに `java.lang.OutOfMemory` エラーがある場合も、`-Xmx` 設定を調整する必要があります。

表 5-1 では、`-Xmx` 設定を変更する必要がある理由についての詳細を示しています。

注意： PCCU とは、ピーク時同時接続ユーザーを意味しています。PCCU は、その日のピーク時間中に Oracle Files にログインし、操作を実行したユーザーの数です。何人になるかわからない場合は、Oracle Files で名前が付けられているユーザー数全体の 10% を想定します。

表 5-1 Xmx の設定

サービス構成	IFS.SERVICE.Maximum ConcurrentSessions の設定	PCCU の予想数	Xmx (Java 最大メモリー) の推奨サイズ	デフォルトの Xmx 設定 256MB の変更の必要性
Small	40	25	64MB	×
Medium	70	45	162MB	×
Large	200	125	430MB	○

関連資料： サイズ設定およびパフォーマンスのチューニングの詳細は、『Oracle Files プランニング・ガイド』および『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

Xmx 設定の計算

Xmx 設定の計算の一般的なガイドラインは次のとおりです。

$$\text{Xmx} = \text{PCCU} \times 2.8\text{MB}$$

または、より正確に計算する場合

$$\text{Xmx} = (\text{PCCU} \times \text{PCCU 当たり 1.6 セッション} \times \text{セッション当たり 1MB}) + (\text{DATACACHE.Size} \times \text{データ・キャッシュ・オブジェクト当たり 3KB})$$

Xmx は 4GB を超えて設定できません。Oracle Files の場合、Xmx が 2GB を超えないようにすることをお薦めします。

Xmx 設定の変更

Oracle Files HTTP ノードの Xmx 設定を変更するには、次のようにします。

1. Oracle Files ノードが構成されているホスト上の Oracle Enterprise Manager Web サイトに移動します。たとえば、次のようになります。
`http://myserver.mycompany.com:1810`
2. `ias_admin` ユーザー名およびパスワードを使用して、ログインします。
3. Oracle9iAS ホーム・ページで、「OC4J_iFS_files」をクリックします。
4. 「サーバー・プロパティ」をクリックします。
5. 「Java オプション」を新しい `-Xmx` 設定に更新します。たとえば、Java ヒープに 430MB のメモリーを指定するために、「`-Xmx430m`」を入力します。
6. 「適用」をクリックして、変更を保存します。
7. Oracle9iAS ホーム・ページから `OC4J_iFS_files` を再起動します。

Oracle Files の正規ノードの Xmx 設定を変更するには、次のようにします。

1. Oracle Files ノードが構成されているホスト上の Oracle Enterprise Manager Web サイトに移動します。たとえば、次のようになります。
`http://myserver.mycompany.com:1810`
2. `ias_admin` ユーザー名およびパスワードを使用して、ログインします。
3. Oracle9iAS ホーム・ページで、Oracle Files ドメイン・ターゲット・リンクをクリックします。
4. Oracle Files ホーム・ページで、「構成」セクションの下の「ノード構成」をクリックします。
5. 「ノード構成」ページで、変更するノードの名前をクリックします。
6. 「ノード編集」ページで、「Java コマンド」を新しい `-Xmx` 設定に更新します。たとえば、Java ヒープに 430MB のメモリーを指定するために、「`-Xmx430m`」を入力します。
7. 「OK」をクリックして、変更を保存します。
8. ノードを再起動します。

サービス構成設定の調整

ピーク同時接続ユーザー（PCCU）が 125 を超えてしまった場合に、サービス構成で `IFS.SERVICE` 設定を調整する一般的なガイドラインは、次のとおりです。

`MaximumConcurrentSessions = 1.6 × PCCU`

`DATACACHE.Size = 400 × PCCU`

`DATACACHE.EmergencyTrigger = 0.80 × DATACACHE.Size`

`DATACACHE.UrgentTrigger = 0.75 × DATACACHE.Size`

`DATACACHE.NormalTrigger = 0.65 × DATACACHE.Size`

`DATACACHE.PurgeTarget = 0.55 × DATACACHE.Size`

`CONNECTIONPOOL.WRITEABLE.MaximumSize = 0.05 × PCCU`

`CONNECTIONPOOL.WRITEABLE.TargetSize = 0.04 × PCCU`

`CONNECTIONPOOL.WRITEABLE.MinimumSize = 5`

`CONNECTIONPOOL.READONLY.MaximumSize = 0.05 × PCCU`

`CONNECTIONPOOL.READONLY.TargetSize = 0.04 × PCCU`

`CONNECTIONPOOL.READONLY.MinimumSize = 5`

サービス構成のその他の設定は、一般に調整する必要はありません。

認証とシステム要件

Oracle Files には、次のいずれかのバージョンの Oracle データベースが必要です。

- リリース 2 (9.2.0.4) 以上のデータベース・パッチ・セットを適用した Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) の Information Storage データベース
- 外部のリリース 2 (9.2.0.4) 以上の Oracle データベース

クライアントの認証

次のクライアント・ソフトウェアは、Oracle Files が提供する各種プロトコルのサーバーについてテスト済で、認証されています。これら以上のオペレーション・システムおよびアプリケーション・サービス・パックと、マイナー・リリース番号のリリースはサポートされません。

NTFS

1. Microsoft Windows NT 4.0 Workstation Service Pack 6a と次のアプリケーション
 - Microsoft Office 2000 Service Pack 3
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3 と次のアプリケーション
 - Microsoft Office 2000 Service Pack 3
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
 - Microsoft Office XP Service Pack 2
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
 - Microsoft Visio 2000、2002

- Microsoft Project 2000、2002
- Adobe Acrobat 5.0
- 3. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1 と次のアプリケーション
 - Microsoft Office 2000 Service Release 1
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
 - Microsoft Office XP Service Pack 2
 - Microsoft Word 2000
 - Microsoft Excel 2000
 - Microsoft PowerPoint 2000
 - Microsoft FrontPage 2000
 - Microsoft Office 2003 Professional
 - Microsoft Word 2003
 - Microsoft Excel 2003
 - Microsoft PowerPoint 2003
 - Microsoft FrontPage 2003
 - Microsoft Visio 2000、2002、2003
 - Microsoft Project 2000、2002、2003
 - Adobe Acrobat 5.0

Web ブラウザ (Web ユーザー・インタフェースおよび Enterprise Manager Web サイト用)

1. Microsoft Windows
 - Netscape Communicator 7.x
 - Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2
 - Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1
 - Mozilla 1.2.1、1.1
2. Macintosh
 - Microsoft Internet Explorer 5.1、5.2
3. Linux
 - Netscape Communicator 7.x
 - Mozilla 1.2.1、1.1
4. UNIX
 - Mozilla 1.2.1、1.1

FTP クライアント

1. Microsoft Windows
 - OnNet FTP 4.0
 - WS_FTP Pro 7.6
 - Cute FTP Pro 3.0
 - Hummingbird 7.0
2. UNIX
 - コマンドライン FTP の Solaris 2.8、2.9
3. Macintosh OS X.2
 - Transmit 2.5.1

AFP

Mac OS X.2 と Microsoft Office Mac X

- Microsoft Word for Mac OS X
- Microsoft Excel for Mac OS X
- Microsoft PowerPoint for Mac OS X

NFS クライアント・サポート

1. Microsoft Windows
 - Hummingbird NFS Maestro 6.0 (Windows NT)
 - Hummingbird NFS Maestro 7.0 (Windows NT/2000)
 - OnNet 7.0 (Windows 2000 のみ)
2. UNIX
 - Solaris 2.8 および 2.9
 - Linux Advanced Server 2.1、Kernel 2.4.9-e.16
 - Linux Red Hat 8.0

WebDAV: Web フォルダ

1. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1
 - Microsoft Office XP Service Pack 2 と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 10.145.3914.17
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
 - Microsoft Office 2000 Service Release 1 と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.5219.0
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0

- Microsoft Office 2003 Professional と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 11.0.5510.0
 - Microsoft Word 2003
 - Microsoft Excel 2003
 - Microsoft PowerPoint 2003
 - Microsoft Visio 2003
 - Microsoft Project 2003
- 2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3
 - Microsoft Office XP Service Pack 2 と、Microsoft Internet Explorer 6.02 Service Pack 1 および MSDAIPP.DLL バージョン 10.145.3914.17
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft FrontPage 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
 - Microsoft Office 2000 Service Pack 3 と、Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2 および MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.3521.0
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002
 - Microsoft Visio 2002
 - Microsoft Project 2002
 - Adobe Acrobat 5.0
- 3. Microsoft Windows NT 4.0 Workstation Service Pack 6a と次のアプリケーション
 - Microsoft Office 2000 Service Pack 3 と、Microsoft Internet Explorer 5.5 Service Pack 2 および MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.3521.0
 - Microsoft Word 2002
 - Microsoft Excel 2002
 - Microsoft PowerPoint 2002

– Microsoft FrontPage 2002

WebDAV: Oracle FileSync クライアント

1. Microsoft Windows XP Professional Service Pack 1
2. Microsoft Windows 2000 Professional Service Pack 3
3. Microsoft Windows NT Workstation Service Pack 6
4. Microsoft Windows 98

非推奨事項

このリリースでは、次の機能を使用しないでください。

AFP サポートへの変更

AppleTalk Filing Protocol (AFP) は、Oracle Files の将来のリリースではサポートされません。将来のリリースでは、Mac ユーザーは SMB または WebDAV を使用できます。

一般的な問題

Oracle Files を使用する前に知っておく必要がある、一般的な操作および管理上の問題がいくつかあります。バグについては、5-19 ページの「[既知のバグ](#)」でさらに詳しく説明しています。

ワークスペースの作成で発生するエラー

有効な SMTP サーバーが Oracle Files の構成時に指定されていない、あるいはユーザーの電子メール・アドレスが NULL または無効である場合、ワークスペースの作成など、電子メール通知が必要な Oracle Files 操作はすべて失敗します。

サブスクライバ管理者のパスワードは電子メールでサブスクライバ管理者に送信されるため、構成時に有効な SMTP サーバーが指定されていない場合、サブスクライバ管理者は管理タスクをまったく実行できなくなります。たとえば、サブスクライバ管理者は、ユーザー、クォータまたはカテゴリの管理、サブスクライバ設定の指定、あるいはファイルのリストアを行うことができません。

この問題の詳細は、バグ [2520112](#) を参照してください。

Windows XP での Web フォルダのマッピング

Windows XP で Web フォルダ・マッピングを作成するときには、ポート 80 を使用する場合でもポートを明示的に指定する必要があります。たとえば、次のようになります。

`http://foo.acme.com:80/files/content`

ポート番号を指定しない場合は、Windows XP ではファイル・システム・リダイレクタが使用されますが、Oracle Files WebDAV サーバーとの併用はサポートされていません。

Internet Explorer を使用した HTML ファイルの保存

Internet Explorer を使用して Oracle Files の Web UI から HTML ファイルを開き、「ファイル」→「名前を付けて保存」を選択して内容をダウンロードする場合、そのファイルはデフォルトで「Web ページ、完全」というファイルの種類で保存されます。このファイルの種類でファイルを保存すると、Internet Explorer のデフォルトの動作により、HTML ファイル内の相対リンクはすべて絶対リンクとして記述しなおされます。

この動作を望まない場合は、保存する前に「Web ページの保存」ダイアログ・ボックスで別のファイルの種類（「Web ページ、HTML のみ」など）を選択してください。または、「ファイルの参照」ページでファイルを右クリックして「対象をファイルに保存」を選択すれば、この動作は行われません。

構成の問題

Oracle Files の構成に関する問題がいくつかあります。

ワークフローの問題

この項では、Oracle Workflow 関連の構成の問題について説明します。

カスタム・ワークフローの作成

カスタム・ワークフローを作成するには、Windows NT、Windows 2000 または Windows XP のシステム上で Oracle Workflow Builder を使用する必要があります。Oracle Workflow Builder は Oracle Technology Network (OTN) からダウンロードできます。

関連資料：

- カスタム・ワークフロー作成の詳細は、『Oracle Workflow ガイド』を参照してください。
- Oracle Files 固有のカスタム・ワークフローの要件の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

カスタム・ワークフローは作成後、ワークフロー・スキーマにロードすることにより、Oracle Files で使用可能にする必要があります。これには、カスタム・ワークフローを .wft ファイルとして保存し、ワークフロー・スキーマが常駐する中間層マシンにこのファイルをコピーし、wflowd を使用して .wft ファイルをロードします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\wflowd -u workflow_schema_name/workflow_schema_password@database
_URL workflow_file_location/workflow_file_name
```

たとえば、次のようになります。

```
%ORACLE_HOME%\bin\wflowd -u OWF_MGR/MY_PASSWORD@qa8-sun.us.oracle.com/private/
oracle/MyCustomWorkflow.wft
```

関連資料： カスタム・ワークフローの Oracle Files への登録の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

LDAP パッケージ

Oracle Collaboration Suite の Information Store 以外の外部 Oracle リリース 2 (9.2.0.3) データベースを使用している場合は、LDAP PL/SQL API のカタログがこのデータベースにロードされていることを確認する必要があります。

カタログの有無を確認するには、データベース層で SYS ユーザーとして次の SQL*Plus コマンドを実行します。

```
DESC DBMS_LDAP
```

そのようなパッケージが存在しない場合には、データベース層で

```
%ORACLE_HOME%\rdbms\adminにある catldap.sql スクリプトを SYS ユーザーとして
実行します。これにより、データベースにカタログが作成されます。
```

注意： 必ずデータベースの Oracle ホームにある catldap.sql を実行してください。Middle-Tier または Infrastructure の Oracle ホームからスクリプトを実行しないでください。

複数のインスタンス

同じ Oracle Workflow スキーマを使用して、2 つの異なる Oracle Files ドメインをサポートすることはできません。同じデータベース・インスタンスによって使用されている複数の Oracle Files ドメインがある場合、異なる Oracle Workflow スキーマを（Oracle Files スキーマの場合と同様に）持つ必要があります。

構成中、既存の Oracle Workflow スキーマを再利用することのないように、OWF_MGR のデフォルト値とは異なる Oracle Workflow スキーマ名を選択することもできます。

Oracle Workflow へのユーザーの提供

Oracle Internet Directory で新しい Oracle Files ユーザーが作成されたら、次の SQL*Plus コマンドを実行して新規ユーザーを Oracle Workflow に提供します。

```
set serveroutput on size 1000000
declare
    ret_code boolean;
begin
    ret_code := wf_ldap.synch_changes();
    if (ret_code) then
        dbms_output.put_line('WF_LDAP.Synch_Changes successful');
    else
        dbms_output.put_line('WF_LDAP.Synch_Changes failed. Please try again');
    end if;
exception
    when others then
        dbms_output.put_line('Exception encountered : ' || sqlerrm);
end;
/
```

注意： wf_ldap.synch_changes() を一定の間隔で自動的に実行する DBMS_JOB を作成することをお勧めします。

キャッシュの問題

/files/content の下にあるコンテンツを Oracle9iAS Web Cache を使用してキャッシュすることは、様々なセキュリティ上の問題によりできません。

Oracle Internet Directory の問題

この項では、Oracle Files 固有の Oracle Internet Directory の問題について説明します。

関連資料： 既知のすべての問題の詳細は、<http://otn.oracle.com/documentation> で『Oracle Internet Directory Release Notes』を参照してください。

ユーザー・プロビジョニング障害

Oracle Internet Directory で作成されたユーザーが Oracle Files に提供されない、または新規に提供されたユーザーを Oracle Files ワークスペースに追加できないことがあります。

これらの問題が発生した場合、Oracle Internet Directory で必要なユーザー属性を設定していないことが原因と考えられます。次の Oracle Internet Directory ユーザー属性は、すべてのユーザーについて NULL 以外の値を設定する必要があります。

- sn
- givenName
- mail
- username

username 属性は、サブスクライバの Oracle コンテキストで orclCommonNicknameAttribute によって指定されます。

関連資料： orclCommonNicknameAttribute の表示の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

グローバリゼーション・サポートの問題

以前は National Language Support (NLS) として知られていた Oracle Files グローバリゼーション・サポート関連の問題がいくつかあります。

Internet Explorer でドキュメントにマルチバイトのファイル名を付けて保存する際のエラー

Internet Explorer の「名前を付けて保存」コマンドを使用し、ドキュメントにマルチバイトのファイル名を付けて保存する場合、「Web ページの保存」ダイアログに表示されるファイル名が文字化けします。

この問題を解決するには、Internet Explorer で「常に UTF-8 として URL を送信する」オプションを有効にします。

1. 「ツール」→「インターネット オプション」を選択します。
2. 「詳細設定」タブを選択します。
3. 「常に UTF-8 として URL を送信する」オプションをチェックします。
4. 「OK」をクリックします。

粗い太字フォントまたはイタリック・フォント

日本語、中国語（簡体字）、中国語（繁体字）、韓国語の環境で実行するとき、Configuration Assistant で太字とイタリック体のフォントが粗く見え、読みにくくなります。

この問題は JDK の 1.3.1_02b バージョンにおける問題が原因で、JDK 1.3.1_04 に移行することにより解決できます。この問題は Oracle Files の将来のリリースで修正されます。

キャラクタ・セットの制限

Oracle Text では、AL32UTF-8 データベースの中国語、日本語、韓国語のレクサーをサポートしていないため、Oracle Files では、アジア言語用の AL32UTF-8 データベースがサポートされていません。このようなデータベースでは、中国語、日本語および韓国語のドキュメントは、索引が付けられず、検索できません。Unicode ベースのファイル・システムの推奨キャラクタ・セットは UTF-8 です。バグ [2391425](#) も参照してください。

ドキュメントの問題

この項では、Oracle Files のドキュメント関連の問題について説明します。

Oracle Files の Web UI のフォント特性の変更

『Oracle Files 管理者ガイド』には、Oracle Files の Web UI のフォント特性の変更手順が記載されています。フォント特性を変更する場合、管理者が `custom.xss` という XML スタイル・シートを編集する必要があります。

管理者は、このプロセスの一環として、`blaf.xss` という別の XML スタイル・シートからテキストをコピーする必要もあります。次の追加情報は、管理者がこの手順を実行するとき役に立ちます。

Oracle Files の Web UI のフォント特性を変更するには、次のようにします。

1. 各中間層で `custom.xss` のバックアップ・コピーを作成します。`custom.xss` ファイルは、次のディレクトリにあります。

```
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_iFS_files\applications\files\files\cabo\styles
```

2. 次のディレクトリにある `blaf.xss` を開きます。

```
%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_iFS_files\applications\files\files\cabo\styles\blaf.xss
```

3. `blaf.xss` から次のエントリをコピーします。

```
<!-- The default font family -->
<style name="DefaultFontFamily">
<property name="font-family">Arial,Helvetica,Geneva,sans-serif</property>
</style>
```

```
<!-- The default font -->
<style name="DefaultFont">
<includeStyle name="DefaultFontFamily"/>
<property name="font-size">10pt</property>
</style>
```

このファイルは編集しないよう注意してください。

4. `custom.xss` のライブ・コピーを開き、手順 3 のテキストを貼り付けます。
5. 2つのエントリを適宜変更します。たとえば、エントリを次のように変更します。

```
<!-- The default font family -->
<style name="DefaultFontFamily">
<property name="font-family">
Times New Roman,Arial,sans-serif
</property>
</style>
```

```
<!-- The default font -->
<style name="DefaultFont">
<includeStyle
name="DefaultFontFamily"/>
<property name="font-size">
9pt
</property>
</style>
```

6. 各中間層で `custom.xss` に加えた変更を保存します。

既知のバグ

次のバグは、このリリースの **Oracle Files** に存在することが知られているものです。存在する場合には、回避策が記述されています。既知のバグは、次のプロセスまたはコンポーネントごとに表にまとめられています。

- [表 5-2 「構成のバグ」](#)
- [表 5-3 「管理のバグ」](#)
- [表 5-4 「一般的な Oracle Files のバグ」](#)
- [表 5-5 「HTTP/WebDAV のバグ」](#)
- [表 5-6 「NFS のバグ」](#)
- [表 5-7 「AFP のバグ」](#)
- [表 5-8 「NTFS のバグ」](#)
- [表 5-9 「Oracle FileSync のバグ」](#)

表 5-2 構成のバグ

バグ番号	説明	処置
2944440	<p>Oracle Workflow では SSL 対応の Oracle Internet Directory が使用されません。</p> <p>Oracle Files は SSL 対応の Oracle Internet Directory インスタンスで機能しますが、Oracle Workflow は非 SSL ポートでのみ機能します。</p>	<p>Oracle Files が SSL 対応の Oracle Internet Directory ポートで機能するように構成されているかどうかに関係なく、Oracle Workflow は非 SSL の Oracle Internet Directory ポートで機能するように構成する必要があります。</p>
2961091	<p>Oracle Workflow ではアラビア語は使用できません。</p> <p>このリリースでは、Oracle Workflow にアラビア語が実装されていません。これは Oracle Workflow の制限です。</p>	<p>ありません。</p>
2851941	<p>Oracle Files Configuration Assistant は、ロード・バランシングが行われるマルチノード RAC データベースに対しては実行できません。</p> <p>マルチノード RAC データベースとロード・バランシングが行われるポートを使用している場合は、Oracle Files Configuration Assistant が機能しません。</p>	<p>RAC 構成時に、ロード・バランシングが行われないデータベース・サーバー・ポートを設定します。次に Oracle Files Configuration Assistant をこのポートに対して実行します。</p>
2960519	<p>同じ中間層で構成および設定された Oracle Files スキーマを再利用すると、エージェントで問題が発生します。</p> <p>Oracle Files Configuration Assistant を同じ Oracle ホームで同じ Oracle Files ドメインおよびスキーマに対して複数回実行すると、次の場合に、ローカル・ノードのエージェントが非アクティブになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Files Configuration Assistant を 2 回目実行する前に、すでに中間層にノードが存在し、すべてのエージェントがその中で稼働するように設定されている場合 ■ Oracle Files Configuration Assistant の 2 回目の実行中に「エージェントの実行」チェックボックスを選択した場合 	<p>アップグレード後プロセスで障害が発生したために Oracle Files Configuration Assistant を再度実行する必要がある場合に、この問題が起こることがあります。</p> <p>Oracle Files Configuration Assistant の「ノード構成」画面で「エージェントの実行」チェックボックスを選択しなければ、この問題を回避できます。</p> <p>Oracle Files Configuration Assistant をすでに複数回実行しており、エージェントが非アクティブになってしまっている場合に、この問題を解決するには、Oracle Enterprise Manager Web サイトで、対象となるノードのすべてのエージェントを「有効」に設定します。各エージェントを個別にアクティブにする必要があります。</p>
2520112	<p>ユーザーの電子メール・アドレスに問題がある場合、ワークスペースの作成と同時にエラーが発生します。</p> <p>有効な SMTP サーバーが指定されていない、またはユーザーの電子メール・アドレスが NULL または無効である場合、電子メール通知が必要な Oracle Files 操作はすべて失敗します。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. FilesBaseServerConfiguration パラメータで、有効な SMTP サーバーが指定されていることを確認します。 IFS.SERVER.APPLICATION.UIX.SmtpServer 2. ユーザーが NULL でない有効な電子メール・アドレスを持っていることを確認します。

表 5-2 構成のバグ（続き）

バグ番号	説明	処置
2391425	<p>NLS: AL32UTF8 データベースの日本語環境で IFSCONFIG が失敗します。</p> <p>Oracle Text では、AL32UTF8 データベースの日本語レクサーをサポートしていないため、Oracle Files では、アジア言語用の AL32UTF8 データベースがサポートされていません。</p>	データベースについて AL32UTF8 ではなく UTF8 を使用します。
3124801	<p>Oracle Files リリース 2 (9.0.4.3) のインストール時に、余分なドキュメント・ディレクトリが作成されます。</p> <p>Oracle Files には次の古いディレクトリが付属しています。</p> <pre>%ORACLE_HOME%\ifs\files\doc\</pre> <p>このディレクトリ内の情報は古いものであり、その使用は想定されていません。</p>	このディレクトリ内のドキュメントを参照しないでください。
3214142	<p>正規ノードの Java コマンドを変更する必要があります。</p> <p>現在、Oracle Files の正規ノードの Java コマンドには、次の引数が含まれています。</p> <pre>-XX:+OverrideDefaultLibthread</pre> <p>この引数は削除する必要があります。この引数をそのままにしておくと問題の原因になります。</p>	<p>次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中間層マシンで Oracle Enterprise Manager Web サイトにログインし、「ノード構成」ページに移動します。 2. 各正規ノードの構成について、「Java コマンド」プロパティから <code>-XX:+OverrideDefaultLibthread</code> を削除し、「OK」をクリックします。 3. 各正規ノードを再起動します。 <p>関連資料： ノードの構成の変更および正規ノードの再起動の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>注意： 作成した新規ノードの構成にこの引数が含まれていないことを確認してください。</p>

表 5-2 構成のバグ（続き）

バグ番号	説明	処置
2522186	<p>Oracle Files Configuration Assistant では、Thin ドライバを使用して RAC データベースへの接続を確立できません。</p> <p>Oracle Files Configuration Assistant では、Thin JDBC ドライバを使用して RAC データベースへの接続を SYS 'AS SYSDBA' として確立しようとしませんが、失敗します。</p>	<ol style="list-style-type: none"> データベースのコンピュータで、次のコマンドをコマンドラインに 1 行で入力し実行します。 <pre>orapwd file=%ORACLE_HOME%\dbs\orapw password=password entries=5</pre> <p><i>password</i> は、SYS ユーザー・パスワードの新しい値です。</p> 次の 2 つのコマンドを SQL*Plus で実行し、SYS ユーザーのパスワードを変更します。 <pre>connect / as sysdba ALTER USER sys IDENTIFIED BY password</pre> <p><i>password</i> は、手順 1 で指定した値です。</p> 次の行を <code>init.ora</code> ファイルに追加します。 <pre>REMOTE_LOGIN_PASSWORDFILE=EXCLUSIVE</pre>
3016906	<p>Windows 64 ビット版の Oracle9i Database Server リリース 2 (9.2) データベースに対して Oracle Files は構成できません。</p> <p>データベースには、スキーマで Oracle Text を有効にするために必要な <code>ctxhx</code> 実行可能ファイルがありません。</p>	<p>2 つの解決策が考えられます。</p> <ol style="list-style-type: none"> Oracle Files の構成中に「Oracle Text の検証が失敗しました。」というエラー・メッセージが表示された場合は、「OK」をクリックし、Oracle Text を有効にせずにスキーマを作成します。 独自の <code>ctxhx</code> 実行可能ファイルを作成します。

表 5-2 構成のバグ（続き）

バグ番号	説明	処置
3313333	<p>Oracle Workflow ヘルプは、デフォルトでは構成されません。</p> <p>Oracle Workflow リリース 2.6.2 以下では、ヘルプを手動で構成する必要があります。</p>	<p>最初にヘルプ・ファイルを解凍します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. %ORACLE_HOME%\wf に移動します。 2. wfdoc262.zip を %ORACLE_HOME%\wf ディレクトリに解凍します。ヘルプ・ファイルが %doc%\us ディレクトリに抽出されます。 <p>次に、OA_DOC 仮想ディレクトリを構成します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. %ORACLE_HOME%\apache\apache\conf に移動します。 2. httpd.conf を開いて編集します。 3. 「別名」セクションで、次の行を追加します。 Alias /OA_DOC/ "%ORACLE_HOME%\wf\%doc/" 注意： %ORACLE_HOME% に絶対パスを代入します。 4. Oracle HTTP Server を再起動します。この方法の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

表 5-3 管理のバグ

バグ番号	説明	処置
2867479	<p>Oracle Files へのアクセス時にユーザー認証が失敗することがあります。</p> <p>このエラー・メッセージは、複数の Oracle Internet Directory サーバーに対してロード・バランサを使用する構成で発生します。Oracle Internet Directory サーバーに対する中間層で、一定の非アクティブ期間（ロード・バランサでの接続タイムアウト期間と同じ）の後、ユーザーがドメインにログインしようとするときに、エラーが発生します。問題は、システム上にほとんどユーザーがいない場合に起こる傾向があります。アクティブ・ユーザーが多いほど、問題の発生は少なくなります。これは、中間層と Oracle Internet Directory 間の対話のレベルが自動的に増加し、その結果、中間層と Oracle Internet Directory 間の接続がタイムアウトになることがないためです。</p>	<p>ユーザーは操作を再試行でき、一般にはこれで解決します。または、Oracle Internet Directory サーバーへの接続に使用されるロード・バランサでの接続タイムアウト期間を長くします。</p>
2408925	<p>Oracle Enterprise Manager では、サービス名に無効な文字を入力できます。</p> <p>名前にセミコロン (;) が入っているサービス構成オブジェクトは、問題の原因になります。</p>	<p>サービス名では ; を使用しないでください。</p>
2746006	<p>Oracle Files スキーマ・パスワードが変更された場合、Oracle Files ドメインを停止できません。</p> <p>ドメインを起動または停止できるようにするには、Oracle Files のスキーマ・パスワードが必要です。</p>	<p>実行されている Oracle Files インスタンスのスキーマ・パスワードを変更しないでください。</p>
2852809	<p>デフォルト・サブスクライバが LDAP サーバーで変更されたときはいつでも、Oracle Files ドメインを再起動する必要があります。</p> <p>Oracle Files ドメインの起動後に、Oracle Internet Directory でデフォルト・サブスクライバが変更された場合、新しいデフォルト・サブスクライバでは <code>username@subscribername</code> の書式のユーザー名でユーザーが作成されます。</p>	<p>ドメインを再起動し、Oracle Internet Directory でデフォルト・サブスクライバを変更した後で、古いデフォルト・サブスクライバを Oracle Files から削除します。</p>

表 5-3 管理のバグ（続き）

バグ番号	説明	処置
3200712	<p>Oracle Enterprise Manager のノード統計ページには、OS が Windows 2003 ではなく Windows 2000 と出力されます。</p> <p>Windows 2003 サーバーの JDK 1.3.1 で実行されている Oracle Files のノードの場合、Oracle Enterprise Manager Web サイトの「ノードのパフォーマンスおよび統計」ページには、Windows 2003 ではなく Windows 2000 としてノードのオペレーティング・システム名が表示されます。</p>	ありません。これは JDK 1.3.1 の制限です。
2573630	<p>管理権限を持つ Windows ネットワーク / ドメイン・ユーザーは、Oracle Enterprise Manager Web サイトでドメイン・コントローラまたはノードを起動できません。</p> <p>これはこのリリースに対する Oracle Enterprise Manager の制限です。</p>	<p>「バッチ・ジョブとしてログオン」権限を持つローカル・ユーザーを設定し、そのローカル・ユーザーを使用して Oracle Enterprise Manager Web サイトからドメイン・コントローラおよびノードを起動します。</p> <p>または、ネットワーク・ユーザーを使用し、ifsctl によりコマンドラインからドメイン・コントローラおよびノードを起動できます。</p>
3231664	<p>ifsctl.bat の実行に使用されたコマンド・ウィンドウを閉じることができません。</p> <p>Windows の制限が原因で、Oracle Files のドメイン・コントローラおよびノードを管理するために ifsctl.bat を実行しているコマンド・ウィンドウを閉じることができません。コマンド・ウィンドウを閉じると、そのウィンドウから起動された Oracle Files プロセスは停止します。</p>	<p>ifsctl.bat を実行しているコマンド・ウィンドウを閉じないでください。</p> <p>または、Oracle Enterprise Manager Web サイトをローカル・ユーザーとして使用してドメインおよびノードを管理できます。</p>

表 5-4 一般的な Oracle Files のバグ

バグ番号	説明	処置
2414889	<p>検索で AFP リソース・フォークが除外されません。</p> <p>Oracle Files の拡張検索では、AFP リソース・フォークを検索結果に含めることができます。これらのファイルで実行されるアクションは、すべてエラーになります。</p>	検索結果ではこれらのファイルを無視します。

表 5-4 一般的な Oracle Files のバグ（続き）

バグ番号	説明	処置
3200325	<p>Oracle Collaboration Suite Search では、Oracle Files のコンテンツに対するユーザー名について完全一致のみサポートします。</p> <p>Oracle Files の Oracle Collaboration Suite Search では、指定された値が有効な Oracle Files ユーザーと一致しない場合は、「ユーザー名」フィールドの内容が無視されます。</p>	<p>Oracle Files のコンテンツを検索する場合は、Oracle Collaboration Suite Search の「ユーザー名」フィールドに完全一致を指定します。ワイルド・カードは使用しないでください。</p>
2518871	<p>Oracle Files の圧縮機能で圧縮されたマルチバイトのファイル名を持つファイルは、UTF8 をサポートするユーティリティで解凍する必要があります。</p> <p>Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースの圧縮機能を使用し、マルチバイトのファイル名を持つファイル（ファイル群）を圧縮する場合、WinZip では UTF8 がサポートされていないため、WinZip を使用して解凍することはできません。</p>	<p>Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースの解凍機能を使用してファイルを解凍するか、または JAR ユーティリティを使用してファイルをローカルに解凍します。</p>
3078486	<p>ユーザーのパスワードに記号が含まれている場合、問題が発生する可能性があります。</p> <p>Oracle Files ユーザーのパスワードに記号（;、%、# など）が含まれている場合、このユーザーは Oracle Files でプロトコル・アクセスを有効にできないことがあります。また、このユーザーは Oracle Files の Web UI を使用して SSO パスワードを変更できないことがあります。</p>	<p>この問題を解決するには、次のいずれかの方法を選択します。</p> <p>方法 1</p> <ol style="list-style-type: none">1. 使用しているサービス構成で、サービス構成プロパティ IFS.SERVICE. CaseSensitiveAuthentication が FALSE に設定されていることを確認します。 関連資料： サービス構成パラメータの表示と設定の詳細は、『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。2. 問題のユーザーのいずれかが Oracle Files のインストール前から Oracle Internet Directory に存在していた場合は、Oracle Internet Directory ツールを使用して、そのユーザーのパスワードをリセットします。パスワードは、同じ値にリセットすることも、別の値を選択することも可能です。 <p>方法 2</p> <p>大 / 小文字の区別のある認証を使用する場合、パスワードに記号を含めることをユーザーに許可しないでください。既存のユーザーのパスワードのうち、記号が含まれているものを Oracle Internet Directory ツールを使用して変更します。</p>

表 5-5 HTTP/WebDAV のバグ

バグ番号	説明	処置
2393968、 2386806、 2337719	#、% または ; 付きの URL は機能しません。 これらの文字が入った URL は問題の原因になります。	URL 名では #、% または ; を使用しないでください。
2355830	WebDAV ロックは Dreamweaver 4 では機能しません。 WebDAV を介して Dreamweaver 4 から Oracle Files 上のコンテンツにアクセスすると、正しく機能しません。第 1 の問題は、Dreamweaver 4 でサーバーから返される正しい XML をサポートしていないことです。そのため、Dreamweaver 4 ではサーバーで保存されている正しいコンテンツがユーザーに正しく表示されません。この問題が原因で、Dreamweaver 4 によるドキュメントの暗黙的ロックがサポートされません。	Macromedia 社から Dreamweaver 4 用のパッチをダウンロードすると、暗黙的ロックの問題以外は解決されます。ロックの問題は未解決のままです。 ただし、Dreamweaver MX を使用している場合は、次に示す Macromedia 社の Web サイトから Dreamweaver MX v6.1 Updater をダウンロードすると、この問題は解決します。 http://www.macromedia.com/support/dreamweaver/downloads_updaters.html
2955251	WebDAV cookie-less クライアントでは Oracle Files に接続できません。 複数の Oracle Files Middle-Tier に、ロード・バランス要求に対する Cookie に依存するロード・バランサが介している場合、Cookie を格納しない WebDAV クライアントでは、ロード・バランサを介してその Oracle Files インスタンスにアクセスすることはできません。	ロード・バランシングに Cookie ではなく IP アドレスを使用するように、ロード・バランサを構成します。

表 5-5 HTTP/WebDAV のバグ (続き)

バグ番号	説明	処置
2614217	<p>Netscape を介してドキュメントをアップロードすると、Oracle SSO 警告エラーが返されます。</p> <p>Oracle Collaboration Suite Middle-Tier は、構成時に Oracle HTTP Server ポートを使用して Single Sign-On Server に登録します。Oracle9iAS Web Cache を構成する場合、HTTP サーバー・ポートを登録するのは誤りです。</p>	<p>mod_osso を正しく機能させるには、この Middle-Tier の Single Sign-On 登録を手動で修正する必要があります。</p> <p>関連資料： ホスト名およびポートでの変更が Oracle9iAS にどのような影響を与えるか、特に mod_osso および Oracle9iAS Single Sign-On Server に与える影響の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p>
2697262	<p>WebDAV でドラッグアンドドロップ・ダウンロードを行うと、ファイルが 0 バイトになることがあります。</p> <p>Oracle Files 上の Web フォルダからローカル PC のファイル・システムにドラッグしたファイルが、Oracle Files 上の別のユーザーによってロックされている場合、0 バイトになる可能性があります。この問題の原因は、MSDAIPP.DLL バージョン 8.103.2402 にあると思われます。</p>	<p>Internet Explorer を最新の Service Pack にアップグレードします。</p> <p>クライアント環境が、「クライアントの認証」の「WebDAV: Web フォルダ」に記載されたサポートされる構成に準拠していることを確認してください。</p>
3006494	<p>異なるユーザー資格証明を使用する Web フォルダ・マッピングを、同じクライアント・コンピュータに複数作成することはできません。</p> <p>Web フォルダの制限により、Oracle Files は同じ Windows クライアントの異なるユーザーとしての Web フォルダへのログインをサポートしていません。Web フォルダではユーザー資格証明がキャッシュされます。そのため、まず user1 として Web フォルダ・マッピングを作成し、user1 の接続が切断された後に user2 として 2 番目のマッピングを作成すると、user2 は user1 の内容にアクセスできてしまいます。</p>	<p>同じクライアント・コンピュータの異なるユーザー・アカウントを使用する Web フォルダ・マッピングは作成しないでください。</p> <p>または、Windows クライアントを再起動します。</p>

表 5-6 NFS のバグ

バグ番号	説明	処置
1749601	Oracle Files の NFS で chgrp を実行できません。 chgrp はファイルのモードには何の影響もありません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
1749621	Oracle Files の NFS で chmod を実行できません。 chmod はファイルのモードには何の影響もありません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
1750049	モード属性を設定できません。 Oracle Files の NFS を介して、許可モード・ビットを変更できません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
1749778	Oracle Files の NFS を使用して、リンクを作成できません。 Oracle Files の NFS ではリンク（シンボリック、ソフトまたはハード）を作成できません。	ありません。セキュリティ・モデルが異なり、これには影響がありません。
2333774	非標準の ASCII 文字が名前の最初の文字になっているファイルやフォルダをコピーできません。 最初の文字が非標準の ASCII 文字になっているフォルダとファイルは、NFS Maestro を使用してコピーできません。	他の NFS クライアントを使用してください。この問題は Maestro の制限であると思われます。

表 5-7 AFP のバグ

バグ番号	説明	処置
1990453	<p>Oracle Files (AFP ボリュームとしてマウント) でファイルの暗号化に Mac OS Finder を使用すると、ファイル暗号化が失敗します。</p> <p>Mac OS で「ファイル」→「Encrypt」ユーティリティを選択すると、名前に*を含む一時ファイルが作成されます。ただし、Oracle Files では、アスタリスクを含むファイル名は受け入れられません。</p>	Mac からファイルの暗号化を行わないでください。かわりに、ファイルを Mac 上でローカルに暗号化してから、そのファイルを AFP により Oracle Files にコピーしてください。
2380571	<p>Mac ファイルのサイズは、リソース・フォークのサイズを考慮に入れていません。</p> <p>リソース・フォークはサイズ計算には含まれないため、ドキュメントのサイズが正確でない可能性があります。</p>	ありません。
2994830	<p>Oracle Files の Web インタフェースでファイルを非バージョンにすると、ファイルが消えてしまうことがあります。</p> <p>Oracle Files アプリケーション内のドキュメントは、Web インタフェースを使用してバージョンングできます。Macintosh ユーザーが AFP を使用してログインし、バージョンングされたファイルを含むフォルダを表示した場合、ファイルは見えますが、読取り専用です。ユーザーが Web インタフェースにログインし、このファイルを変更して、ファイルがバージョンングされていないものになると（保存されている全バージョンの削除による）、AFP ユーザーによって表示されるファイルは、Macintosh クライアントのフォルダ・リストから消えることがあります。</p>	<p>この問題を回避するには、Macintosh ユーザーがいったんログアウトし、再度 AFP にログインします。</p> <p>これによりフォルダのリストがリフレッシュされます。</p>
2719007	<p>デフォルトのプロトコル・キャラクタ・セット・ロジックが、グローバルに適用されます。</p> <p>AFP サーバー・プロトコル（または、コマンド）・エンコーディングは、そのサーバーにグローバルに適用される定数値です。AFP サーバーに接続するどのユーザー・セッションでも同じエンコーディングが使用され、ユーザーごとまたはセッションごとにこのエンコーディングを無効にする方法はありません。異なるエンコーディングを持つ AFP サーバーに接続する必要がある AFP クライアント（Macintosh クライアント）がある場合は、AFP サーバーのエンコーディングを適宜変更しないかぎり、クライアントは接続できません。</p>	異なるエンコーディングを持つ複数のクライアントと一緒に AFP サーバーを使用できるようにするには、複数の AFP サーバーを実行します。これには、複数の中間層マシンを使用し、各マシンで希望するエンコーディングの AFP サーバーを実行します。AFP サーバーのエンコーディングは、プロパティ <code>IFS.SERVER.PROTOCOL.AFP.Encoding</code> で指定します。

表 5-7 AFP のバグ (続き)

バグ番号	説明	処置
2994813	<p>AllPublic/Users/... でドキュメントを開くこと、またはアップロードすることができません。</p> <p>Oracle Files アプリケーション用の AFP サーバーでは、Macintosh クライアントをユーザーのホーム・ディレクトリまたは AllPublic ディレクトリに、ネットワーク・ボリュームとしてマウントできます。AllPublic ボリュームには、AllPublic ボリューム内の「ユーザー」フォルダの下のファイルを確実に開くことができず、新規ファイルを「ユーザー」フォルダにアップロードできないという制限があります。ただし、ファイルやフォルダはリストに表示され、ファイルをローカル・ディスクにコピーすることはできます。</p>	<p>ファイルを開くには、まずファイルをローカル・ディスクにコピーしてから開きます。ファイルをアップロードするには、AllPublic ボリュームではなく、ユーザーのホーム・ディレクトリのマウント・ポイント (ボリューム) を使用します。</p>
2995643	<p>長い名前を持つ Microsoft PowerPoint ファイルは、直接保存できません。</p> <p>31 文字を超える長い名前の PowerPoint ファイルは、AFP を使用して保存しようとすると、名前が短縮された形で表示されます。たとえば、次のようになります。</p> <p>long_long_long_long_lo?5A0B.ppt</p> <p>ユーザーは、PowerPoint ファイルを開き、他のファイルと同様に、ローカル・ハード・ディスクにコピーできます。ただし、PowerPoint でファイルを開くと、ユーザーがファイルを変更し、「保存」コマンドを発行した場合、「Error accessing file filename」というエラーが表示されます。変更は保存されず、開かれた元のファイルは削除されます (「ゴミ箱」に移動され、PowerPoint Temp 0 のような名前に変更されます)。</p>	<p>変更を保存し、ファイルを保持するには、メニューまたはツールバーから選択するか、ファイルを閉じるときに表示されるダイアログ・ボックスで「はい」をクリックして、「新規保存」コマンドを発行します。保存したファイルに異なる名前を選択します。このようにすると、新規ファイルは正しく保存されます。</p>
2463376	<p>ファインダによるフォルダのリストのリフレッシュが行われません。</p> <p>ファイルを追加、削除または変更することで、フォルダの中身が更新された場合、AFP ファインダでは、そのフォルダのリストをリフレッシュしません。</p>	<p>この問題を回避するには、いったんログアウトしてから、再度ログインします。</p>

表 5-8 NTFS のバグ

バグ番号	説明	処置
1289569	<p>ユーザーが削除できないファイルに対して削除が機能しているように見えます。</p> <p>ユーザーに削除する権限がないドキュメントを削除しようとする、または受信ボックス・フォルダなどの削除できない特定のオブジェクトを削除しようとする、エラー・メッセージが表示されません。</p>	<p>エラー・メッセージは表示されませんが、ドキュメントまたはフォルダは削除されません。Windows のエクスプローラで「最新の情報に更新」を選択すると、表示が更新され該当のドキュメントまたはフォルダが再表示されます。</p>
1113581	<p>NTFS でバージョンングされたファイルの削除または名前変更ができません。</p> <p>NTFS でバージョンングされたファイルを削除または名前を変更しようとする、そのファイルのすべてまたは一部がロックされている可能性があることを示すエラー・メッセージが表示されます。Microsoft Word および Microsoft Excel などの一部のアプリケーションでは、旧バージョンのドキュメントを削除することで作業を保存します。これによりデータ属性が失われ、Oracle Files のバージョンング機能が損なわれるため、Oracle Files NTFS サーバーではバージョンングされたファイルの削除または名前変更ができません。</p>	<p>ファイルを削除するには、Web インタフェースを使用します。</p>
1412048	<p>Service Pack 6 が適用された Windows NT では、一部の .txt ドキュメントをワードパッドで変更および保存できません。</p> <p>Service Pack 6 が適用された Windows NT 4.0 では、読取り専用の属性を持つドキュメントをワードパッドで編集すると、「名前を付けて保存」ダイアログ・ボックスを使用して別の名前でドキュメントを保存することができません。ドキュメントを別の名前で保存しようとする、別のアプリケーションで使用されているため、ドキュメントにアクセスできないというエラーが表示されません。</p>	<p>ドキュメントをワードパッドで編集する前に読取り専用の属性を削除するか、メモ帳などの他のエディタを使用します。</p>

表 5-8 NTFS のバグ (続き)

バグ番号	説明	処置
1846693	<p>ターミナル・サービスのクライアント・セッションから NTFS プロトコル・サーバーを起動できません。</p> <p>ターミナル・サービスのセッションから NTFS プロトコル・サーバーを起動しようとする、次のエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>OracleIfsd ドライバの起動に失敗しました。 If an Oracle iFS installation has just been completed then a system restart may be needed to complete the installation of the OracleIfsd driver.</p> <p>NTFS プロトコル・サーバーは、Windows のターミナル・サービスのクライアント・セッション内から起動できません。</p>	<p>ターミナル・サービスのクライアント・セッションからではなく、Windows のサーバー・コンソールから Oracle Files を起動します。Windows のターミナル・サービスのクライアント・セッションは、ターミナル・セッションが開始されたときにすでに定義されているデバイスにのみアクセスできます。</p>
1937209	<p>Outlook 2000 から Oracle Files にマップされたドライブにメールをドラッグできません。</p> <p>ドラッグ・アンド・ドロップを使用して Outlook 2000 から Oracle Files にマップされたドライブにメールを移動すると、この場所にはファイルをドロップできないというエラー・メッセージが表示され、マップされたドライブにサイズが 0 のファイルが作成されます。このエラーは Windows NT で Outlook 2000 を使用したときに発生します。Windows 2000 または Outlook Express を使用しているときにエラーは発生しません。</p>	<p>Outlook からローカルのハード・ドライブにメールをドラッグ・アンド・ドロップした後、ローカルのハード・ドライブから Oracle Files にマップされたドライブにファイルを移動します。</p>

表 5-9 Oracle FileSync のバグ

バグ番号	説明	処置
2374879	<p>名前にパーセント (%) 文字があるサーバー側のフォルダは、同期しません。</p> <p>名前に % の文字が入っているフォルダおよびファイルは、同期プロセス時に同期しません。</p>	<p>Oracle FileSync を使用してファイル同期を行う場合は、フォルダ名に % を使用しないでください。</p>
3037418	<p>Oracle FileSync のインストール言語のリストからアラビア語が選択できません。</p> <p>Oracle FileSync は、アラビア語のマシンにインストールでき、アラビア語で機能します。ただし、インストール・プロセスはアラビア語では表示されません。</p>	<p>他の言語で Oracle FileSync をインストールした後、ロケールをアラビア語に切り替えます。</p>

Oracle Ultra Search

この章では、Oracle Ultra Search 関連の問題について説明します。

この章の構成は次のとおりです。

- [Ultra Search の新機能](#)
- [Ultra Search の「ようこそ」ページ](#)
- [デフォルトの Ultra Search インスタンス](#)
- [ドキュメント検索オプションの制限](#)
- [Complete Sample Query Application の翻訳](#)
- [動的ページ索引付けの制御](#)
- [Cookie のサポート](#)
- [クローラ・キャッシュ削除の制御](#)
- [INSO フィルタ使用環境の設定](#)
- [既知のバグ](#)

Ultra Search の新機能

Oracle Ultra Search は、Oracle Collaboration Suite に付属する高水準の検索コンポーネントです。Oracle Ultra Search を使用すると、他の Oracle Collaboration Suite コンポーネント、企業の Web サーバー、データベース、メール・サーバー、ファイル・サーバーおよび Oracle9iAS Portal インスタンス全体を検索できます。ユーザーが提供する情報を使用して、企業内の情報の様々な異なるリポジトリ内をクロールし、ユーザーが指定した検索条件に一致するドキュメントを検索します。Oracle Ultra Search は、150 を超える固有のドキュメント・タイプを検索します。

このリリースの Ultra Search には、次の機能があります。

- 日付範囲や LOV などの新しい属性タイプをサポート
- 改善された問合せ API と、JSP タグの新規サポート
- ポータル・インスタンスの固有クロール機能である Oracle9iAS Portal との統合
- Ultra Search クローラをデータ・ソースの索引付けおよび検索に適応させる Java API、クローラ拡張 API
- 検索結果のランク付けを調整する検索オプション
- Web 画面にデータベース・クロールの結果を表示する表示 URL サポート

関連資料：『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』

Ultra Search の「ようこそ」ページ

Ultra Search の「ようこそ」ページは、次の場所に変わりました。

`http://host:port/ultrasearch/welcome/`

`host` は、Middle-Tier のインストールに使用されるホストです。

デフォルトの Ultra Search インスタンス

Ultra Search インストーラにより、デフォルトの Ultra Search テスト・ユーザーに基づき、インストール後すぐに利用可能なデフォルト Ultra Search インスタンスが作成されます。このため、ユーザーはインストール後にデフォルト・インスタンスに基づいて Ultra Search の機能をテストできます。

デフォルト・インスタンス名は `WK_INST` です。これはデータベース・ユーザー `WK_TEST` に基づいて作成されます。デフォルトのユーザー・パスワードは `WK_TEST` です。セキュリティ上、`WK_TEST` はインストール後にロックされます。

管理者は `DBA` ロールとしてデータベースにログインし、`WK_TEST` ユーザー・アカウントのロックを解除し、パスワードを `WK_TEST` に設定する必要があります（パスワードはインストール後に失効します）。

パスワードを `WK_TEST` 以外のものに変更した場合は、データベースでパスワードを変更した後、管理ツールの「インスタンスの編集」ページを使用して、キャッシュされたスキーマ・パスワードも更新する必要があります。

デフォルト・インスタンスは、Ultra Search のサンプルの問合せアプリケーションでも使用されます。`data-sources.xml` ファイルを必ず更新してください。

ドキュメント検索オプションの制限

検索結果を無効にし、ドキュメントの検索オプションにより、問合せ結果リストでドキュメントをランク付けする順序に影響を与えることができます。これにより、重要なドキュメントをより高いスコアにし、それらを見つけやすくできます。

検索オプションには、次の制限があります。

- ユーザーの問合せと検索オプションによる問合せの比較では、正確な文字列一致が使用されます。つまり、比較は大 / 小文字を区別し、スペースの有無を認識します。したがって、「Ultra Search」に対して高いスコアの付いたドキュメントは、ユーザーが「ultrasearch」と入力してもスコアは高くなりません。
- 検索オプションでは、問合せアプリケーションが、Query API `getResult()` メソッド・コールで検索用語を渡す必要があります。サンプル・アプリケーションは、基本の検索用語を追加用語として渡すように設計されています。検索属性に基づく拡張検索条件は無視されます。

Complete Sample Query Application の翻訳

Ultra Search Complete Sample Query Application は、Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) でサポートされているのと同じ言語に翻訳されています。

関連資料： 言語の一覧は、『Oracle Collaboration Suite インストレーション および構成ガイド for Windows』を参照してください。

動的ページ索引付けの制御

Web データ・ソースの場合、動的ページに索引を付けるか、付けないかを指定する新しいオプションがあります。デフォルト値は「はい」で、動的 URL がクロールされ、索引が付けられます。

このオプションですでにクロールされたデータ・ソースの場合、「動的ページの索引付け」を「いいえ」に設定し、データを再クロールすると、すべての動的 URL が索引から削除されます。

一部の動的ページは、同じページに対して複数の検索ヒットとして表示され、それらすべてに索引を付ける必要のない場合があります。また、それぞれが異なり、索引を付ける必要のある動的ページもあります。これら 2 種類の動的ページを区別する必要があります。一般に、コンテンツに影響を及ぼさずにメニューの展開のみが変わるページには、索引は不要です。次の 3 つの URL について考えてみます。

http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html

[http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html?
nsdnv=14z1](http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html?nsdnv=14z1)

[http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html?
nsdnv=14](http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html?nsdnv=14)

URL 内の疑問符 (?) は、残りの文字列が入力パラメータであることを示しています。重複するヒットは、基本的にサイド・メニューの展開が異なる同じページです。同じ問合せにはヒットが 1 件のみというのが理想的です。

http://itweb.oraclecorp.com/aboutit/network/npe/standards/naming_convention.html

動的ページ制御は、データ・ソース全体に適用されます。したがって、ある Web サイトに両方の種類の動的ページがある場合、索引付けを制御するために、これらの動的ページを 2 つのデータ・ソースとして別々に定義する必要があります。

Cookie のサポート

データ・ソースの認証情報を登録する場合、Ultra Search 管理ツールでは自動的に Cookie のサポートをオンにします。これを無効にして、Cookie のサポートをオフにすることもできます。

クローラ・キャッシュ削除の制御

クローラの実行中、ドキュメントはキャッシュ・ディレクトリに格納されます。事前に設定したサイズに到達するたびに、クローラが停止し、索引付けが始まります。旧リリースでは、キャッシュ・ファイルは、索引付けが終了すると必ず削除されました。新リリースでは、索引付けが終了しても、キャッシュ・ファイルを削除しないことを指定できるようになりました。このオプションは、すべてのデータ・ソースに適用されます。デフォルトでは、索引付け後にキャッシュ・ファイルを削除します。

INSO フィルタ使用環境の設定

Ultra Search クローラでは、Oracle Text INSO フィルタ `ctxhx` を使用します。そのためには、共有ライブラリ・パス環境変数に `%ORACLE_HOME%\bin` パスが含まれていることが必要です。含まれていない場合、バイナリ・ドキュメントのフィルタ処理が失敗します。

インストール時に、Oracle Universal Installer により `%ORACLE_HOME%\bin` が含まれるように変数が自動的に設定されます。ただし、インストール後にデータベースを再起動した場合、Oracle プロセスを開始する前に、共有ライブラリ・パス環境変数が `%ORACLE_HOME%\bin` を含むよう手動で設定する必要があります。フィルタ処理が機能するように新規の値を選択するために、データベースを再起動します。

たとえば、UNIX では、環境変数 `$LD_LIBRARY_PATH` を `$ORACLE_HOME/ctx/lib` が含まれるように、Windows では、環境変数 `%PATH%` を `%ORACLE_HOME%\bin` が含まれるように設定します。

既知のバグ

表 6-1 既知のバグ	
バグ番号	説明
2881313	<p>Ultra Search ポートレットの登録時に Web プロバイダ・エラーが発生します。</p> <p>回避策：</p> <p>環境変数 %ORACLE_HOME% を使用せずに、ディレクトリのフルパスが指定されるように、次の部分を更新します。</p> <p>%ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_Portal\applications\jpd\jpd\WEB-INF\services.xml</p> <p>option key=FileProviderGroupMgr.dir の値を変更します。</p> <p>パッチ 3012911 を取得するには、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。</p>

Oracle Voicemail & Fax

この章では、Oracle Voicemail & Fax 関連の問題について説明します。

この章の構成は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [既知のバグ](#)

このリリースの新機能

オラクル社では、通信および共同作業の効率と生産性を向上させる機能により、Oracle Voicemail & Fax の機能強化を続けています。Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) では、Oracle Voicemail & Fax に次の機能が追加されました。

- 電話によるディレクトリ・アクセス

リリース 2 (9.0.4) のボイスメール・アプリケーションには、電話番号を知らなくても、ユーザー宛にメッセージを送信できる機能があります。Oracle 特有のこのディレクトリにより、コール元は、1 つのサイトのユーザーまたはグローバル・ボイスメール・ユーザーの全員を検索し、メッセージを送信できます。

- 再録され、簡素化されたメニュー・プロンプト

リリース 2 (9.0.4) では、メニューを完全に再録し、新しいボイスメール・メッセージへの迅速なアクセスと、電話メニュー全体での容易なナビゲートを実現するために簡素化されています。

- Outlook からのボイスメール作業環境へのアクセス

統合のコンセプトの基、Oracle Voicemail & Fax の作業環境は、Oracle Connector for Outlook に統合され、ユーザーはパスワードの変更、応答メッセージのアクティブ化、言語の選択を、標準の作業環境を離れることなく実行できます。

- サポートされる言語

- アラビア語
- 中国語（簡体字）
- 中国語（繁体字）
- デンマーク語
- オランダ語
- 米語
- 英語
- フィンランド語
- フランス語
- ドイツ語
- ギリシャ語
- イタリア語
- 日本語
- 韓国語

- ノルウェー語
- ポルトガル語
- ポルトガル語（ブラジル）
- スペイン語
- スウェーデン語
- トルコ語

既知のバグ

この項では、Oracle Voicemail & Fax の既知のバグについて説明します。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ

バグ番号	説明
3220773	<p>サイレント・インストール中に findmailstore.bat ファイルが正しく実行されません。</p> <p>回避策：</p> <ol style="list-style-type: none">1. ias_core_top.rsp ファイルの変数が正しい値であることを確認します。2. 次のコマンドを実行します。 setup.exe -silent -responseFile ias_core_top.rsp3. 次のディレクトリに移動します。 %ORACLE_HOME%\um\scripts4. findmailstore.bat ファイルを実行します。5. システムを再起動します。6. 構成を続行します。
3120384	<p>ポルトガル語（ブラジル）の prompts.xml ファイルが誤ったディレクトリを参照します。</p> <p>回避策：</p> <ol style="list-style-type: none">1. Oracle Voicemail & Fax がインストールされた CT サーバーで、 %ORACLE_HOME%\um\voice-files\oracle\prompts-pt-BR ディレクトリの名前を %ORACLE_HOME%\um\voice-files\oracle\prompts-bp に変更します。2. %ORACLE_HOME%\um\scripts\install_prompts.bat スクリプトを実行します。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
3239422	<p>Oracle Voicemail & Fax の作業環境設定ページが機能しません。</p> <p>回避策：</p> <ol style="list-style-type: none">1. Oracle Voicemail & Fax の作業環境クライアントが実行されている中間層で、zh-CN および zh-TW を %ORACLE_HOME%\j2ee\OC4J_UM\config\oc4j.properties ファイルの zh_CN および zh_TW に変更します。2. opmn を再起動します。
3301304	<p>AQMWI プロセスは、Oracle Internet Directory から削除されると、MWIService インスタンス・キャッシュの検索を停止します。</p> <p>回避策：</p> <ol style="list-style-type: none">1. orclumactive 属性がすべての MWIService プロセス・オブジェクトについて false に設定されていることを確認します。2. AQMWI プロセスを起動します。

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ (続き)

バグ番号	説明
3268883	<p>rmid プロセスおよび rmiregistry プロセスは、ユーザーがログアウトすると失敗します。</p> <p>回避策:</p> <p>Oracle Voicemail & Fax がインストールされた CT サーバーで、次の手順を実行します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」をクリックします。 2. regedit と入力します。 3. 「OK」をクリックします。 4. 次の場所まで移動します。 HKEY_LOCAL_MACHINE\System\CurrentControlSet\Services\rmid\Parameters 5. 右側のペインで、AppParameters のエントリをダブルクリックします。 6. AppParameters の値のデータに -J-Xrs を付加します。たとえば、AppParameter が -J-Djava.security.policy=D:\oracle\ora90\um\config\pms.policy -C-DORACLE_HOME=d:\oracle\ora90 であった場合、-J-Xrs -J-Djava.security.policy=D:\oracle\ora90\um\config\pms.policy -C-DORACLE_HOME=d:\oracle\ora90 に変更します。 7. HKEY_LOCAL_MACHINE\System\CurrentControlSet\Services\rmiregistry\Parameters に移動します 8. 右側のペインで右クリックします。 9. 「新規」→「文字列値」をクリックします。 10. 新しい文字列値の名前として、AppParameters と入力します。 11. 「AppParameters」をダブルクリックします。 12. 値のデータとして、-J-Xrs と入力します。 13. UMMWI_ で始まるすべてのサービス、UMProcessMgrService、rmid サービスまたは rmiregistry サービスを順に停止します。 14. %ORACLE_HOME%\um\log\log ディレクトリを削除します。 15. 停止したサービスを、停止したときとは逆の順序で起動します。
3230496	<p>TCP ソケットが突然壊れた場合、Oracle Container サブシステムをリカバリする必要があります。</p> <p>回避策: sc_vsto.cfg ファイルの接続文字列の DESCRIPTION= の直後に (ENABLE=BROKEN) を追加します。</p>

表 7-1 Oracle Voicemail & Fax の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明
3131415	「Mail store selection」 ページおよび「End of installation」 ページが翻訳されていません。
3061500	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) へのアップグレード時に、Oracle Voicemail & Fax 用の Oracle Enterprise Manager ターゲット設定が正しくアップグレードされません。
3070115	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) へのアップグレード時に、Oracle Voicemail & Fax 用の Oracle Enterprise Manager ターゲット設定が正しくアップグレードされません。
3070186	録音用アプリケーションが起動すると内部エラーが発生します。
2811286	ユーザーが許容される最小または最大桁数の範囲外のパスワードを入力すると、エラーがアナウンスされます。
2805349	休日応答メッセージ・リマインダが再生されません。
2580875	MWI リクエストが適切に処理されないことがあります。
2209971	Windows ベースの Oracle Voicemail & Fax プロセスの停止後も、その Windows サービスが実行中の報告を続けることがあります。
2178806	MWI サービスが、アクティブ化デーモンにより再起動されたときに、例外をスローすることがあります。
1682964	一部のエラー・メッセージでは、ユーザーが割り込めないことがあります。
2947219	CTMedia 2.1 から NetMerge 3.0 へのアップグレードはサポートされません。NetMerge 3.0 と Oracle Voicemail & Fax を新たにインストールする必要があります。

注意： サイレント・インストールには、%CD_HOME%\Disk1\install\win32\ias_core_top.rsp ファイルと %ORACLE_HOME%\um\vmailcdcore\vmailcd_core.rsp ファイルを使用します。

Oracle Web Conferencing

この章では、Oracle Web Conferencing 関連の問題について説明します。この章の構成は次のとおりです。

- このリリースの新機能
- インストールおよび構成の問題
- ユーザー管理の問題
- 既知のバグ
- ドキュメントの訂正

このリリースの新機能

リリース 2 (2.0.4.2) では、次の機能が追加されました。

- 会議の更新および削除機能が、ログイン後の「ホーム」タブからアクセスできるようになりました。
- 統合サービスへのリンクが、クイックリンク・ビンに表示されるようになりました。
- 新しいマテリアライズド・ビューが組み込まれたことにより、使用頻度サマリーの表示のパフォーマンスが向上しました。
- 表示ドライバのチェックなど、新規ユーザーのフローにチェックがさらに追加されました。

インストールおよび構成の問題

Oracle Web Conferencing のインストールは、妥当性チェックができず、そのためインストール時に防ぐことができない不正な入力の原因で失敗する可能性があります。インストールは、様々な理由から、構成段階で失敗する可能性があります。この項では、これらの失敗の一部についてそのリカバリ方法と、手動による Oracle Web Conferencing の構成方法について説明します。

Oracle Web Conferencing のインストールでは、ユーザーのコンピュータから Web Conferencing にアクセスしようとするすべてのトラフィックが、すべてのポートで Web Conferencing ホスト・マシンに自由にアクセスできることを前提としています。大半の企業にとって、これは Web Conferencing サーバー・マシンが内部ファイアウォールを介さずにイントラネットに接続された状態を意味します。自社のインストール形態がこのタイプに当てはまらない場合は、インストール後構成をさらに実行しないと、インストールが終了しただけでは Web Conferencing にアクセスできない可能性があります。

関連資料： その他の各種状況に応じて Oracle Web Conferencing を構成する方法の詳細は、『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』を参照してください。

電子メールによる会議への招待や『Oracle Collaboration Suite インストレーションおよび構成ガイド for Windows』に列挙されたその他の基本機能を有効化するために必要な、最も一般的な構成用のインストール後手順に従います。

インストール開始前の状態での再インストールと削除

Oracle Web Conferencing の再インストールと削除は、このリリースではサポートされていません。ほとんどの場合、インストール環境をインストール開始前の状態に戻してから、インストールを全面的に開始する必要があります。これにより、不要なものが取り除かれた状態で新しいインストールが行われます。

この項では、Oracle Collaboration Suite インストールのクリーンアップの方法については説明しません。しかし、Real-Time Collaboration リポジトリの削除が必要になる場合があります。これには、データベースから RTC 表領域も含めすべての Real-Time Collaboration オブジェクトを削除する必要があります。

データベースからの RTC リポジトリの削除

関連資料： 特定のデータベースに対するこれらのうちのいくつかのコマンドの実行については、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。

1. データベースに SYSTEM ユーザーまたは同様の権限を持つユーザーとしてログインします。
2. RTC ユーザーおよび RTC_APP ユーザーによるデータベースへのアクセスを許可しないようにシステムを変更し、これらのユーザーが新規セッションを開始できないようにします。
3. RTC ユーザーおよび RTC_APP ユーザーによるすべてのセッションを中断します。
4. RTC_APP、次に RTC を削除します。
 - ユーザー RTC および RTC_APP を、これらのユーザーが所有するすべてのデータベース・オブジェクトも含めて削除します。
 - 表領域 RTC_DATA、RTC_INDEX、RTC_BIG_DATA および RTC_LARGE_DATA と、これらの表領域に使用されたデータ・ファイルを削除します。RTC リポジトリがどのように作成されたかによって、データベースに RTC_BIG_DATA または RTC_LARGE_DATA があります。両方ある場合は、両方とも削除します。

手動リカバリまたは再インストール

Oracle Web Conferencing では、Oracle9i リリース 2 (9.2) 以上のデータベースに常駐する Oracle Real-Time Collaboration (RTC) リポジトリを使用する必要があります。このデータベースは、カスタマ・データベースの場合も、RTC リポジトリが Information Store のインストール時にすでにシードされている Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4.1.0) の Information Store データベースの場合もあります。次の場合、RTC リポジトリを作業環境で使用可能にするには、それぞれ少し異なる手順が必要です。

- カスタマ・データベースに対するインストールの失敗： リポジトリを作成する前にインストールが失敗した場合、install_schema.sh スクリプトを手動で編集して、

RTC リポジトリのために接続するデータベースの、Oracle ホームと SID の正しい値を代入する必要があります。

次のようなコマンドを発行します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\install\db\install_schema.cmd connect_string_for_
database password_for_user_SYSTEM rtc rtc_password_of_your_choice rtc_app
rtc_app_password_of_your_choice RTC_DATA RTC_LARGE_DATA RTC_INDEX directory
on_the_database_host_where_the_datafiles_for_tablespaces_will_be_created
(typically the oradata\instance_name subdirectory in the Oracle home on the
database host)
```

例：

```
%private%\i902\midm72\imeeting\install\db\install_schema.cmd

(description=(address=(host=crmdev07.us.oracle.com) (protocol=tcp) (port=1521))
(connect_data=(sid=ia902dbd))) manager rtc rtc rtc_app rtc_app
RTC_DATA RTC_LARGE_DATA RTC_INDEX %u04\DBs\iA902DBD\oradata
```

- Oracle Collaboration Suite の Information Store に対するインストールの失敗： RTC リポジトリのダイアログに達する前にインストールが中断された場合、ここで使用されるスクリプトを編集して、Oracle ホームなどに適切な値を代入する必要があります。

1. 次のようなコマンドを発行します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\install\db\unlock_schema.cmd connect_string_for_
the_information_store_database SYSTEM_password rtc rtc_app
```

例：

```
%private%\i902\midm71\imeeting\install\db\unlock_schema.cmd

(description=(address=(host=isunaaa17.us.oracle.com) (protocol=tcp)
(port=1521)) (connect_data=(sid=infom7))) manager rtc rtc_app
```

2. さらに、次のようなコマンドを発行します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\install\db\change_passwd_schema.cmd connect_string_
for_information_store_database SYSTEM_password rtc rtc_password_of_your_
choice rtc_app rtc_app_password_of_your_choice
```

例：

```
%private%\i902\midm71\imeeting\install\db\change_schema_passwd.cmd

(description=(address=(host=isunaaa17.us.oracle.com) (protocol=tcp)
(port=1521)) (connect_data=(sid=infom7))) manager rtc rtc rtc_app rtc_
app
```

3. 次の手順を成功させるには、RTC リポジトリを使用できるようにする必要があります。構成段階に達する前にインストールが中断された場合は、ここで使用される imtctl スクリプトを編集して、Oracle ホームなどに適切な値を代入する必要があります。

- %ORACLE_HOME%\imeeting\conf\imtint.conf ファイルを編集し、oracle.imt.instancename に対して有効な値が設定されていることを確認します。有効な値は `ORACLE_HOME name.fully_qualified_host_name_for_the_middle_tier` です。たとえば `orahome1.bigsun1.mycompany.com` です。
- %ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtctl updateDatabaseInfo -dbsid `SID_for_the_RTC_repository_database` -dbhost `host_name_for_RTC_repository_database` -dbport `port_for_the_RTC_repository_database` -dbschema `rtc_app` -dbpassword `rtc_app_password` を起動します。

4. Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスの場合、次のコマンドを発行します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtctl addInstance -installtype midtier
-instanccname oracle_home_name.host_name.domain_name (for example,
midm71.isunaaa18.us.oracle.com) -hostname host_name.domain_name (for
example, isunaaa18.us.oracle.com) -imthome %ORACLE_HOME%\imeeting -mxport
any_available_port_between_1025-49151 (for example, 2400) -webhost
Host_name_used_by_OHS (for example, isunaaa18.us.oracle.com) -webport
Oracle_HTTP_Server_or_Web_Cache_listen_port (for example, 7777. Use the Web
Cache port if Web Cache is enabled.) -websslport Oracle_HTTP_Swerver_or_
Web_Cache_SSL_listen_port (for example, 4443 use the Web Cache port if Web
Cache is enabled) -ldaphost OCS_infrastructure_OID_hostname (for example,
isunaaa17.us.oracle.com) -ldappport OCS_infrastructure_OID_port (for example
4032) -oc4jname OC4J_imeeting -imtpm_httpport any_available_port_between
1025-49151 (for example, 2402) -appname imeeting -em_integrate (true or
false based on whether you want integration with EM Web site or not for
the status display of Oracle Web Conferencing\iMeeting)
```

5. Document Conversion Server および Voice Conversion Server の場合、次のコマンドを発行します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtctl.cmd addInstance -installtype (voice if
voice serverconveter if document conversion server) -instancename oracle_
home_name.host_name.domain_name (for example, ocsm7dv1.st-
avenet-02.us.oracle.com) -hostname host_name.domain_name (for example,
st-avenet-02.us.oracle.com) -imthome
```

```
%ORACLE_HOME%\imeeting -orclhome %ORACLE_HOME% -voice_httpport any_
available_port_between_1025-49151 (for example, 2402) -imtpm_httpport any_
available_port_between_1025-49151 (for example, 2403) -appname imeeting
```

Real-Time Collaboration コア・コンポーネント・インスタンスの一部としての OC4J RTC アプリケーションの作成

この処理は、コア・コンポーネント・インスタンス・ホスト上でのみ実行します。必要なファイルおよびスクリプトが正しく作成される前にインストールが中断または失敗した場合、これらのファイルやスクリプトを編集して、Oracle ホームなどに適切な値を代入する必要があります。このスクリプトで使用されるその他のファイルは、スクリプトと同じディレクトリにあります。

環境変数を次のように設定します。

```
ORACLE_HOME=the Oracle Home
LD_LIBRARY_PATH=%ORACLE_HOME%\lib
```

次に、次のようなコマンドを実行します。

```
%ORACLE_HOME%\jdk\bin\java -Xmx512m -Djava.io.tmpdir=%tmp -classpath %ORACLE_HOME%\lib\xmlparserv2.jar:%ORACLE_HOME%\dcm\lib\dcm.jar:%ORACLE_HOME%\jdbc\lib\classes12.jar:%ORACLE_HOME%\lib\dms.jar:%ORACLE_HOME%\j2ee\home\oc4j.jar:%ORACLE_HOME%\j2ee\home\jaznplugin.jar:%ORACLE_HOME%\lib\xschema.jar:%ORACLE_HOME%\opmn\lib\ons.jar:%ORACLE_HOME%\lib\emConfigInstall.jar:%ORACLE_HOME%\dcm\lib\oc4j_deploy_tools.jar-Doracle.ias.sysmgmt.logging.logdir=%ORACLE_HOME%\j2ee\home\logoracle.j2ee.tools.deploy.Oc4jDeploy -oraclehome %ORACLE_HOME% -verbose -inifile %ORACLE_HOME%\imeeting\install\oui\imt.ini -timeout 120 -postdeploysleep 15
```

注意： 前述のコマンドを発行する前に、%ORACLE_HOME%\j2ee\deploy.ini ファイルが存在することを確認します。
%ORACLE_HOME%\j2ee\deploy.ini ファイルは、インストーラによって %ORACLE_HOME%\j2ee\deploy.ini.some_number.bak としてバックアップされている場合があります。そのファイルのコピーを作成し、%ORACLE_HOME%\j2ee\deploy.ini として保存します。

Oracle HTTP Server の構成

次に示す変更は、すべて Web Conferencing の Oracle ホームの `mod_osso.conf` ファイルに対するものです。

注意： `mod_oss.conf` の `OssosIPCheck` は、`off` に設定することをお勧めします。

HTTPS 配置に対するダウンロード機能の有効化

HTTPS を使用した配置の場合、Web Conferencing コンソール、ログ、資料および録音データのダウンロードを可能にするために、`mod_osso.conf` ファイルを編集する必要があります。

Web Conferencing コンソールの場合

```
<Location /imtapp/res>
    OsoSendCacheHeaders off
</Location>
```

ログの場合

```
<Location /imtapp/logs>
    OsoSendCacheHeaders off
    require valid-user
    AuthType Basic
</Location>
```

資料の場合

```
<Location /imtapp/app>
    OsoSendCacheHeaders off
</Location>
```

録音データの場合

```
<Location /imtapp/console>
    OsoSendCacheHeaders off
</Location>
```

Oracle9iAS Web Cache で PNG ファイルのイメージ圧縮をオフに設定

Internet Explorer 5.5 のユーザーは、Web Conferencing Application で表示しているドキュメント、または会議中にドキュメント・プレゼンテーション・モードで表示しているドキュメントから、イメージが欠落していることに気付く場合があります。これを防止するには、Oracle9iAS Web Cache で PNG ファイルのイメージ圧縮をオフにします。

イメージ圧縮をオフにするには、次のようにします。

1. インストールされている Oracle9iAS の Oracle9iAS Web Cache 管理ページにアクセスします。これは、デフォルトで `http://apache_web_host:4000/webcacheadmin` にあります。
2. 管理者としてログインします。デフォルトのユーザー名とパスワードの値は `administrator` です。
3. ログイン後のページの左側に「管理」セクションが表示されます。下にスクロールして「一般構成」セクションを探します。そのセクションの「キャッシュ可能性ルール」の下にある「Compression」をクリックします。
4. PNG イメージの圧縮に関するルールのラジオ・ボタンを選択します。これは、デフォルトのインストールでは、2 番目のルール・セットです。
5. 「Change Selector Association」をクリックします。
6. ポップアップ・ウィンドウで、PNG イメージの圧縮に関するルールをクリックします。
7. 「Remove Association」をクリックします。ポップアップ・ウィンドウが閉じます。
8. メイン・ページで「変更の適用」をクリックします。
9. 「再起動」をクリックします。これで、変更が有効になります。

電子メールで送信される利用状況レポートの構成

『Oracle Web Conferencing 管理者ガイド』の第 5 章では、Oracle Web Conferencing レポートの設定に使用される `imtreport` スクリプトについて説明しています。レポート・オプションを構成するには、レポート・スクリプトの一番上にある変数を編集します。

`imtreport` スクリプトを次のように編集し、利用状況レポートが受信者に電子メールで送信されるように構成します。

- `imtreport` の `export IMT_USE_BI_CLASSES` 行を `export IMT_USE_REPORT_CLASSES` に変更します。この行を変更しないと、`NoClassDefFound` エラーが発生します。
- すべてのサイトに対して `SITE_ID` パラメータを特定のサイト ID または 100 に設定します。このパラメータを空の文字列にすると、「TODAYSDATE が無効な識別子です。」というエラーが発生します。

- カンマ区切りの受信者のリストでは、カンマの後の空白をすべて削除します。削除しないと、受信者リストの最初の人物にのみレポートが電子メールで送信されます。
- `imtjvm` の一番上に `DISPLAY` 変数を設定します。設定しないと、「Problem with constructor javax.swing.plaf.FontUIResource...」というエラーが発生します。

カスタム・データベース使用時のデモのアップロード

Web Conferencing スキーマをカスタム・データベースにインストールする場合、RTC Configuration Assistant である「Create Oracle Real-Time Collaboration Repository」がインストール時に実行されている間に、次の例外が発生します。

Connected.

Connected.

Importing seeded demo conferences

LRM-00116: '()' に続く 'address' で構文エラーが発生しました。

IMP-00022: パラメータ処理に失敗しました。ヘルプを表示するには 'IMP_HELP=Y' を入力してください

IMP-00000: エラーが発生したためインポートを終了します。

この例外は無視しても問題ありません。インストール後、次の手順に従ってデモをアップロードします。

1. Oracle データベースのインポート・ユーティリティ、`%ORACLE_HOME%\bin\imp` が、RTC リポジトリのために使用しているデータベース・ホスト上の Oracle データベースの Oracle ホームで使用できることを確認します。
2. RTC コア・コンポーネントの Oracle ホームからデータベース・ホストに `%ORACLE_HOME%\imeeting\install\db\imtseed.dmp` ファイルを取得します。
3. シェルから次のコマンドをデータベース・ホストに対して発行します。

```
%ORACLE_HOME%={database_oracle_home};export ORACLE_HOME
%PATH=%PATH:%ORACLE_HOME%\bin;export PATH imp
RTC_ACCT_NAME=password_for_schema_rtc@database_connect_string
file=imtseed.dmp ignore=y commit=y buffer=40960000 grants=n indexes=n show=n
touser=%RTC_ACCT_NAME fromuser=rtc
```

ユーザー管理の問題

Oracle Web Conferencing では、ユーザー管理に Oracle Internet Directory を使用します。パフォーマンス上の理由から、Oracle Web Conferencing では、ユーザーの次の属性のローカル・コピーが保持されます。

- ユーザー名： ログイン時にユーザーが入力したもの。この属性は Oracle Internet Directory 管理者によって設定されます。
- ユーザー GUID: Global Unique Identifier。ユーザーには表示されない内部フィールドです。
- 名
- ミドル・ネーム
- 姓
- 電子メール・アドレス

現在、Oracle Internet Directory のユーザー・データと RTC リポジトリとは同期されていません。この項には使用例を列挙しますが、使用例によっては問題が発生することがあります。

Oracle Internet Directory で新規ユーザーが作成される場合

この使用例では、問題は発生しません。ユーザーが Oracle Web Conferencing に初めてログインすると、ユーザー情報が Oracle Internet Directory から問い合わせられ、ローカルの RTC リポジトリに移入されます。

Oracle Internet Directory で既存のユーザー情報が更新される場合

1 つの変更が複数の属性に影響する特定の状況があります。たとえば、ユーザー名が電子メール・アドレスにマップされるように Oracle Internet Directory が構成されている場合、従業員の姓を変更すると電子メール・アドレス、姓およびユーザー名を変更することになります。このような場合、すべての該当する使用例に基づいた修正を適用する必要があります。

ユーザー名が更新される場合

Oracle Web Conferencing のログイン時にエラーが表示されます。Oracle Web Conferencing には古いユーザー名のユーザーの GUID が含まれているため、競合が発生します。

例

古いユーザー名: JANE.DOE@ORACLE.COM

新しいユーザー名: JANE.YOUNG@ORACLE.COM

修正: RTC リポジトリに rtc_app アカウントとして接続する場合、次の SQL 文を実行します。

```
SQL> update rtc_users set user_name = 'JANE.YOUNG@ORACLE.COM'
      where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM';
SQL> commit;
```

名が更新される場合

この場合、大きな問題はありません。その後も Oracle Web Conferencing を使用できます。唯一の問題は、Oracle Web Conferencing でユーザーの名が正しく表示されないことです。

例

古い名: Jane

新しい名: Jane2

修正: RTC リポジトリに rtc_app アカウントとして接続する場合、次の SQL 文を実行します。

```
SQL> update rtc_persons set first_name = 'Jane2'
      where person_id in (select person_id from rtc_users where
      user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM');
SQL> commit;
```

姓が更新される場合

この場合、大きな問題はありません。その後も Oracle Web Conferencing を使用できますが、ユーザーの姓が正しく表示されません。

例

古い姓: Doe

新しい姓: Young

修正: RTC リポジトリに rtc_app アカウントとして接続する場合、次の SQL 文を実行します。

```
SQL> update rtc_persons set last_name = 'Young'
      where person_id in (select person_id from rtc_users where
      user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM');
SQL> commit;
```

電子メール・アドレスが更新される場合

この場合、大きな問題はありません。その後も Oracle Web Conferencing を使用できますが、ユーザーの電子メール・アドレスが正しく表示されず、電子メールによる会議への招待を受信できません。

例

古い電子メール: JANE.DOE@ORACLE.COM

新しい電子メール: JANE.YOUNG@ORACLE.COM

修正: RTC リポジトリに rtc_app アカウントとして接続する場合、次の SQL 文を実行します。

```
SQL> update rtc_persons
      set email_address = 'JANE.YOUNG@ORACLE.COM'
      where person_id in (select person_id from rtc_users where
                          user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM');
SQL> commit;
```

Oracle Internet Directory から既存のユーザーが削除される場合

この場合、潜在的な問題はありません。ユーザーは、Oracle Application Server の Single Sign-On で認証できないため、Oracle Web Conferencing にログインできません。

Oracle Internet Directory で既存のユーザー・アカウントが削除後に再作成される場合

初回にユーザーが Oracle Web Conferencing にログインできなければ、潜在的な問題はありません

初回にユーザーが Oracle Web Conferencing にログインしており、ユーザー・アカウントが削除後に再作成された場合、Oracle Web Conferencing にログインしようするとエラーが発生します。

これは、ユーザー・アカウントが再作成されたときに、新しい GUID が取得されたためです。Oracle Web Conferencing には古い GUID のこのアカウントに関する情報が保持されるため、異なる GUID で Oracle Web Conferencing に再度ログインしようとすると競合が発生します。

修正: RTC リポジトリに rtc_app アカウントとして接続する場合、次の SQL 文を実行します。

```
SQL> delete from rtc_persons
      where person_id in (select person_id from rtc_users where
                          user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM');
SQL> delete from rtc_users
      Where user_name = 'JANE.DOE@ORACLE.COM';
```

```
SQL> commit;
```

既知のバグ

このリリースの Oracle Web Conferencing では、次の問題があることがわかっています。

表 8-1 Oracle Web Conferencing の既知のバグ

バグ番号	説明	回避策
3019653	アラビア語を選択した場合、日付が正しく表示されません。	ありません。
3033626	Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) のインストール時に、Oracle Web Conferencing を構成しないように選択している場合でも、一部の Oracle Web Conferencing (Real-Time Collaboration) Configuration Assistant がインストール中に実行されます。Configuration Assistant により処理するエラーが報告されます。	報告されたエラーを無視します。
3124505	Oracle Enterprise Manager の Middle-Tier サイトに「 Web Conferencing 」と表示されますが、ページは表示されません。これは既知の問題です。	Oracle Enterprise Manager Web サイトを停止し起動すると、この問題は解決します。
3133297	Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) から Oracle Collaboration Suite リリース 2 (9.0.4) へのアップグレード後、Oracle Collaboration Suite のホーム・ページのポートレットから Web 会議を開始できません。	<ol style="list-style-type: none"> 1. %ORACLE_HOME%\imeeting\bin に移動します。 2. .\imtctl を実行します。 3. 次のコマンドを発行します。 <pre>setProperty -pname "ApacheWebPort" -pvalue "port_ number"</pre> Oracle9i Application Server Web Cache を実行している場合、Web Cache のポート番号を使用します。実行していない場合は、Oracle HTTP Server のポート番号を使用します。 4. Oracle Web Conferencing の OC4J を再起動します。
3117475	Site=0 には、認証鍵がありません。	現時点では、回避策はありません。

表 8-1 Oracle Web Conferencing の既知のバグ（続き）

バグ番号	説明	回避策
3095910	韓国語が選択されているときに、Oracle Collaboration Suite の Web 会議のポートレットに英語の文字列がいくつか表示されます。	現時点では、回避策はありません。
3166787	Oracle Web Conferencing のクイック・チュートリアルおよび『Oracle Collaboration Suite Oracle Web Conferencing 利用ガイド』には、個人的な資料のリポジトリは 40MB に制限されることが記載されています。	詳細は、『 Oracle Collaboration Suite Oracle Web Conferencing 利用ガイド 』および Oracle Web Conferencing のクイック・チュートリアル 」を参照してください。
3263919	Oracle Web Conferencing スキーマがカスタム・データベースにインストールされている場合、デモを起動するとエラーが発生します。	詳細は、『 カスタム・データベース使用時のデモのアップロード 』を参照してください。

ドキュメントの訂正

Oracle Web Conferencing のドキュメント・セットには、次のような誤りがあります。

『Oracle Collaboration Suite Oracle Web Conferencing 利用ガイド』および Oracle Web Conferencing のクイック・チュートリアル

これらのドキュメントには、個人的な資料のリポジトリは 40MB に制限されることが記載されています。実際には、現時点では、制限はありません。

Oracle Web Conferencing 管理者ガイド

imtctl スクリプト

スクリプトが次のように記載されています。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin> imtctl < ../scripts/sample.imt
```

これは、正しくは次のとおりです。

```
$ORACLE_HOME/imeeting/bin> imtctl < scripts/sample.imt
```

SSL の構成

この項には、SSL の構成手順が記載されています。その手順に加えて、**Wallet** のパスワードを不明瞭化し、`MxWalletPassword` プロパティを設定する必要があります。

手順：

1. 次のように、Microsoft Windows ユーザーのパスワードを不明瞭化します。

```
%ORACLE_HOME%\Apache\Apache\bin\apobfuscate
```

2. Oracle Web Conferencing システムでプロパティを設定します。

```
%ORACLE_HOME%\imeeting\bin\imtctl setProperty -pname MxWalletPassword  
-pvalue obfuscated_password
```

Oracle9iAS Wireless

この章には、Oracle Wireless & Voice についての重要な情報が含まれています。この章の構成は次のとおりです。

- [このリリースの新機能](#)
- [Oracle Hosted Voice Gateway](#)
- [既知の制限](#)
- [Wireless & Voice の使用](#)
- [ドキュメントの訂正](#)

このリリースの新機能

このリリースの Wireless は多くの新機能や拡張機能を備えています。その一部を次に示します。

任意のモバイル機器からのリアルタイムなブラウザ・アクセス

Oracle Wireless & Voice は、ブラウザ機能を持つ任意のモバイル機器からコラボレーション情報への非常に最適化されたワイヤレス・アクセスを可能にします。モバイル機器のブラウザから従業員が実行できるタスクには、次のようなものがあります。

- 電子メールとボイスメールのアクセス、返信または転送
- 予定の表示、変更、取消し、またはステータス変更
- 企業ディレクトリまたは個人のアドレス帳での検索
- Oracle Files の参照と FAX 送信するファイルの選択

Collaboration Suite のワイヤレス・アプリケーションは、様々な機能を持つモバイル・ブラウザや異なるフォーム・ファクタのデバイス用に非常に最適化されているため、きわめて効果的でユーザーフレンドリな操作性を得ることができます。たとえば、モバイル受信ボックス機能では、緊急のメールのみ、過去 24 時間のメール、ボイスメールのみ、FAX メッセージのみ、選択した送信者からのメールのいずれかを受信する仮想受信ボックスをユーザーが作成できるため、より高速でパーソナライズされたメール・アクセスが実現します。

ユビキタスな音声アクセス

従業員は、電子メールの取出しと返信、予定の管理、電話帳に載っている人への電話などを任意の電話機から音声で行えるようになりました。Collaboration Suite に音声でアクセスするには、電話機から音声ゲートウェイに電話をかけて、音声インタフェースと対話します。Collaboration Suite の音声対応アプリケーションは、音声とプッシュホンの両方のコマンドに応答し、話者に依存しない音声認識機能を持つ任意の Oracle 認定 VoiceXML ゲートウェイで実行されます。

SMS または電子メールからの非同期コマンドによる即時アクセス

このリリースでは、従業員は SMS、双方向ポケットベルまたは任意の電子メール・クライアントから、非同期コマンドを使用して Collaboration Suite にアクセスすることもできます。従業員は、SMS または電子メールを介して単純な非同期コマンドを送信することで、その日の予定を取り込んだり、会議の変更または取消しを行ったり、企業ディレクトリまたは個人のアドレス帳で従業員情報を検索したり、ファイル・カタログを参照して FAX または電子メールで送るファイルを選択したりすることができます。

たとえば、SMS を介して非同期コマンド `cal` を送信してその日のすべての予定を取り込んだり、`search joe harris` を送信して企業ディレクトリで Joe Harris を検索したりすることが可能です。

マルチチャネルでのアラートと通知

Oracle Collaboration Suite では、従業員が特定の電子メールまたはボイスメールを受信したとき、カレンダーで重要なイベントの追加または更新が発生したとき、Web 会議に招待されたとき、あるいは重要なミーティングや Web 会議のアラームとして、その従業員に通知が送信されます。従業員にとってのユニークな利点は、これらの通知を受信するチャネルを SMS、MMS、電子メール、ボイス・アラート、双方向ポケットベルおよび FAX のの中から自由に指定できることです。

所在と連絡先の管理

Oracle Collaboration Suite の連絡先管理機能では、ユーザーが自分のプロフィールを作成して日中の所在とその場所での通知受信方法を定義できるため、ユーザーの管理が可能になります。従業員の連絡先情報は企業ディレクトリを通じて公開されるため、適切な権限を持つすべての人が、特定の従業員に任意のタイミングで連絡するための最善の方法を判断できます。

Oracle Hosted Voice Gateway

Oracle Hosted Voice Gateway を使用すると、Oracle Collaboration Suite Wireless のインストールと構成の終了後、付属の既製アプリケーションや特注のボイス・アプリケーションにボイス・デバイスを介して即座にアクセスできます。

既知の制限

この項では、Oracle9iAS Wireless の既知の制限について説明します。

Wireless の電子メールによるタイムアウト・パラメータの変更

Wireless の電子メール・アプリケーションによりタイムアウト・パラメータが変更されるため、Oracle Collaboration Suite の Unified Messaging の UM バックエンドに接続するための ESMTP メール・プロトコルを使用して接続しようとすると、ログインできません。

この問題を解決するには、次のようにします。

1. Wireless Webtool を起動します。
2. 「コンテンツ・マネージャ」に移動します。
3. 「電子メール」に移動します。
4. 「サービスの入力パラメータ」に移動します。
5. タイムアウトの値を 2000 から 10000 に変更します。
6. OC4J_Wireless を再起動します。

Portal に戻る URL の構成

ユーザーが、最初に Oracle Collaboration Suite Portal のホーム・ページを通らずに、Oracle Wireless & Voice 設定ウィザードに直接アクセスできるようにするには、Oracle Wireless & Voice ウィザードでの設定完了後にユーザーがどこに移動するかを明示的に指定する必要があります。デフォルトでは、Portal からウィザードにアクセスした場合、Portal のホーム・ページに戻されます。Portal からウィザードにアクセスしない場合は、戻り先の URL を `%Oracle_Home%\webclient\classes\oracle\collabsuite\webclient\resources\webclient.properties` ファイルで指定する必要があります。

たとえば、次のようになります。portal=http://my.company.com/homepage
デフォルト値は、次のように設定します。

```
portal=http://portal_host:portal_port/pls/portal/PORTAL.wwsec_app_priv.login
```

Oracle Calendar

Calendar Server

この項は、『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』の有効値に関する情報にかわるものです。Oracle Collaboration Suite モードで、Oracle Collaboration Suite Calendar Server の名前およびポートを入力します。これらのエントリはコロン (:) で区切ります。Calendar Server アクセスのためのポートを指定するには、http://mid-tier:port に移動します。「Ports」タブをクリックします。ポートの表で、Oracle Calendar Server を探します。

Calendar Middle-Tier で次のコマンドを実行しても、Calendar Server のポートを特定できません。

```
%ORACLE_HOME%\ocal\bin\profilget -s ENG -k port
```

音声による新規 Calendar エントリの作成

このリリースでは、ユーザーは音声インタフェースを介して新規の Oracle Calendar エントリを作成することはできません。

停止中と表示される Wireless のステータス

Oracle Enterprise Manager では、Middle-Tier マシンについて管理できるすべてのプロセスが表示されます。Enterprise Manager ページにアクセスして、Middle-Tier マシンをクリックすると、Wireless には赤い下矢印が表示されます。これは、Wireless Server が起動していないためです。自分のブラウザから Wireless Server を起動するには、次の URL を指定します。

```
http://machine_name:port/ptg/rm
```

これにより、Wireless Server が自動的に起動します。

マルチバイト文字とワイヤレス通知

Oracle Email によって受信されたメッセージのワイヤレス通知を受け取ることができます。元のメッセージの件名または送信者の ID のいずれかにマルチバイト文字が含まれている場合、これらのマルチバイト文字は、通知の中で正しく表示されません。

Wireless Webtool と Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダ登録の失敗

同じマシン上に Infrastructure および Middle-Tier の両方がインストールされていて、そのコンピュータで実行されている Enterprise Manager デーモンが Infrastructure ホームを参照する場合、Wireless サイトから「Wireless Webtool のための Oracle Portal プロバイダの登録」と「Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダの登録」を実行すると、`java.lang.NoClassDefFoundError` エラーがスローされます。

Infrastructure のインストールの `orion-web.xml` ファイルでは、`pdkjava.jar` および `ptlshare.jar` は、Middle-Tier のインストール場所を参照します。

たとえば、Infrastructure のインストール場所が

```
%private%ias20_infra%
```

Middle-Tier のインストール場所が

```
%private%ias20_midtier%
```

の場合、Enterprise Manager デーモン `orion-web.xml` の次のエントリ

```
<classpath path="%private%ias20_infra%portal%jlib%pdkjava.jar"%>
<classpath path="%private%ias20_infra%portal%jlib%ptlshare.jar"%>
```

は、次のものに置き換えます。

```
<classpath path="%private%ias20_midtier%portal%jlib%pdkjava.jar"%>
<classpath path="%private%ias20_midtier%portal%jlib%ptlshare.jar"%>
```

opmn プロセスを再起動させて、変更を有効にします。

Microsoft Internet Explorer 使用時に発生する一般的なシングル・サインオン・エラー

Oracle Wireless など、一部の Oracle9iAS コンポーネントに影響を及ぼす一般的なエラーがあります。このエラーは、Microsoft Internet Explorer を使用して、Infrastructure と Middle-Tier の両方がインストールされているマシン上の Web ツールにアクセスすると発生します。次のエラーが発生することもあります。

- Webtool にログイン（ユーザー名およびパスワードを入力し、「ログイン」ボタンをクリック）すると、SSO 警告（エラー）が表示されます。ブラウザの「リフレッシュ」ボタンをクリックして、続行します。
- Oracle Wireless User Manager で、「作成」ボタンをクリックすると、SSO 警告（エラー）が発生します。Microsoft Internet Explorer の「戻る」ボタンをクリックして続行します（「リフレッシュ」ボタンをクリックすると、前述の状況と同じように続行することができません）。

外部リポジトリを持つ複数の ORACLE_HOME では使用できない Oracle Wireless プロセスのステータス

同じマシンに Middle-tier と Infrastructure の両方をインストールし、Enterprise Manager コンソールから Wireless スキーマを、Infrastructure のインストールの一部として使用可能なもの以外のスキーマが指定されるように変更したとき、Wireless プロセス・ステータスの変更は、Enterprise Manager コンソールに表示されません。この問題は、すべてのプラットフォームで発生します。

回避策：

スキーマが変更された Middle-Tier の ORACLE_HOME から、ファイルの次の部分をコピーします。

```
<middle-tier ORACLE_HOME>%config%iaschema.xml
```

これを Infrastructure の ORACLE_HOME ファイルの対応するエントリに貼り付けます（上書き）。

```
<infrastructure ORACLE_HOME>%config%iaschema.xml
<SchemaConfigData>
<ComponentName>Wireless</ComponentName>
  <BaseName>WIRELESS</BaseName>
  <Override>true</Override>
  <SchemaName>the new schema name</SchemaName>
  <DBConnect>the new DB connect string</DBConnect>
    <Password>the new DB password (encrypted)</Password>
</SchemaConfigData>
```

貼付けが終わったら、Enterprise Manager を再起動します。

サポートされない Jabber のマルチバイト・ユーザー名

Instant Messaging とともに使用するバックエンド、Jabber ではマルチバイトのユーザー名がサポートされないため、Instant Messaging モジュールでもマルチバイトのユーザー名がサポートされません。

Wireless & Voice の使用

この項では、Wireless & Voice の使用について説明します。

アクセス情報

ASK/SMS アクセスおよび音声アクセスについてユーザーを支援する、2 つのクイック・リファレンス・カードが用意されています。カードは Oracle Technology Network の次の場所で入手できます。

- ASK/SMS アクセス: <http://otn.oracle.com/products/owireless/>
- 音声アクセス: <http://otn.oracle.com/products/owireless/>

SMS、電子メールまたは双方向ポケットベルから Collaboration Suite にアクセスするための ASK コマンド

Oracle Collaboration Suite コンポーネントにアクセスするためには、次のコマンドが使用できます。

Calendar

予定を表示するコマンド

```
cal [day|week] [<date>]
```

例:

今日の予定をリストするコマンド

```
cal
```

今年の 8 月 21 日の予定をリストするコマンド

```
cal day 8/21
```

2003 年 8 月 21 日の週の予定をリストするコマンド

```
cal week 8/21/2003:
```

予定を作成するコマンド

```
cal new <title> <date> <start-time> <duration> [<location>] [<notes>]
<date> in "MM/dd/yyyy" format - year can be omitted e.g. 6/29
<start-time> in "hh:mm" format - e.g. 1:30pm, 9:20am
<duration> in minutes - e.g. 90
```

例:

```
cal new test 9/24 1:00pm 90 HQ "bring lunch"
```

アドレス帳

find は、電話番号、名前（部分文字列検索）または部署に対する検索を行います。ディレクトリ検索は、個人のアドレス帳で連絡先が見つからない場合にのみ実行されることに注意してください。

個人のアドレス帳または企業ディレクトリで連絡先を見つけるコマンドは、次のようになります。

```
find <string>
```

<string> は、カンマ区切りの名前のリストです（例: John,Jack,Smith）。

- 名または姓のいずれを指定してもかまいません。
- 検索では大文字と小文字は区別されません。
- 各エントリの上にスペースを入れないでください。

例:

```
find John,Jack,Smith
```

メール

次の電子メール用コマンドがサポートされています。

send: ヘルプ・メッセージを返します。

send help: ヘルプ・メッセージを返します。

send <recipients> <documents>|text:<text>: リストにある受信者にドキュメントまたはテキスト・メッセージを送信します。

例:

```
send jacob "text:This is a test message."
send user@oracle.com %private%documents%roadmap30.ppt
```

FAX

次の FAX コマンドがサポートされています。

```
fax /help
fax -help
fax -h
fax recipient_fax_number "text:fax message"
```

例 :

```
fax 16505067222 "text:hello world"
fax recipient_fax_number fileURL[,filePathInFilesOnline]
fax 16505067222 http://www.acme.com
fax 16505067222
http://www.acme.com,/private/john/mydoc/test.html,/private/john/mydoc/FunSpec.html
```

ディレクトリ

企業ディレクトリで連絡先を探すコマンドは次のようになります。

```
search <string>
```

<string> は、名前（名または姓）、拡張子のないグローバル ID、電子メール・アドレスまたは電話番号のカンマ区切りのリストです。

ショート・メッセージ

任意のチャネルで短いメッセージを送信するために使用します。

```
sm <channel> <recipient> <subject> <message>
```

例

```
sm voice 16505551212 Meeting Let's meet at 2:00pm: 音声メッセージとして送信されます。
```

```
sm email john.smith@oracle.com "Simple Subject" This is my message:
電子メールとして送信されます。
```

```
sm sms 5551212 Meeting Let's meet at 2:00pm: SMS メッセージとして送信されます。
```

```
sm fax 16505067000 "Urgent Meeting" This is important: FAX として送信されます。
```

Instant Messaging

サポートされるチャネルは、音声、電子メール、SMS および FAX です。

複数の語を含む件名は引用符で囲む必要があります。

使用方法：

```
im command [param1 param2 param3 ... paramN]
```

例：

```
im send my friend "Hi, how are you doing?"
```

スペースを含むパラメータは二重引用符で囲みます。

使用可能なコマンドは次のとおりです。

- **help:** 使用可能な **im** コマンドのリストを表示します。
- **connect:** ユーザーを **im** サービスに接続します。
- **disconnect:** ユーザーを **im** サービスから切断します。
- **groups:** ユーザーのグループを取得します。
- **addgroup 'name':** ユーザーのグループにグループを追加します。
- **delgroup 'name':** ユーザーのグループから指定したグループを削除します。
- **mvgroup 'oldname' 'newname':** 'oldname' で指定したグループの名前を 'newname' に変更します。
- **online 'name': 'name'** で指定したグループでオンラインの友人のリストを表示します。
- **offline 'name': 'name'** で指定したグループでオフラインの友人のリストを表示します。
- **add 'friend' 'group' [Yahoo|MSN]:** 指定したグループに友人を追加します。リモートの Yahoo や MSN の友人を指定できます。
- **del 'friend' 'group':** 指定したグループから友人を削除します。
- **mv 'friend' 'oldgroup' 'newgroup':** 友人を 'oldgroup' から 'newgroup' に移動します。
- **statuses:** 主なステータス・グループのリストを表示します。
- **statuses 'statusgroup':** 1つのステータス・グループ内のステータスのリストを表示します。
- **status 'statusID':** ユーザーの現行ステータスを指定したステータスに設定します。
- **msgs:** ユーザーに対するサーバー上のすべての未読メッセージを表示します。

- arch: ユーザーに対するサーバー上のすべてのアーカイブ保存メッセージを表示します。
- msg 'msgID': 'msgID' で指定したメッセージを表示します。
- send 'friend' 'text': 指定した 'friend' に指定した 'text' でメッセージを送信します。
- psts: ユーザーのプリセット・メッセージのリストを表示します。
- addpst 'text': ユーザーのプリセット・メッセージにメッセージを追加します。
- delpst 'presetID': ユーザーのプリセット・メッセージから指定したプリセット・メッセージを削除します。
- sendpst 'friend' 'presetID': 指定したプリセット・メッセージで指定した 'friend' にメッセージを送信します。
- account 'username' 'password' [Yahoo|MSN]: ローカル、Yahoo または MSN アカウント情報を更新します。
- autologin on|off: ローカル・アカウントの自動ログイン・オプションをオンまたはオフに設定します。

ファイル

指定したディレクトリのコンテンツを参照するコマンドは次のようになります。

```
files [<directory>]
```

例

```
files /Private
```

空のままの場合、ホーム・ディレクトリを想定します。

ドキュメントの訂正

この項では、ドキュメントの訂正について説明します。

メッセージングを使用可能にするための Oracle Wireless の構成

『Oracle9iAS Wireless 管理者ガイド』の「メッセージングの使用可能化」では、Oracle ホストのサービスについて説明されています。

Oracle9iAS Wireless のメッセージング機能および通知機能を評価するために、Oracle によりホストされたメッセンジャ・サービスを使用できます。Wireless インスタンスは、インストール時に、追加構成しなくてもこのホストされたインスタンスを使用できるように実装されます。ただし、評価期間の終了後に、ユーザー独自のメッセージ交換インフラストラクチャを設定する必要があります。

オンライン・ヘルプの表示

カスタマイズ・ポータルからアクセスすると、オンライン・ヘルプのページが空で表示されます（バグ番号 3215131）。

この問題を解決するには、オラクル社カスタマ・サポート・センターまでお問い合わせください。

Wireless Configuration Assistant の障害

注意： Wireless Middle-Tier のインストールを開始する前に、Infrastructure データベースに対してこの回避策を実行してください。

バグ 3232042 は、Wireless スキーマおよびデータのバージョンが Wireless によって判別されないために発生します。この問題を回避するには、Wireless Configuration Assistant を実行する前に、Wireless のバージョンを設定します。それには、Wireless のバージョン番号の PL/SQL プロシージャを Infrastructure データベースで実行します。次の手順に従います。

1. Wireless のパスワードを取得します。

これらのプロシージャは Wireless スキーマの一部であるため、最初に Wireless のパスワードを OID から取得する必要があります。次のようにパスワードを取得します。

- a. OID 管理ツールを起動します。
- b. OID Server (ias-pc2.us.oracle.com, port 389 など) を選択します。
- c. orcladmin/welcome1 としてログインします。

- d. 次のパスに従って Wireless のパスワードを取得します。

```
Entry Management-> cn=OracleContext-> cn=Products-> cn=IAS-> cn=IAS  
Infrastructure-> orclReferenceName=ias..-> orclResourceName=WIRELESS
```

- e. リソースをクリックし、password 属性を参照します。

2. Infrastructure データベースを修正します。

バージョンを正しく設定するには、ユーザー WIRELESS として Infrastructure データベースに接続し、次のコマンドを実行します。

```
exec PTG_UPGRADE_PKG.add_schema_version('9.0.2.8.0');  
exec PTG_UPGRADE_PKG.add_data_version('9.0.2.8.0');
```

